

## 論文

## 田辺尚雄によるアジア・沖縄の民族音楽調査

## —録音テクノロジーの発達を視点として—

Hisao Tanabe's Investigation of Asian and Okinawan Ethnic Music  
: From the Perspective of Improvements in Recording Technology

高橋美樹（高知大学教育学部・音楽学研究室）

Miki TAKAHASHI

*Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan*

## ABSTRACT

The aim of this paper is to explain how Hisao Tanabe's field recordings developed during his investigations into the ethnic music of Asia and Okinawa. Tanabe was the first Japanese expert to conduct field investigations as part of ethnic music research. Between 1921–1940, he conducted such investigations in Korea, Taiwan, Okinawa, Karafuto/Sakhalin, the South Sea Islands, Manchuria, and elsewhere in China. According to his travel journals, his investigative aims differed from country to country, and, depending on the circumstances of each location, he brought with him from Japan the equipment needed for temperament measurement, recording, still photography, and filming. This paper discusses the aims of the investigations in each country and the musical pieces recorded, as well as the relevant recording methods and equipment. In addition, the development of ethnic music investigations over a period of approximately 20 years is discussed in order to 1) explain improvements in recording technology, 2) identify trends in Tanabe's research, and 3) describe Tanabe's efforts to raise public awareness of the gramophone and records. The following three conclusions were reached.

First, among his seven Asian and Okinawan ethnic music investigations, it was only on his trip to Korea in 1921 that Tanabe used temperament frequency measurement equipment. Tanabe majored in physics and acoustics at the University of Tokyo and its affiliated graduate school and was involved in research into temperament in Chinese and Japanese traditional music. In 1920, he took part in a temperament investigation involving the musical instruments in the Shosoin (the treasure house at the Toudai-ji in Nara). The Korean trip, in August 1921, was only one month after the research results were published. The techniques he used in Korea to measure temperament were very similar to those used in the Shosoin and during similar investigations.

Second, Tanabe used portable recording equipment in Taiwan, Okinawa, Karafuto/Sakhalin, and the South Sea Islands. In 1922–23, he used a “Nippon-Dictaphone”(a recording and playback gramophone) for the investigations in Taiwan, Okinawa, and Karafuto/Sakhalin, and, in 1934, he used Hinohon recording and playback equipment in his investigations in the South Sea Islands. Notably, Tanabe acted as an advisor in the development of Nippon Shasei Chikuonki's “Nippon-Dictaphone.” The recording equipment's development was thus closely linked with the equipment's actual use in ethnic music investigations.

Third, when he gave lectures about his investigations, Tanabe interspersed his commentary on the music with gramophone recordings. This demonstrates that he made active use of the gramophone and records in his ordinary educational activity. For example, he used such records in class at the Toyo Music School in 1907. At a 1917 lecture on the history of the development of Japanese music, he used a mixture of gramophone records and live performance (singing and koto). He was highly active in efforts to raise public awareness of the gramophone and records, and he raised the technology's profile in the areas he visited during his investigations.

## はじめに

田辺尚雄は民族音楽学研究のための現地調査を日本人で初めて実施した人物である。1921(大正10)年～1940(昭和15)年にかけて、朝鮮、台湾、沖縄、中国、樺太、南洋、満州の民族音楽調査を実施した。

本研究の目的は、田辺のアジア・沖縄の民族音楽調査における現地録音の変遷を明らかにすることである。言うまでもなく、田辺が訪問した時期の朝鮮、台湾、樺太、南洋、満州は日本の領土であった。田辺が執筆した旅行記によると、調査目的は国によって異なり、調査地の状況に応じて、音律測定、録音、写真・映像撮影に関わる諸機材を日本から持参していた。本研究では各国の調査目的とその傾向を探り、録音した曲目、録音方法、録音機材について分析する。さらに、現地録音を実施する際、協力を得たレコード会社や放送局についても調査する。

田辺は調査から帰国後、その研究成果を雑誌『音楽と蓄音器(機)』に掲載し、著書『第一音楽紀行』1923、『島国の唄と踊』1927、『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』1968、『中国・朝鮮音楽調査紀行』1970などを通じて発表した。さらに、現地調査の録音音源を一部収録したSP『東亜の音楽』全10枚(コロムビア、1941)、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(東芝EMI、1978)を発売した。本研究では民族音楽調査における現地録音の音源が、これらの商業レコードにどのくらい採用されたのかも分析する。

筆者は田辺の1922年沖縄・八重山諸島の音楽調査について、沖縄県立芸術大学附属図書館・田辺文庫の資料を基に、その実態を明らかにした(高橋2017参照)。さらに、田辺が調査後、社会的に還元した研究成果について、JOAKラジオ「日本音楽史講座」、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』に焦点を当て論じた(高橋2019参照)。

特に高橋2017では、田辺が石垣島調査で使用した写声蓄音器(岩崎卓爾所蔵)が民俗学者・柳田国男から事前に送られていたものだったことに着目した。日本民俗学が民話・伝説の聞き取り調査で用いた録音方法を、民族音楽調査に応用していた。また、田辺は録音した八重山民謡《ジラバガス、ソウソウ、ジラバ》を1922年11月4日「啓明会第8回講演会:台湾及琉球の音楽に就きて」(於:日本工業倶楽部)の場で蓄音器により再生・公開した。沖縄調査における現地録音の詳細は明らかになったが、他の民族音楽調査も視野に入れた現地録音の位置付けが必要となった。

先行研究として、田辺の民族音楽調査全般は鈴木2019、朝鮮調査は植村1997、山本2009、山本2011、台湾調査は植村2003、劉2014、樺太調査は篠原・笹倉2007、篠原・笹倉2008が挙げられる。いずれも優れた論考であるが、20年間に及ぶ民族音楽調査を音律測定、録音、写真・映像撮影など音響・録音テクノロジーの視点から分析した研究は見当たらない。そこで、筆者は沖縄調査の研究結果を踏まえ、20年間の民族音楽調査の変遷について(1)録音テクノロジーの発達、(2)田辺の研究動向、(3)蓄音器・レコードの啓蒙活動、の視点から考察する。

研究方法として、田辺の民族音楽調査の目的とその成果を把握するために、田辺の著書、論文、レコード解説書等、文献資料を整理した。各国における現地調査の旅程、行動、調査協力者、聴取した音楽を概観した上で、現地録音の実態を調査する。

本研究では田辺による民族音楽調査の記録を基に、下記(1)～(27)の観点から整理した。

(1)調査期間、(2)調査国、(3)調査地域、(4)調査の動機、(5)調査の目的、(6)調査協力・人物、(7)調査協力・機関、(8)協力・放送局、(9)協力・レコード会社、(10)採譜した音楽、(11)録音した音楽、(12)撮影した音楽・舞踊・楽器、(13)音律測定した楽器、(14)調査地での講演会、(15)録音機材、(16)写真撮影機材、(17)映像撮影機材、(18)音律測定器、(19)持参したレコード、(20)購入したレコード、(21)現地で提供受けた映像・音楽・楽器・楽譜、(22)調査で入手した物、(23)成果◎研究発表、(24)成果◎講演、(25)成果◎論文・書籍、(26)成果◎レコード・CD、(27)成果◎ラジオ放送

本稿ではレコードや蓄音器など、録音・再生に関するテクノロジーの発達が現地録音に与えた影響を浮かび上がらせる。特に、蓄音器による録音技術を先駆的に導入した田辺の実践は、民族音楽学が録音・採譜・出版に依拠していた時代のフィールド・ワークの実態を解明する資料となり得る。

なお、引用文の旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。□は判読不明文字を示す。掲載する写真は全て筆者が撮影した。

また、台湾の少数民族に対する「生蕃」「蕃人」「高砂族」、樺太調査における「土人」など、各調査時点での呼称を本稿ではそのまま用いることをご了解願いたい。

引用の出典について、田辺尚雄の文献は「田辺」(姓のみ)、息子・秀雄の文献は「田辺秀雄」と区別して表記する。

## 1. 1921(大正10)年4月:朝鮮李王職・雅楽の音楽調査

田辺は1919年財団法人啓明会から「東洋音楽理論の科学的研究」の補助費として、3年間で6000円<sup>1)</sup>を受諾した(田辺1923a:1)。最初の現地調査地は朝鮮であり、1921年3月～4月李王職の雅楽を調査するため訪問した。同行者は学生の吉田他1名であった(田辺1970:45)。

「日本による植民地時代(1910～45)には李王職雅楽部(1911～45)が宮内省という日本の官庁下で雅楽を継承した。初期には、雅楽が存続の危機に直面したが」(山本2009:25)、1921年田辺が李王職の雅楽を調査した。その後、田辺が研究成果を世の中に発表した結果、「彼のそうした行動が李王職雅楽の存続問題に影響を与え、結果的に当機関は継続されることとなった」(山本2009:26)。例えば、調査の翌年には「音楽研究者として知られた理学士田辺尚雄氏が幾度か推奨した朝鮮の雅楽は近代頗る衰退して来たが宮内省では今1日附を以てなお研究の価値あるものとして特に新官制を施いて李王



職に雅楽師長を置き、雅楽部員待遇改善の途を開く事となった」(1922年4月1日『読売新聞』5)。

なお、田辺は1919年から4年間、宮内省楽部附属雅楽練習所の講師として音楽理論及び音楽史の講義を担当しており(蒲生1970:123)、調査の1921年時点も同職を務めていた。

本節は主に田辺1970、調査・講演内容を記録した『京城日報』(1906-1945:日本統治時代・朝鮮総督府の機関紙)を基に、(1)～(27)の観点により整理した。

### 1.1 朝鮮李王職・雅楽の音楽調査の実際

(1) 調査期間 1921年3月27日～4月17日

(2) 調査国 朝鮮(1910年～1945年は日本領)

(3) 調査地域 京城(現:ソウル)、平壤

(4) 調査の動機

宮内省楽部楽長・上真行から李王家編纂『朝鮮楽概要』が示され、李王職が財政困難に陥ったことにより、朝鮮総督府は李王職雅楽部の廃止を打ち出したことを田辺は知る。直接の動機を田辺は以下のように記している。

「雅楽のような古典の楽舞はいったん滅びたらばそれは永久に絶滅してしまう。たとえ音楽だけ楽譜に残しても、楽譜それ自体は絶対完全なものとはいえない。まして舞楽は楽譜だけでは完全に伝えられるものではない。今この記録を見ると李王家雅楽を世界の文化史上貴重な芸術であるように思われる。今総督府の意見によってこれを永久に亡ぼし去ることは日本政府の大なる責任であると思う。私は今すぐに朝鮮に行きこれをよく調査すると共に、その保存の必要なることを総督府に進言して極力その廃止を防止するように努めたいと思う」(下線部筆者)(田辺1970:28-29)

(5) 調査の目的 朝鮮李王家に伝わる李王職雅楽の調査

(6) 調査協力・人物

宮内省雅楽部楽長・上真行。『音楽と蓄音器』社社長・横田昇一。朝鮮総督府政務総監・水野錬太郎。朝鮮総督府・田中徳太郎。朝鮮総督府編集局・加藤。東大理科教授・中村清二。日本蓄音器会社支店支配人・佐野。雅楽師・長明完壁。金永煥。

(7) 調査協力・機関

財団法人啓明会。李王職。朝鮮総督府。李王職雅楽部。

(8) 協力・放送局 (9) 協力・レコード会社

該当する記録は見当たらなかった。

(10) 採譜した音楽

田辺1970:212-218には楽譜(一)「長春不老之曲」(一名歩虚子)一部初章、楽譜(二)「霊山会相」一部終章が掲載されている。だが、田辺は「以上2曲は昭和8年3月25日李王職雅楽部において採譜されたものを、当時私に提供されたものである」(田辺1970:218)と記しており、田辺自身による採譜ではない。(一)(二)と類似の楽譜が東京藝術大学に所蔵されており、この点については山本2011:241-242を参照されたい。

(11) 録音した音楽 該当する記録は見当たらなかった。

(12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

総督府専属の映画撮影班により、李王家古楽舞(祭礼楽と宴礼楽)の活動写真(映画)を撮影した。1921年4月12日李王職雅楽隊(奉常所)で宗廟・文廟の楽舞(雅楽、祭楽の舞楽、雅楽隊の管弦合奏)(宗廟の文舞・武舞、宗廟の武舞、軒架・登歌の各管弦合奏・特殊な楽器の奏法)を撮影した。1921年4月12日料亭明月楼の庭で妓生の宮中宴礼舞5種を撮影した。

田辺1970には多数の写真が掲載されており、下記4点には「著者撮影」と明記している。

第2図 撮影を待つ音楽人と舞人、4月12日奉常所庭にて

第3図「春鶯囀」撮影(左端は撮影機)4月12日明月館庭にて

第4図「春鶯囀」の舞姫、韓明王、明月館庭にて

第5図「伶舞」明月館庭にて(田辺1970:56-57)

1921年4月13日『京城日報』5には「宮内省音楽寮音楽講師理学士田辺尚雄氏は11日夜午後6時より京城神社に於ける伶人楽を観覧し12日は午前11時より李王職雅楽隊において雅楽隊演奏状況及妓生舞踏の朝鮮総督府の活動写真を撮影し12日夜7時より満鉄社交倶楽部の講演会に列席一場の講演を為せり」とある。

(13) 音律測定した楽器

李王家雅楽部で使用していた雅楽器について、同行した吉田や雅楽師の協力を得ながら、方響、鐘、編磬などの音律(振動数)を振動数測定装置により測定した。田辺は「朝鮮古楽器の音律測定ということは、私自身の研究にとって極めて重要な仕事」(田辺1970:45)と記した。

(14) 調査地での講演会

朝鮮調査22日間で全6回講演会を実施した。

①1921年4月6日、演題「音楽上より見たる日朝の関係」主催:京城日報社、場所:南山町高等女学校講堂、♪蓄音器・レコード使用

1921年4月6日『京城日報』5に広告と宣伝記事が掲載され、講演内容は1921年4月9日～13日『京城日報』に「音楽上に於ける内鮮の関係」と題して連載された。1921年4月6日『京城日報』5

の見出しは「蓄音器も聴ける音楽講演会」であり、「氏が東京から携えて来た各種音楽のレコードを交えて講演されると言えば定めし盛況を見ることであろう」と記した。

②1921年4月7日、演題「日本古楽と朝鮮雅楽との関係」場所：朝鮮総督府政務次官官邸、♪雅楽レコード使用

③1921年4月10日、演題「邦楽の過去と将来」主催：平南毎日新聞社、場所：平壤の高等女学校講堂、♪蓄音器・レコード使用

④1921年4月11日、演題「日本の雅楽と朝鮮李王家の雅楽との関係」場所：伯爵宋別邸、♪雅楽レコード使用

1921年4月13日『京城日報』5に本講演に関する記事が掲載された。

⑤1921年4月12日鉄道管理局の家族のための講演「音楽に関する通俗的な話」場所：鉄道学校講堂

⑥1921年4月13日、演題「家庭と音楽」場所：愛国婦人会会場 ♪蓄音器・レコード使用

1921年4月13日『京城日報』5に予告が掲載され、講演内容は1921年4月15日～27日『京城日報』に「日本の家庭と音楽」と題して連載された。また、1921年4月15日『京城日報』5には「蓄音機を以て實際を示し」、講演を撮影した同記事の写真でも蓄音器が確認できる。

(15) 録音機材 田辺は録音機材を持参していない。

#### (16) 写真撮影機材

「この間私も各場面の写真を所持のカメラで出来るだけ多数撮した」(田辺 1970:58)という記述があるが、メーカーや型番などカメラの詳細は不明である。

#### (17) 映像撮影機材

朝鮮総督府専属の映画撮影班という専門スタッフが撮影した。機材はフィルムが「李王職雅楽1巻(300 ミリ)、宮中宴礼舞2巻:上巻(220 ミリ):下巻(180 ミリ)」(田辺 1970:58)以外は不明である。

#### (18) 音律測定器

「学生の1人の吉田君が私の振動数測定装置を持って来てくれた」(田辺 1970:45)という記録があり、音律を測定した器械を「振動数測定装置」と称している。

#### (19) 持参したレコード

1921年4月6日京城日報社主催による講演「音楽上より見たる日朝の関係」(場所:南山の高等女学校講堂)の際、「持参の蓄音器レコード(日本の雅楽曲が多い)を使用してわが平安時代の雅楽と朝鮮の李王家の雅楽と比較しながら講演を行なった」(田辺 1970:48)。日本の雅楽のレコード<sup>2)</sup>とは、田辺が監修した『平安朝音楽レコード』(後述)だと推察される。

#### (20) 購入したレコード

1921年4月11日京城の「日本蓄音器会社支店に行き、朝鮮音楽レコードを調査し、その数枚を購入した」(田辺 1970:54)。日本蓄音器会社支店とは、1911年に朝鮮に進出した日本蓄音器商会(具・波田野 2011:48 参照)の京城支店<sup>3)</sup>を指すと思われる。1921年2月1日『京城日報』の日本蓄音器商会の広告には、見出し「ニッポノホンと驚印にご注意を乞ふ」と所在地「朝鮮京城本町三丁目:株式会社日本蓄音器商会:電話 1283 番」が記載されている。田辺は朝鮮音楽レコードを購入し帰国したが、その詳細は不明である。

#### (21) 現地で提供受けた映像・音楽・楽器

1921年7月9日啓明会主催による講演(後述)で「多数の写真、書籍、楽器を陳列展覽」(田辺 1970:95)している。自身で購入したものか、提供を受けたものかは不明である。

#### (22) 調査で入手した物

楽器店の安洞商店(京城:鐘路堅志洞 50 番地:店主・朴徳仁)で、玄琴、長鼓(チャング)(杖鼓)、手鼓、装飾用風鏡一對を購入し、金額は玄琴 35 円、長鼓 15 円、手鼓 2 円、風鏡 3 円で計 55 円であった(田辺 1970:46)。各楽器は田辺の東京の自宅へ郵送しており、田辺自身の帰国より先に楽器が到着していたという。

1921年7月9日啓明会主催による講演で陳列展覽した楽器の中に、安洞商店で購入した楽器も展示されていたと推察される。

(23) 成果◎研究発表 該当する記録は見当たらなかった。

#### (24) 成果◎講演

田辺の調査で撮影された活動写真は、1921年5月19日朝鮮総督府情報委員会により総督府第1会議室で試写された。その後、活動写真フィルムは田辺へ送られ、「私の手許にこのフィルム(『李王職雅楽』1巻、『妓生の舞』2巻)が総督府から書留小包で送られてきたのは6月初旬であった」(田辺 1970:95)。

調査の報告会として、1921年7月9日啓明会主催による講演「朝鮮李王家の古楽舞—我が宮中の舞楽との関係」が日本工業倶楽部にて開催された。多数の写真、書籍(『朝鮮楽概要』他)、楽器を陳列展覽し、朝鮮総督府専属の映画撮影班が撮影した活動写真を公開した(田辺 1921a 参照)。活動写真の構成は第1幕 李王家の雅楽、第2幕 宮中宴礼楽及び俗舞(上)、第3幕 宮中宴礼楽及び俗舞(下)であった(田辺 1921a:26)。第1幕は『李王職雅楽』1巻、第2幕と第3幕は『妓生の舞』2巻のフィルムを指す。また、この講演で田辺は朝鮮音楽と日本の雅楽のレコードを蓄音器で再生し、比較しながら参加者に解説した(田辺 1970:95)。この時使用した朝鮮音楽のレコードとは、1921年4月11日京城の日本蓄音器会社京城支店で購入したものと推察される。

また、1921 年 7 月 15 日「第 1 回教育學術活動写真及蓄音器大会」(主催:蓄音器世界社)(於:東京市神田区美土代町青年会館)第 1 部にて上記フィルムを上映し、田辺が解説した。大会ポスター(後述:図 1 参照)には「特ニ今回朝鮮総督府撮影李王家雅楽及宴楽映画ヲ拝借シ」とあり、大会プログラム(国立劇場所蔵)にも「李王家雅楽及宴楽」と朝鮮総督府撮影フィルムの記載がある。

なお、「その後数年間にわたり東京では国学院大学、慶応大学等、また大阪(朝日新聞社)や京都など各所でこの映画フィルムやその他の資料を用いて朝鮮雅楽について学術的講演を行なった」(田辺 1970:96)。1921 年 9 月 27 日神戸住吉の甲南学園にて「朝鮮李王家雅楽」の活動写真を映写した。1921 年 10 月 4 日大阪朝日新聞社に於いて「李王家雅楽及舞楽」に関する講演(主催:古典保存会)で蓄音器を使用し、活動写真を映写した(1921 年 6 月『音楽と蓄音器』8 巻 10 号:56)(1921 年 10 月 5 日『朝日新聞(大阪)』11)。

また、山本は朝鮮雅楽の講演について、下記 2 件を紹介した。

演題 「東洋音楽ノ古代ヨリ中世ニ至ル変遷ニ就テ」

講演日 大正 10 年(1921) 10 月 1 日

場所 東洋音楽学校(神田裏猿楽町)

内容 講演、活動写真。「李王家雅楽」「李王家宮中宴享舞(上)(下)」

演題 「朝鮮と李王家の雅楽と舞楽の活動写真及講演」

講演日 大正 10 年 10 月 3 日

場所 兵庫県住吉村観音林倶楽部

内容 講演、活動写真。「李王家雅楽」「李王家宴舞(上)(下)」(山本 2011:284)

なお、田辺は 1957 年 6 月 22 日「東洋音楽学会第 8 回大会」で映画「李王家の雅楽」を上映し、解説している(東洋音楽学会 2016:6 参照)。

## (25) 成果◎論文・書籍

田辺による主な著作物は以下の通りである。詳細は参考文献を参照されたい。

1921 「朝鮮李王家の古楽舞」『啓明会第 5 回講演集』。

1921 年 4 月「朝鮮李王家に伝はる古楽(1)」『音楽と蓄音器』8 巻 4 号。

1921 年 5 月「朝鮮音楽研究日記」「李王家雅楽隊の状況」『音楽と蓄音器』8 巻 5 号。

1921 年 6 月-9 月「朝鮮李王家に伝はる古楽(3)-(6 完結)」『音楽と蓄音器』8 巻 6 号-9 号。

1923 年 2 月-4 月「朝鮮音楽考(上)(中)(下)」『東洋学芸雑誌』38 巻 7 号-9 号。

1939 年 6 月「日支音律関係と李王家雅楽」『東洋音楽研究』2 巻 1 号

1970 「朝鮮(大正 10 年:1921)」『中国・朝鮮音楽調査紀行』

(26) 成果◎レコード・CD 該当する記録は見当たらなかった。

## (27) 成果◎ラジオ放送

1939 年~1940 年日本中央放送局では「東洋音楽鳥瞰」<sup>4)</sup>と題して番組プログラムを組み、「東洋音楽に関する放送をレコード演奏(解説付き)によって」(1939『東洋音楽研究』2 巻 1 号:87)第 1 回~第 12 回を放送した。「第 1 回 東洋音楽概観」は 1939 年 2 月 18 日、田辺による解説で放送された。1939 年 3 月 25 日「第 2 回 朝鮮の音楽」も田辺による解説であり、放送された楽曲は以下の通りである。

(第 2 回) 1939 年 3 月 25 日 解説:田辺尚雄

### ○朝鮮の音楽

(1)伽倻琴独奏「スナンチュグモリ」(2)雅楽「打鈴」(3)正楽「吹打」(4)雅楽歌「花編」(5)楽劇「春香伝」中の「十枝歌」(6)「勸酒歌」(7)大琴独奏「軍奴使令ナカヌンテ」(8)「遊山歌」(9)短歌「江山遊覧」(10)平壤「愁心歌」(11)「海州山念仏」(12)短簫独奏「念仏」(13)「農民歌」(1939『東洋音楽研究』2 巻 1 号:87)

山本によると、「13 曲の選曲は、民謡から宮廷音楽まで幅広く、全て田邊が調査時に購入した SP 音盤を音源としている」(山本 2011:285)。つまり、1921 年の朝鮮調査で購入したレコードを 1939 年のラジオ番組で活用した事例である。

## 2. 1922(大正 11)年 3 月~4 月:台湾・生蕃、中国福建省・廈門の音楽調査

田辺は 1922 年 3 月~4 月に台湾・生蕃、中国福建省・廈門の音楽調査を実施した。日本から調査に同行した者はいない。田辺は 1921 年 12 月から 1923 年 9 月まで文部省邦楽教育調査委員会委員囑託を務めており(蒲生 1970:123)、台湾調査の 1922 年時点も同職を務めていた。

田辺を迎える際、台湾の地元紙では次のように紹介している。

「近時は朝鮮、支那、インド、シャム等広く東洋音楽を専門に究めて居るが、此の方面には外国にも其人を見ない所で音楽の理論と実際とを兼ねたる点に於て、独り我国の第一人者たるのみならず、東洋音楽に就ては、実に世界的の人物である…中略…台湾総督府に於ても、氏の研究を助くる為め多分相当の便宜を与うる事となるであらう…中略…一般内台人の為には、時々音楽に関する講演会を開催して、氏が特に携帯する蓄音器により世界各国の新古音楽を紹介しつつ興味ある講演を試み一般の音楽的智識を啓発するに努め又家庭踊に関しては有志者の求めに応じて講習会を開催せらるべし」(下線部筆者)(1922 年 3 月 24 日『台湾日日新報』)

東京出発の前日に掲載された『台湾日日新報』には、台湾総督府から調査の便宜が図られること、世界の音楽を蓄音器レコードで紹介する講演会、家庭踊の講習会などが記された。田辺が事前に台湾側へ要望した事柄ではないかと推察される。他に、1922年3月26日『台湾経世新報』でも台湾音楽を研究する者が増加している点に触れ、田辺の来台が取り上げられた。

本節は主に田辺 1922 年 6 月:8-80、田辺 1923a、田辺 1982 を基に、(1)～(27)の観点により整理した。

## 2.1 台湾・生蕃、中国福建省・廈門の音楽調査の実際

(1) 調査期間 1922 年 3 月 25 日～4 月 26 日

(2) 調査国 台湾(1895 年～1945 年は日本領)

(3) 調査地域

基隆、台北、霧社、埔里社、高雄、台中、厦門、コロンス島

(4) 調査の動機

田辺は 1921 年当時、1922 年春に沖縄調査に出掛ける準備を進めていたが、1922 年夏に延期し、「その前に台湾の高砂族の音楽を調査することにした」(田辺 1982:122)。その理由を下記のように述べている。

「大正 10 年秋に台湾北部の高山シルビア山の麓に住むサラマオ社の高砂族の人達が、ある事件から同所駐在の日本の巡査の一家を悉く殺して、いわゆる首狩りを行ったということが、新聞で報じられた。そのとき高砂族の人々が勇壮な首狩り歌を歌い、かつ踊ったという記事を見て、実際首を切るときの歌はどんなものなのか知りた」と切望した。しかしそのころ台湾の高砂族は殆ど帰順してしまい、首狩りは殆どなくなってしまっており、唯僅かに北方のシルビア山附近にしか残っていない。それも遠からず帰順して、もはや首狩りなどは無くなって昔話となってしまうだろうとも記されていた。そこで私は一刻も早く、まだ首狩りが残っているとき、その実態を調べたいと思い、急に台湾に行くことを決心したのである」(田辺 1982:122)

(5) 調査の目的

「日本民族古代の音楽とマレイ人の音楽との関係を研究する一方、法として台湾生蕃の音楽舞踊を研究する必要がある」(田辺 1922 年 6 月:8)。「馬來人と日本民族の音楽的の関係を調べるために参ったのが、此生蕃の音楽を調べる目的」(田辺 1923a:6)。

(6) 調査協力・人物

田総督。賀来民政長官。『音楽と蓄音器』社主幹・横田昇一。菅井重五郎。須永克己。総督府理蕃課長・宇野。総督府学務課長・生駒。中央研究所動物部長・大島博士。鉄道部・石原技師。師範学校音楽

教諭・一條真三郎(筆者注:田辺は慎三郎と表記)。同・横田三郎。李延禧。台北市師範学校音楽教諭・張福興。理蕃課勤務・原田警部補。分署長・宮島警部。赤間。加福街長。大橋教育課長。草野警務部長。高雄州応理事課・草間。師範学校音楽教諭・南。下山。美術家・甲谷。師範学校校長・太田。内務局長・末松。台北博物館・森丑之助。師範学校教諭・山根。

(7) 調査協力・機関 財団法人啓明会。台湾総督府。台北師範学校

(8) 協力・放送局 (9) 協力・レコード会社

該当する記録は見当たらなかった。

(10) 採譜した音楽

田辺自身が採譜した楽譜は見当たらない。だが、現地で調査に協力した台北師範学校音楽教諭・張福興が採譜した《首狩出草の唄》《凱旋の唄》《歓迎の唄》《親睦の唄》の 4 曲の楽譜が「生蕃の歌謡」というタイトルで 1922 年 6 月『音楽と蓄音器』9 巻 6 号に掲載された。同ページに「この楽譜は台北師範学校教諭張福興氏が作譜されたものに多少の修正を加え、同氏の許可を得て茲に掲載した」という田辺の解説がある。これら 4 曲を清書した楽譜は田辺 1968:213 にも掲載された。

(11) 録音した音楽

1922 年 4 月 3 日宿泊した外車埕駅前の新高旅館で、持参した写声蓄音器の録音実験をした。「埔里公学校を卒業した本島人の女学生が 3 名許り校長に引率されて泊り合せて居たので、之を呼び寄せて卒業式の唱歌を唄って之れを写声器に吹き込んでもらった」(田辺 1922 年 6 月:21-22)

1922 年 4 月 4 日霧社ホテルにてタイヤル族ハック蕃の青年男女 7 人により、4 種類の歌を写声蓄音器に録音した。「吹込の成績は非常に良好であった。第 1 回の私の実験は成功したのである」(田辺 1922 年 6 月:31)。

1922 年 4 月 5 日霧社ホテルにてタイヤル族霧社族パーラン社の蕃人 3、40 名男女により「先ず初めに歌を沢山唄ってもらい、その中で次の 4 曲を写声蓄音器に吹込んだ。此の吹込みも非常に立派に成功した」(田辺 1922 年 6 月:37)。

1922 年 4 月 7 日ある蕃舎でサオ族水社石印の歌を写声蓄音器に録音した。5、6 人の娘たちによる《招反来遊の唄》《親睦の唄》の 2 曲である。

1922 年 4 月 7 日宿泊した涵壁楼にて、サオ族ト吉の「老蕃(名はマカイトンという、化蕃の頭目の親であるということである)に種々の歌を唄ってもらい、次の 4 曲を吹き込んだ(田辺 1922 年 6 月:47)。写声蓄音器に録音したのは《出草(即ち首狩出陣)の唄》《凱旋の唄》《歓迎の唄》《耕作の唄》の 4 曲である。田辺は「之等は非常に元気があって面白い。特に出草の唄は語気激して凄気人に迫る



ものがある。それ故唄は若者の面前では一切唄わせない。そこで特に此の老翁を船で此の宿まで連れて来て、誰も周囲に居ないようにして之を唄わしめたのである」(田辺 1922 年 6 月:48)と記した。

また、「化蕃及び此のト吉老人の唄については嘗て張福興君がワザワザ台北からオルガンを持参して中之島に 1 週間籠って之を調査し、その旋律を洋楽譜に採られた」(田辺 1922 年 6 月:48)。その成果が先述した(10)台北師範学校音楽教諭・張福興の採譜による《首狩出草の唄》《凱旋の唄》《歓迎の唄》《親睦の唄》の楽譜である。

1922 年 4 月 9 日ライ社の警官駐在所(横峯警部補の宅)の縁側にて、パイワン族ライ社の蕃女 3 人による《ボアリパンの唄》《シナロアンの唄》《オリジユマへの唄》3 曲を写声蕃音器に録音した。「私は自分の持って行った写真器を出して之を撮影して居たら、蕃人共が寄って来てその写真器を非常に面白がって眺めて居た。30、40、50 位の大の男が宛かも小学校の子供のように面白がってキャッキャと声を上げて写真器をのぞいて居る。茲に掲ぐる写真はその時に写したものの 1 つである」(田辺 1922 年 6 月:56)。田辺 1922 年 6 月:55 に写真「ライ社の蕃人」が掲載されているが、不鮮明なため写声蕃音器を覗く人々の様子を確認できない。

#### (12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

田辺 1968:173-252 には下記の写真が掲載されている。

「香港丸船上に手の著者 大正 11 年(1922)3 月 28 日」(1922 年 6 月「口絵写真」にも掲載)

「台湾：楽器 左より口琴、鼻笛、竹笛、弓琴(生蕃ツォウ族タパン社)」(1922 年 6 月「口絵写真」、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』にも掲載)

「台湾：蕃女 敵蕃の首を持って踊る(タイヤル族霧蕃社パーラン社にて)大正 10 年(1921)サラマオ蕃討伐後」(1922 年 6 月「口絵写真」、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』にも掲載)

「台湾：敵蕃の首を前にして吹く首切笛(タイヤル族マレッパ蕃)」(LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』にも掲載)

「第 1 図 台車」(田辺 1922 年 8 月 5 日、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』にも掲載)

「第 2 図 蕃童学校の校庭」

「第 3 図 パーラン社頭目の家(右は頭目の娘)」(田辺 1922 年 6 月:35、田辺 1922 年 8 月 9 日にも掲載)

「第 4 図 蕃人の娘」

「第 5 図 水社化蕃の杵楽」(田辺 1922 年 8 月 11 日、1922 年 6 月「口絵写真」にも掲載)

「第 6 図 蕃地の吊橋(はるかに新高山を望む)」(田辺 1922 年 6 月:47 にも掲載)

「第 7 図 ライ社蕃人護衛隊」(LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』にも掲載)

「第 8 図 ライ社蕃人の踊」

「第 9 図 孔子廟大成殿」(田辺 1982:142 にも掲載)

「第 10 図 台湾の芸姐」

上記以外の写真として、田辺 1922 年 6 月:8-80 に「霧社人止の関」「霧社全景」「蕃舎」「パーラン社蕃人の踊」「蕃界を去る記念写真:右より原田警部補、前方の方は皆生蕃銃手、横田氏、田辺氏」「日月潭の全景」「蕃地の吊橋」(田辺 1968:216 にも掲載)「ライ社の蕃人」が掲載された。

LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』には上記以外に「30. パイワン族の踊り」、田辺 1982:140-143 には「外車埕より埔里社に向う台車線路」「霧社高砂族の踊り」「赤坎楼下にある台南小学校」「海岸」「白鹿洞」「コロンス島」が新たに掲載された。

なお、1923 年 3 月 25 日啓明会主催による講演「台湾及琉球の音楽に就きて」(於:日本工業倶楽部)では「生蕃状況写真 数葉」が紹介された(田辺 1923a:40)。

(13) 音律測定した楽器 該当する記録は見当たらなかった。

#### (14) 調査地での講演会

台湾調査 33 日間で全 7 回講演会を実施した。

- ①1921 年 4 月 1 日、演題「音楽の文化的使命」場所:基隆の公会堂
- ②1921 年 4 月 6 日、演題「音楽の文化的使命」場所:埔里小学校講堂
- ③1921 年 4 月 11 日、「音楽講演会」場所:高雄街役場の講堂
- ④1921 年 4 月 12 日、演題「音楽の文化的使命」場所:台中市役所内の会議室
- ⑤1921 年 4 月 14 日、演題「家庭に於ける音楽」主催:基督教青年会婦人会、場所:第一高等女学校
- ⑥1921 年 4 月 14 日、演題「文化生活より見たる音楽」主催:台湾総督府教育会、場所:医学専門学校講堂
- ⑦1921 年 4 月 15 日、「蕃音器音楽会」(筆者注:レコードコンサート)場所:附属小学校講堂 ♪蕃音器・レコード使用

⑦「蕃音器音楽会」の開催について、台湾の地元紙では次のように予告した。

「近時東都に於ては蕃音器熱が非常に高まり名曲が到着する毎にレコード、コンサートを開いて一般の耳を教育すると云うような傾向が現れてきたが凡てに於て遅れ勝ちな台湾ではまだ蕃音器の真価を理解し之によって真の音楽を味うと志す人士が少なくない様に見える、当地在住の音楽学校出身者は大に之を遺憾とし田辺氏に乞うて遥々持参した名曲の公開を懇願すると同時に正式のレコード、コンサートを開くことを慫慂した、同理学士はこれを快諾した上に曲の形式其他に関し一々説明の労を取る旨をも申出られたの

で明後 15 日午後 2 時から附属小学校講堂に於て左記プログラム通りのレコード、コンサートを開催する事になった」（下線部筆者）（1922 年 4 月 13 日『台湾日日新報』）

上記の記事では続けてプログラム曲目 14 曲（他に番外 3 曲）を掲載した。「第 1 部」はワーグナーのオペラ「ローエングリン」から管弦楽、エンリコ・カルーソーの《オー・ソレ・ミオ》、ラフマニノフのピアノ独奏、ハンス・キンドラーのチェロ独奏など 6 曲。

「第 2 部」はフィラデルフィア・シンフォニーオーケストラのワーグナー、オペラ「リエンツィ」序曲、ヤッシャ・ハイフェッツの《トルコ行進曲》ヴァイオリン独奏、ラピチノの《ユーモレスク》ハープ独奏、アメリータ・ガリニクルチのドニゼッティ オペラ『ランメルモールのルチア』第 3 幕マッド・シーン〜狂乱の場、フリッツ・クライスラー、エフREM・ゼンバリストのヴァイオリン独奏、グリーンジャーのリスト《ハンガリー狂詩曲第 2 番》、ニューヨーク、グランドオペラ合唱団のグノー、オペラ「ファウスト」より《兵士の合唱》など 8 曲。番外は「新日本音楽」宮城道雄による箏曲《紅薔薇》《ひぐらし》《落葉の踊》とある。

一方、田辺は「蓄音器音楽会」開催の経緯について、以下のよう

に述べた。

「今回私が蓄音器のことにについて盛んに宣伝をやったので、之を機会にして台湾で初めてのレコード、コンサートを開催しようという議が起り、レコードの選択や番組を作ることを依頼され、万事は私が高雄の旅に居る時に一條氏と共に選んだのである。但し之れには私の持って来たレコードは 1 枚も用いずに、凡て当地に在住される方々の所持されるもののみから選んで曲目を作ろうという計画である。…中略…私が 40 分間程蓄音器の進歩及びその効果について講演し、それから 14 曲（別に番外として宮城道雄氏の新箏曲 3 曲）の西洋曲（孰れも世界第一流の大家の歌奏されたもの）を一々私の説明で演奏した」（下線部筆者）（田辺 1922 年 6 月：71）

1921 年 4 月 15 日「蓄音器音楽会」では本当に「私の持って来たレコードは 1 枚も用いずに、凡て当地に在住される方々の所持されるもの」を使用したものであろうか。この点には疑問が残る。なぜなら、「田辺氏に乞うて遥々持参した名曲の公開を懇願する」（1922 年 4 月 13 日『台湾日日新報』）と予告に掲載されていたからである。宮城道雄の新箏曲 3 曲は田辺が持参したレコードを使用したと推察される。なお、田辺と宮城の関係については、田辺 1982:264-268 を参照されたい。

#### (15) 録音機材

調査後の旅行記に「小生持参の写声蓄音器」（田辺 1922 年 6 月：21）とあり、「私は之れ（筆者注：蝋管の旧式蓄音器）とは全く違って最近

の平円盤蓄音器を用いました。それで写声蓄音器という器械を持参しました。あれは従来余り使ったことがないので、兎に角使ってみようと思って、吹込む機械と蝋板を 15、6 枚持って参りました」（下線部筆者）（田辺 1923a:14-15）。1922 年台湾調査は田辺にとって、写声蓄音器を初めて使用した民族音楽調査だった。田辺が実際に使用した写声蓄音器は京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターに所蔵されている。写真 1、写真 2 を参照されたい。

田辺は写声蓄音器について、下記のように述べた。

「私が録音のために持ち歩いた器械は、普通の手さげポータブルを改造して、そのサウンドボックスに録音針をつけた簡易なもので、それを『写声蓄音器』と称していた。私の友人の工藤豊三郎くん（簡易な手廻し蓄音器を発明して特許を得た技術者）の設計で製作したもので、前年（大正 11 年）の台湾や沖縄の旅行にも使用した器械である」（下線部筆者）（田辺 1982:283-284）

「私は家庭用のラッパ（手廻し機）の機械の蓄音器（手揚げ用）を買い求め、それに吹込み装置を自分で工夫して取り付け、これを蝋盤に録音するように作りかえた。但し装置を簡単にするためにエデソン式の深淺溝録音にした」（下線部筆者）（田辺 1978:1）

田辺は写声蓄音器の設計・製作者を「工藤豊三郎」と述べている。だが、長男・秀雄は「発明者は沢柳猛雄氏、当時小生宅の筋向いに住んで居られた」（田辺秀雄 1978a:2）と記した。写声蓄音器の製作者の記述が父子で異なるが、他に手掛かりがないため特定は困難である。また、秀雄は写声蓄音器の構造について「小型箱形の喇叭式蓄音器に別に録音用喇叭（ホーン）と、縦振動の溝を切るカッターを備えたもの」（田辺秀雄 1978a:2）と解説した。さらに、現地録音した蝋盤の音声を聴取するためには「数回の鍍金を繰り返して、金属製の原盤を作り、それをシュラック盤にプレスするという面倒な工程を要した」（田辺 1982:283）。田辺はこの原盤制作を懇意にしていた日東蓄音器株式会社に依頼した（高橋 2017:171 参照）。秀雄によると「一部を除いて各 1 枚しかプレスしていない」（田辺秀雄 1978a:2）という。なお、使用した写声蓄音器と蝋盤は田辺秀雄 1978a:2-3 で確認できる。

#### (16) 写真撮影機材

「自分の持って行った写真器」（田辺 1922 年 6 月：56）とあるが、撮影機材の詳細は不明である。

#### (17) 映像撮影機材 (18) 音律測定器

該当する記録は見当たらなかった。

#### (19) 持参したレコード

調査に向けた予告として、「氏は日本支那印度等の東洋音楽及び西洋音楽のレコードを携え蕃人音楽研究の傍各都市にて一般人の

希望に応じて音楽に関する講演会を開き、その蘊蓄の一端を披歴し興味深き講演を試みる予定である」(1922 年 4 月『音楽と蓄音器』57)と掲載された。

旅行記に「私は多数のビクター、レコードを持って居た」(田辺 1922 年 6 月:10)、「食後に又始めの客間に戻って雑談などしながら蓄音器をやった。始めに私が内地から持参した西洋曲を数枚やり」(田辺 1922 年 6 月:18)とある。「西洋曲」の詳細は不明だが、西洋音楽レコードを持参していたことは間違いない。

田辺はビクターの SP レコードについて、下記のように述べた。

「アメリカのビクターレコードから、世界第一流の音楽家のレコードが赤盤(red label)として続々輸入されてきた。その一手取次販売店は銀座の十字屋楽器店である。私は明治 37、8 年、東京音楽学校選科時代から平素十字屋に出入りして、その社主倉田繁次郎氏とは懇意であったので、新盤が輸入される毎に、直ぐに知らせてもらって、すぐ駆けつけて珍しい盤が他人に取られないうちに早く買い取ることになっていた。それは最高級品は 1 種類 2、3 枚程度しか入って来ないからである」(田辺 1982:240)

日本ビクターが 1927 年に設立される以前のことである。「米国ヴィクター盤は、セールフレーザ社が総代理店になって輸入され、一番洋楽ファンに熱烈な歓迎を受けた。しかし当時の輸入盤は 1 枚 5 円以上もする大変高価なもので、買うのはブルジュアに限られていた」(岡田 1993 年 2 月:90)。実際、田辺も「当時赤盤は 12 吋盤が 7 円…中略…、10 吋盤が 5 円…中略…普及盤の黒盤は 12 吋 3 円、10 吋 1 円 50 銭くらいであった」(田辺 1982:240)と記した。1904(明治 37)年以降、田辺が個人的に購入していた多数のビクターレコードを台湾調査に持参したのである。

## (20) 購入したレコード

「厦門で沢山のレコードを得て参りました」(田辺 1923a:7)とあるが、詳細は不明である。

## (21) 現地で提供受けた映像・音楽・楽器

田辺は 1921 年 4 月 15 日に「総督府に保管される『蕃人の踊』『蕃童通学の光景』『製塩事業』などの活動写真を見せてもらい、その中で『蕃人の踊』の 1 巻を私に複写してもらうことをお願いした」(田辺 1922 年 6 月:71)。1922 年 4 月 22 日『台湾日日新報』には「台湾教育会では昨 21 日内地に帰還した宮内省雅楽部講師田辺理学士の本島に於ける調査研究に資する為此程撮影した蕃人舞踊の活動写真フィルム 300 尺を同氏に贈呈した」とある。依頼していた活動写真フィルムの複写を確かに受け取っている。

さらに、(12)で述べた 1923 年 3 月 25 日啓明会主催による講演「台湾及琉球の音楽に就きて」で「(4)活動写真 (イ)生蕃の踊(台湾総督府撮影)」(田辺 1923a:40)が上映された。(イ)生蕃の踊の活

動写真とは 1922 年 4 月 21 日台湾教育会から贈呈されたフィルムであろう。

また、厦門にて「4 月 18 日。晴。午前中藤井領事及び令嬢と共にコロンス島を散歩し、午後林木土氏が訪ねて来られて多数の御前清曲の蓄音器レコードを持参され、之を聞いて後その中の数枚のレコードを頂戴した」(田辺 1922 年 6 月:77)とあるが、レコードの詳細は不明である。

## (22) 調査で入手した物

田辺 1922 年 5 月 15 日『時事新報』には田辺が台湾で入手した楽器を並べ、演奏する写真が掲載された。写真の解説として「左図は田辺尚雄氏が台湾土産を取らぬで居る有様で、手にせるは蕃人の鼻笛、前は各種の笛や、首袋、台中芝居人形等」とある。

また、1923 年 3 月 25 日講演「台湾及琉球の音楽に就きて」では台湾関連として下記が陳列された。

「陳列品目録」生蕃之部 (1)首切笛(タイヤル族ハック蕃マシトバオン社) (2)糸琴(同右) (3)糸琴(タイヤル族霧社蕃パーラン社) (4)蕃布 1 反(同右) (5)梓弓及矢(同右) (6)独楽 2 個(同右) (7)堅笛(パイワン族ババウバ蕃ライ社) (8)蕃刀(同右) (9)首袋(同右) (10)煙管彫刻剥製(同右) (11)鼻笛 1 組 2 本(パイワン族) (12)土人形 3 個(ヤミ族紅頭海嶼)、掛図(1)台湾旅行地図(田辺 1923a:41-42)

(1)首切笛、(7)堅笛、(9)首袋、(11)鼻笛 1 組 2 本は上記の『時事新報』の解説と共通する。

1921 年 4 月 2 日「台北の市街を散歩し絵葉書などを買って 11 時に帰った」(田辺 1922 年 6 月:19)とあり、2.1(12)で紹介した写真の中に、台北市で購入した絵葉書が含まれている可能性がある。

(23) 成果◎研究発表 該当する記録は見当たらなかった。

## (24) 成果◎講演

調査の報告会として、1923 年 3 月 25 日啓明会主催による講演「台湾及琉球の音楽に就きて」が日本工業倶楽部にて開催された。多数の楽器や地図を陳列展示し、台湾総督府撮影の「生蕃の踊」を上映した。『啓明会第 8 回講演集』には「(一)蓄音器演奏 (イ)生蕃吹込音楽 数曲」とあり、写声蓄音器により田辺が録音した音源を再生した記録である。

## (25) 成果◎論文・書籍

田辺尚雄 1922 年 6 月「台湾音楽研究旅行記」『音楽と蓄音器』9 巻 6 号

田辺尚雄 1923 「台湾と厦門」『第一音楽紀行』

田辺尚雄 1968 「台湾と厦門」『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』

田辺尚雄 1982「台湾高砂族音楽調査/中国福建省廈門行」『続 田辺尚雄自叙伝』

田辺尚雄 1922 年 12 月～1923 年 6 月「台湾音楽考(1)～(6)」『學藝』40 巻 495 号～501 号

1922 年 4 月「蠻人音楽研究の爲 田辺理学士の渡台」『音楽と蓄音器』9 巻 4 号

## (26) 成果◎レコード・CD

田辺は調査後「蓄音器を持って往ったので蕃人の唄も代表的のものは殆ど皆完全に蓄音器に吹き込むことが出来た」(1922 年 4 月 27 日『時事新報』)と語っている。蓄音器に録音した音源は田辺秀雄により、1977 年東洋音楽学会「第 240 回定例研究会」で公開された(田辺秀雄 1978b:160-161)。

さらに、台湾、沖縄、樺太、南洋の音楽調査で録音した音源を集約し、1978 年田辺尚雄(録音・調査)、田辺秀雄(企画・監修)により、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』を発売した。

## (27) 成果◎ラジオ放送

日本中央放送局 1939 年 6 月 3 日「東洋音楽鳥瞰」では「第 4 回アイヌ音楽と歌謡／台湾の音楽」放送した。「アイヌ音楽と歌謡」は久保寺逸彦が解説した。「台湾の音楽」は田辺が解説し、放送された楽曲は以下の通りである。

### (第 4 回) 1939 年 6 月 3 日

○アイヌ音楽と歌謡…中略…

○台湾の音楽 解説:田辺尚雄 (1)ミヤトグス祭礼の歌 (2)旧い出陣の歌 (3)鼻笛の曲 (4)太湖船 (5)小曲「嘆烟花」 (6)劇楽「女告状」(1940『東洋音楽研究』2 巻 2 号:136-137)

朝鮮調査と同様、台湾調査で購入したレコードをラジオ番組で活用した可能性がある。

## 3. 1922(大正 11)年 7 月：沖縄・八重山諸島の音楽調査

田辺は 1922 年 7 月～8 月に沖縄・八重山諸島の音楽調査を実施した。同行者は慶応大学生の大橋道夫で、岡山県から合流した。『沖縄タイムス』『琉球新報』など沖縄県の地元紙で、田辺は宮内省楽部附属雅楽練習所・講師と紹介された。本節は主に田辺 1922a 年 9 月、田辺 1922b 年 10 月、田辺 1922c 年 11 月、田辺 1923j 年 1 月、田辺 1923k 年 2 月、田辺 1923l 年 3 月、田辺 1923a、田辺 1968:253-319 を基に、(1)～(27)の観点により整理した。

### 3.1 沖縄・八重山諸島の音楽調査の実際

- (1)調査期間 1922 年 7 月 20 日～8 月 13 日
- (2)調査国 日本
- (3)調査地域 沖縄県(沖縄本島、宮古島、八重山諸島)

## (4)調査の動機(高橋 2017:150-152 参照)

「田辺は 1920 年～1922 年にかけて、沖縄音楽に造詣の深い沖縄出身者と出会う機会が増え、研究の動機が生まれつつあった」(高橋 2017:150)。田辺は 1920 年東洋音楽学校の夏期講習会で沖縄出身の中原はる子と出会い、沖縄音楽の研究を勧められる(田辺 1922a 年 9 月:35 参照)。さらに、田辺直筆の『音楽見聞録』(国立劇場所蔵)には、1920 年 9 月に中原から聞いた三線の調弦、琉球箏の調弦、琉球の箏曲《六段》と日本本土の《六段》を比較した記録がある。また、中原を通して沖縄の音楽教育に貢献した金城義昌(のち中村完爾と改名)と交流を深め、「沖縄の中原女史や金城君などから送られた琉球音楽の記録書籍楽譜等に見ても、八重山群島に非常に見事な優秀な民謡が存在することを見て、是非之を調べたいと思って居た」(田辺 1922a 年 9 月:36)と記した。

また、田辺は日本民俗学の第一人者で 1921 年 1 月～2 月に沖縄を調査した柳田国男(1875-1962)から、1921 年 3 月 18 日「三越 3 月の流行会」の場で八重山民謡の研究を勧められる。柳田から八重山の民俗学者・喜舎場永珣(1885-1972)や石垣島測候所長・岩崎卓爾(1869-1937)を紹介され、翌 1922 年 8 月 1～3 日の八重山調査では 2 人が田辺の案内役を務めている。

さらに、1921 年 4 月 18 日「三越 4 月の流行会」で柳田が「八重山の歌と歴史」と題し講演した際、八重山出身の言語学者・宮良当壮(1893-1964)が自ら三線伴奏で八重山諸島の民謡を歌った。

柳田は宮良を田辺に紹介し、後日、宮良は田辺の自宅で《川平節》他八重山民謡を生演奏している。田辺が沖縄音楽の中でも、特に八重山民謡に深く興味を抱いた背景には、柳田からの強力な勧誘と宮良による生演奏体験が存在する。そして、それらの体験が田辺を沖縄・八重山調査へ駆り立てていった。

## (5)調査の目的

田辺は沖縄調査の目的を「琉球における歴史的の研究と八重山における世界的民謡を調べる、この 2 つの目的を以て旅行をした」(田辺 1922d 年 9 月 24 日『東京日日新聞』)と記した。調査は八重山民謡が「世界的民謡」に匹敵することを確認すべく実施されていた。

また、沖縄音楽研究家・山内盛彬(1890-1986)によると、「先生は『予は琉球音楽の保存の価値があるや否やの鑑定に來たのであって、詳しい調査は他日技師を使う考である。吾人は恰も参謀本部の仕事をする様なもので、他の人に任す可きだ』と言われた」(山内 1922 年 10 月:77)。山内は 1915 年東洋音楽学校(東京音楽大学の前身)在学中から長きに亘り田辺に師事した人物で、沖縄本島調査では田辺の説明役を担った。さらに、田辺は「今度の琉球音楽の調査は□□系統其の他を調べ度いと思って簡単な吹込みをして貰った後技師を遣って完全にしようと思うのです」(1922 年 7 月 27 日『沖縄タイムス』)と述べた。この 2 件の記事からは、沖縄音楽に保存の価値があるかどうかを総合的に判断するために調査を実施したのであり、本格的な研究調査は他の人に委ねたい。そして、



レコード技師を派遣し個々の音楽を録音した後、レコード制作により調査を完成させたい。つまり、田辺は最初から沖縄音楽を専門的に研究する意向はなく、自ら写声蓄音器で録音した後、レコード技師により本格的なレコード録音することを最終目標としていた。

民族音楽調査の目的について、上記のように消極的でやや受け身の姿勢を語っているのは沖縄調査のみである。

#### (6) 調査協力・人物

【沖縄本島】山内盛彬。金城義昌。上間正雄。尚琳男爵。第二中学校長・魚住淳吉。護得久朝惟。高安朝常。伊江朝薫。大山口篤。金武良仁。高嘉良亀。豊見山安均。読谷山朝慶。浦添朝題。古堅盛珍。城間恒有。伊差川世瑞。知念績仁。饒平名光徳。安元詠蟬。富原盛勇。玉城盛重。新垣松含。【石垣島】喜舎場永珣。岩崎卓爾。

#### (7) 調査協力・機関 財団法人啓明会。沖縄県庁。沖縄タイムス社

#### (8) 協力・放送局 (9) 協力・レコード会社

該当する記録は見当たらなかった。

#### (10) 採譜した音楽(高橋 2017:165-166 参照)

1922 年 8 月 2 日石垣島測候所の庭で八重山の作業歌ユンタ、ジラバを中心に、島の人々による音楽演奏会が開かれた。田辺は《ジラバガス、ソウソウ、ジラバ》《浦船ジラバ》の 2 曲を数字譜で採譜した。沖縄県立芸術大学附属図書館・田辺文庫には再検討・確認を繰り返しながら採譜を続けた数字譜が所蔵されている。調査後、数字譜が五線譜化され、雑誌や著書に掲載されたが、そのプロセスについては高橋 2017:165-166 を参照されたい。

#### (11) 録音した音楽

1922 年 7 月 28 日那覇市第二中学校長・魚住淳吉宅で琉球音楽調査会が開催され、琉球古典音楽や沖縄民謡を代表する演奏家たちが参加した。田辺は城間恒有《揚作田節》、伊差川世瑞《干瀬節》、富原盛勇《宮古子》《テマド節》を写声蓄音器で録音した。「私は持参した写声蓄音器を取出して、之等の音楽家に次の 3 曲を吹込んでもらった。此の吹込器械は此の春に台湾の蕃地へ持って行ったものと同一の品であるが、なにしろ気温が余り高過ぎて、蟬盤が極度に軟かくなって居たものであるから、その吹込成績は非常に悪かったのは残念であった」(田辺 1923k 年 2 月:36)。

また、田辺は 1922 年 8 月 2 日石垣島測候所で岩崎卓爾から写声蓄音器を貸借し、八重山民謡《ジラバガス、ソウソウ、ジラバ》を録音した。「岩崎氏へは前に柳田国男氏から写声蓄音器を 1 台送ってあったのである。然し何しろ 100 度以上の高温が続くので、蟬の成分の一部が蒸発したと見えて、ボロ々々になってしまつてよく吹込めなかったのは残念であった」(田辺 1923k 年 2 月:36)。つまり、石垣島では田辺が持参した写声蓄音器ではなく、事前に柳田から岩

崎へ送ってあった写声蓄音器を使用し、八重山民謡を録音した。那覇市での録音は「蟬盤が極度に軟かく」なり成功しなかったことがその理由である。

田辺は沖縄調査における録音について、次のようにも記した。

「私は今夏琉球から宮古島石垣島を経て台湾に行った。此の旅行には少数のレコードを携えて居たが、それが多少傷んだようである。殊に写声機と其の吹込用蟬盤を携えたので、その蟬盤は頗る不成績であつた。一層著しい例は石垣島測候所長の岩崎卓爾氏が写声機を持って居られたが、その蟬盤は全くボロボロに脆いものに変質して居て殆んど役に立たない位であつた。之れは同島が単に高温であるというだけでなく、非常に湿気の多い地方であるから、恐らく之れは湿気の為めに蟬が変質したものであらうと考えたので、その事に就て調べて見たいと思つて居た」(下線部筆者)(田辺 1922b 年 10 月:2)

沖縄が高温多湿であるため、田辺持参の蟬盤や石垣島で使用した蟬盤は、音を記録する蟬そのものが傷み変質し、録音が上手くいかなかった。その原因を探っていたところ、「数年前にゼームス・スコット氏が此のことに就て研究した結果が或る米国の蓄音機雑誌に載つて居たから、その大体のことを茲に紹介して置く」(田辺 1922b 年 10 月:2)と、レコード物質と湿度の関係を『音楽と蓄音機』9 巻 10 号に掲載した。

#### (12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

1922 年 7 月 27 日尚侯爵家で尚家所蔵の古楽器を拝見し写真撮影した。古蛇皮線、古蛇皮線、古胡弓及弓、横笛、銅鑼、嗶嘰、太鼓、銅鈸、三鈺、拍板、八橋流箏の楽器を「私と大橋君とそれぞれ別々に之を細かく写真に撮影」(田辺 1922c 年 11 月:42)した。また、首里城を参観した際「携帯した写真機で彼方此方を写し」(田辺 1922c 年 11 月:43)、円覚寺へ移動した。

1923 年 3 月 25 日啓明会主催による講演「台湾及琉球の音楽に就きて」が開催されたが、沖縄調査で撮影した写真、活動写真フィルムは披露されなかった。

#### (13) 音律測定した楽器 該当する記録は見当たらなかった。

#### (14) 調査地での講演会

調査 25 日間に全 2 回講演会を実施した。

①1922 年 7 月 28 日、演題「音楽の文化的使命」場所：那覇市高等小学校 ♪森楽器店から貸借した蓄音器を使用(田辺 1923k 年 2 月:16)

②1922 年 8 月 1 日、演題「音楽の文化的使命」場所：八重山島庁(田辺 1923l 年 3 月:30)

#### (15) 録音機材

1 台目の持参した写声蓄音器(写真1・写真2参照)は台湾調査で使用したものと同一である。

2 台目は調査前に柳田から岩崎へ送っていた写声蓄音器である。1922 年当時、柳田は民俗学調査や民謡調査において写声蓄音器を録音機材として使用していた。大藤・柳田編 1981:34 では、柳田が遠野物語の話者・佐々木喜善(岩手県在住)に贈った蓄音機用写音機の写真が確認できる。当時音声レコード盤に録音する機器を「蓄音機用写音機」「写声蓄音器」「音声蓄音機」などと呼び、呼称は定まっていなかった。柳田が岩崎へ送った写声蓄音器も同型のものと推察される。

#### (16) 写真撮影機材

写真機と記載されたが、機種など詳細は不明である。

#### (17) 映像撮影機材 (18) 音律測定器 (19) 持参したレコード

該当する記録は見当たらなかった。

#### (20) 購入したレコード

田辺は那覇市内で調査した 1922 年 7 月 26 日～30 日に大阪蓄音器株式会社(白熊印ナショナル・レコード)制作の SP レコード 6 枚を森楽器店で購入した(田辺 1923k 年 2 月:15-16)。この SP は 1915 年に録音・発売された商業録音による最古の沖縄音楽レコードである(高橋 2011 参照)。田辺文庫には SP 6 枚を所蔵しており、詳細は高橋 2020 を参照されたい。

#### (21) 現地で提供受けた映像・音楽・楽器

1922 年 7 月 30 日尚琳男爵家から三線、城間恒有から胡弓、伊差川世瑞から三線の爪、饒平名光徳から琉球楽器の調律法・理論表を寄贈された。山内盛彬からは『琉球の音楽』5 巻の原稿、楽譜を貸借した(田辺 1923k 年 2 月:24)。

#### (22) 調査で入手した物

1922 年 7 月 29 日那覇市内で絵はがきを購入した。琉球の音楽(2～3 枚)、舞踊(7～8 枚)、那覇市祝賀の踊行列(3～4 枚)、琉球風俗写真(4～5 枚)である(田辺 1923k 年 2 月:21)。

#### (23) 成果◎研究発表 該当する記録は見当たらなかった。

#### (24) 成果◎講演

調査の報告会として、1923 年 3 月 25 日啓明会主催による講演「台湾及琉球の音楽に就きて」が開催された(高橋 2019:204-206)。講演では沖縄旅行記、沖縄音楽の歴史、石垣島調査の様子を詳細に語るとともに、多数の楽譜、楽器、地図を陳列展覧した。また、写声蓄音器により田辺が録音した音源、あるいは現地で購入したレコードを再生した記録がある。田辺 1923a には「(一)蓄音器演奏 (イ)生蕃吹込音楽 数曲、(ロ)琉球沖縄音楽 数曲、(ハ)八重山群島音楽

1 曲」とある。「(ロ)琉球沖縄音楽 数曲」とは 1922 年 7 月 28 日琉球音楽調査会で録音した《揚作田節》《干瀬節》《宮古ン子》《テーマド節》及び購入した SP レコード、「(ハ)八重山群島音楽 1 曲」とは 1922 年 8 月 2 日に録音した《ジラバガス、ソウソウ、ジラバ》だと推察できる。さらに、「(二)琉球音楽実演(上間昌光氏唄及三絃弹奏)(イ)ヂャンナ節 (ロ)干瀬節」と記載があり、歌三線による生演奏が披露された。

#### (25) 成果◎論文・書籍

田辺尚雄 1922 年 9 月 24 日～10 月 5 日「世界第一の民謡を持つ八重山(1)～(10)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 9 月-11 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(1)～(3)」『音楽と蓄音機』9 巻 9 号-11 号

田辺尚雄 1923 年 1 月-3 月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(4)～(6)」『音楽と蓄音機』10 巻 1 号-3 号

田辺尚雄 1923 「琉球と八重山」『第一音楽紀行』

田辺尚雄 1932 年 2 月「郷土音楽」『郷土史研究講座』5 号

田辺尚雄 1968 『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社

#### (26) 成果◎レコード・CD

録音した一部の音源は、1977 年田辺秀雄により東洋音楽学会「第 240 回定例研究会」で公開された。「この例会では、それらの録音盤中、台湾高砂族、琉球八重山の民謡ジラバ、それに南洋の音楽など 3、4 曲をカセット・テープにとって演奏し、器械をスライドで示した」(田辺秀雄 1978b:160-161)。この時公開した「琉球八重山の民謡ジラバ」とは、1922 年 8 月 2 日録音の《ジラバガス、ソウソウ、ジラバ》だと推察される。さらに、同曲は LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』に収録された。

また、先述したように、田辺は最終的にレコード技師を派遣して沖縄音楽を録音し、レコード制作の実現を目指していた。1926 年田辺が個人的に密接な関わりがあった日東蓄音器株式会社(ニットー・レコード)により八重山民謡レコード 23 枚が制作される(高橋 2010、高橋 2017:171 参照)。1926 年当時、蓄音器で聴ける市販の八重山民謡レコードは存在せず、レコード 23 枚はプライベート盤として制作された。「技師を遣って完全にしようと思うのです」(1922 年 7 月 27 日『沖縄タイムス』)と述べた田辺の当初の目的は、プライベート盤の八重山民謡レコードを制作したことで達成されたのである。

#### (27) 成果◎ラジオ放送 該当する記録は見当たらなかった。

### 4. 1923(大正 12)年 4 月:中国(中支、北支)の音楽調査

田辺は 1923 年 4 月～5 月に中国の音楽調査を単独で実施した。同年 4 月に国学院大学教授となり、日本音楽史を担当していた(蒲生 1970:124 参照)。本調査の特徴は雅楽を録音した『平安朝音楽レ

コード』を持参し、中国における講演で使用したことである。本節は主に田辺 1923m 年 9 月、田辺 1970、田辺 1976 年 4 月、田辺 1982:167-191 を基に、(1)～(27)の観点により整理した。

#### 4.1 中国(中支、北支)の音楽調査の実際

(1) 調査期間 1923 年 4 月 16 日～5 月 25 日

(2) 調査国 中国

(3) 調査地域 上海、南京、北京

##### (4) 調査の動機

田辺は中国の音楽に興味を持った経緯を次のように述べた。

「私は明治 42、3 年頃、早稲田大学で清国(今の中国)留学生数十名に物理学の講義を行った際、中国楽律の構成を講義したのが彼らから尊敬される原因になり、多くの留学生が私の宅にも遊びに来るようになり、中に馬裕藻という立派な人もいて、私はこの人から中国音楽の研究書『声律通考』という書もらった。私もまた彼らの宿所(高田馬場の近くの下宿屋)に遊びに行き、琴の曲など聞かせてもらい、大いに中国音楽に興味を持つようになった」(田辺 1982:167)

また、日本の雅楽の研究に関連して、中国音楽の調査の必要性を感じたことを次のように記した。

「大正に入ると私は雅楽の研究に入ったが、我が国の雅楽は大部分中国唐代の音楽から出ているので、是非とも中国に行きその音楽を調査したいと思いついた。丁度その頃、町田嘉章(佳聲)さんから頼まれて宮内省楽師達による雅楽演奏レコードを作成したので、私はそれを持って中国に行くことにした」(下線部筆者)(田辺 1982:167)

上記の「宮内省楽師達による雅楽演奏レコード」が先述した『平安朝音楽レコード』である。

##### (5) 調査の目的

本調査の主要な目的について、「既に 15、6 年前から主として古代の支那音楽の科学的理論に就て研究をして居たので、今回の支那旅行は今後の此方面に対する研究の方針を確定することと、之に關聯して私と研究の連絡を取って呉れるような人を支那に得たいと思った」(田辺 1923m 年 9 月:36)と述べた。さらに、目的の詳細を下記 5 点に分けて説明している。

「(1)今日の中国人の中に私と連絡をとって、共にこの方面の問題を研究する篤志家がいるかどうか…中略…(2)私が今までに研究調査した中国古代音楽に関する学説と資料とを、中国の知識階級の人びとに発表してその意見を聞き、また彼らをしてこの方面の研究に

興味を持たしめ、したがって再び中国に隋唐音楽の研究復興を試みたいと思ったこと。このために私はわが雅楽のレコード多数を持参して、しばしば各地で講演を試み…中略…(3)孔子廟、その他中国古代からの儀式に用いる音楽は今日いかなうな状態になっているかを調べる…中略…(4)古代音楽に関する書籍を調査し、できるだけその多くを蒐集すること…中略…(5)中国に來たついでに中国劇や近代音楽もできるだけ多く聞いてみたい」(下線部筆者)(田辺 1970:223-224)

『平安朝音楽レコード』を持参した理由について、自らの中国音楽研究の成果を発表し、「再び中国に隋唐音楽の研究復興を試みたいと思った」と解説した。

##### (6) 調査協力・人物

岡田有民(中国旅行の世話役)。上海銀行・丸山(岡田の弟)。蓄音器会社・樗尾慶三。楽器店主・一木。王蔭康。名優・欧陽予倩。音楽家・成田蔵巳(上海日本高等女学校の教師)。江鉄。楊左甸。陸爽。傅某。中国楽の専門家数名。一等書記官・有田八郎。鷺沢。吉田参事官。羽多野乾一(中国劇の研究者)。教育部参事・湯中。蕭友梅。中国政府顧問・土屋。辻聴花。

(7) 調査協力・機関 孔子廟。北京大学。

(8) 協力・放送局 該当する記録は見当たらなかった。

##### (9) 協力・レコード会社

レコード会社としての記録はない。だが、上海で同行した樗尾慶三は 1912 年大阪蓄音器株式会社設立時の取締役の 1 人であり(高橋 2011 参照)、中日合併の大中華唱片公司是 1917 年孫文が樗尾を招聘し発足させたレコード会社である(貴志 2011:319)。

##### (10) 採譜した音楽

上海に到着した 1923 年 4 月 19 日午後、街頭を通る物売りの声、朝に寝床で聞いた物売りの声を採譜した。繰り返す一定の旋律を採譜した後、日本の物売りの声とは異なり、リズム、音律が非常に音楽的であると述べた(田辺 1970:228-229)

(11) 録音した音楽 該当する記録は見当たらなかった。

##### (12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

1923 年 4 月 19 日北京の孔子廟を訪問した際、「孔子廟祭に用いる楽器として次のものが保管されていた。…中略…これらの楽器をいちいち外に持ち出して、これをカメラに収め」(田辺 1970:327-328)た。撮影したのは笙、管子、笛、簫、壎、篪。排簫、琴、瑟、柷、敔、建鼓、搏拊・九雲鑼、板(拍板)、手鼓、特鐘、搏鐘、編鐘、特磬、編磬である(田辺 1970:327)。この中で、柷「第 72 図」、敔「第 73 図」の写真は田辺 1970:327 に掲載されている。

### (13) 音律測定した楽器

上海の旧上海城内の孔子廟において、琴(6個)、瑟(4個)、排簫(2個)、笙(6個)、簫(洞簫)(6本)、笛(6本)、埙(2個)、磬(16枚)、鐘(16個)の楽器を閲覧した。破損していた「以上の楽器類はいずれも清朝の乾隆帝より以後の製作にかかるものらしく、明朝以前のものは見当らなかった」(田辺 1970:255)。「この磬 16 枚は、おそらく 1 つの編磬をなすものらしく、同じく鐘 16 個もまた 1 個の編磬をなすものらしい」(田辺 1970:255)と考え、音律を測定すると判明するがその時間がなかった。「念のため所持の音叉と比較して、大体の音律を測ってみたところ、排簫の黄鐘はEに当り、同治5年7月、上海県儒学堂造の銘のある姑洗の鐘もEに当り、同治8年2月、上海県儒学堂造の銘のある姑洗の磬はGより少し高かった。これによって見るも、その調律はすこぶる乱雑であることが知られる」(田辺 1970:255)。上海の孔子廟では音律の振動数測定装置は持参せず、音叉を使用して楽器の音律を測った。

### (14) 調査地での講演会

調査 40 日間に全 7 回講演会を実施した。

①1923 年 4 月 21 日、演題「文化生活より見たる音楽」場所:日本人クラブ、♪雅楽のレコード『平安朝音楽レコード』を再生。「私が日本から持参した雅楽のレコードのなかで、隋唐伝来の音楽をことごとく演奏してきかせたことが、来聴中の中国人にとってはひじょうな驚異であった」(田辺 1970:238)。

②1923 年 4 月 23 日、演題「中国音楽の世界的価値」場所:上海専科師範学校、♪雅楽のレコード『平安朝音楽レコード』を再生。「今回私が持参した雅楽レコードが大いに役に立って、隋唐代における楽舞の演奏(レコードによる)は彼らをしてたちまちに驚嘆落涙せしめた」(田辺 1970:256)。講演内容は 1923 年 4 月 25 日～5 月 17 日「支那の音楽(全 5 回) 於上海/田辺尚雄氏講演」『京津日日新聞』に掲載された。

③1923 年 4 月 27 日、演題「家庭踊り」場所:日本人青年会館の婦人会

④1923 年 5 月 8 日、演題「日本音楽と舞踊に関して一場の講演」場所:女子高等師範学堂

⑤1923 年 5 月 9 日、演題「文化生活より見たる音楽」場所:大和クラブ

⑥1923 年 5 月 14 日、演題「中国音楽の世界的価値」場所:北京大学、♪雅楽のレコード『平安朝音楽レコード』を再生。「私の持参したレコードで『蘭陵王入陣曲』『越殿楽』『五常楽』『胡飲酒』その他の曲をきかせた」(田辺 1970:318)。講演は 1923 年 5 月 12 日『順天時報』で予告された。

⑦1923 年 5 月 16 日、演題「音楽の味方と舞踊の話」場所:大和クラブ。講演は 1923 年 5 月 15 日『新支那』で予告された。

(15) 録音機材 録音はしていない。

### (16) 写真撮影機材

「カメラ」と記載されたが、機種など詳細は不明である。

(17) 映像撮影機材 該当する記録は見当たらなかった。

(18) 音律測定器 (13) で述べたように、音叉を持参していた。

### (19) 持参したレコード

(14) でも述べたように、各地の講演会で雅楽のレコード『平安朝音楽レコード』(1921 年 1 月完成)<sup>9)</sup>を使用した。1923 年 4 月 23 日の講演で「蓄音機を携て来ましたが之れは日本宮内省で奏する隋唐時代の楽曲」(1923 年 5 月 13 日『京津日日新聞』)、「私が今回携帯いたしました蓄音器は技師が作ったのでなく私が研究の為に作ったもの」(1923 年 5 月 17 日『京津日日新聞』)と述べた。だが、この「蓄音機(器)」とは再生装置ではなく、レコードを指している。

1923 年 5 月 17 日宗人府の中西音楽会にて雅楽の演奏を鑑賞した。その後の音楽談義の席で、田辺は「唐代音楽のことを話して、持参したレコードで『蘭陵王』『胡飲酒』『太平楽』『越天楽』の 4 曲を楽生一般を交えてきかせ、次にレコードで宮城道雄作曲『落葉の踊』『ひぐらし』『紅薔薇』の 3 曲をきかせた」(田辺 1970:318)。

『平安朝音楽レコード』は「古曲保存会の事業として、田辺尚雄氏の監修で製作された[雅楽レコード]」である。大正 10 年にアコースティックで録音された画期的な企画で…中略…第 1 類から第 8 類まであり、頒布形式で世に出た」(久保田 2006:2)。古曲保存会とは町田博三(後に嘉章、佳声と改名)が興したレコード頒布会である。

「大正 10 年春、(筆者注:町田)自ら古曲保存会(会員組織)を興し、当時湮滅しかつた古曲、名曲をその道に明るい古老を訪ねて録音し(帝国蓄音器商会で吹込み)、かつその歴史や詳細な解説を試みた名著『江戸時代音楽通解』(稀観書)を附けて会員に頒布された」(田辺 1982:85)。「その会の発起人の 1 人になってくれと、町田さんから頼まれたのが最初である」(田辺 1975 年 10 月:123)と、田辺は振り返る。そして、「町田氏はこの編集(筆者注:『江戸時代音楽通解』)を終了されてから、同じ組織で宮内省楽師による雅楽曲一通りのレコードを作り、同会員(新しく募集した)に頒布したいと思い立たれ、丁度私が宮内省雅楽練習所の講師をしており、楽師たち全員と懇意なので、その事は私に相談して来られた」(田辺 1982:86)。その後、宮内省雅楽長・上真行に依頼し、録音する経緯は田辺 1975 年 10 月:123-124、田辺 1982:85-89 を参照されたい。田辺 1921b『雅楽通解』にも『平安朝音楽レコード』の詳しい解説がある。

田辺が 1923 年 5 月 17 日中西音楽会にて聴かせた『蘭陵王』『胡飲酒』『太平楽』『越天楽』は、『平安朝音楽レコード』「第 3 類 支那の音楽」に収録された。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターには『平安朝音楽レコード』の一部が寄贈されており、亀村 2006:21 によると、『蘭陵王』レコード番号:236/237、『胡飲酒』レコード番号:231/232 である。『太平楽』『越天楽』のレコード番号は



不明だが、少なくとも4枚のSPレコードを中国調査に持参したことがわかる。

また、宮城道雄作曲『落葉の踊』『ひぐらし』『紅薔薇』3曲は1922年の台湾調査にも持参したレコードである。田辺は1921年11月6日「東京帝国大学邦楽会：第2回演奏会（於：帝劇）」で宮城の演奏を聴いて以降、互いに交流を深めていた。宮城が田辺の自宅に西洋クラシックのレコードを聴くため度々訪問していた様子は、田辺1975年10月：120-125に詳しい。宮城の才能を認め、音楽活動を支援するためにレコードを調査地まで持ち込み、講演で観客に聴かせたと推察される。

(20) 購入したレコード 該当する記録は見当たらなかった。

(21) 現地で提供を受けた映像・音楽・楽器

1923年5月7日中国劇の研究者・羽多野乾一から自著の書籍『支那劇 500 番』と中国俳優の写真帳などの提供を受けた(田辺1970:295)。

(22) 調査で入手した物

1923年4月22日上海の河南路の中国書店において、中国音楽書、中国の小学校唱歌教科書『教育部審定学校唱歌集』『共和国国民唱歌集』などを購入した(田辺1970:240)。

1923年5月9日北京の東亜公司で『北京繁昌記』その他の書籍や絵はがきを購入した(田辺1970:303)。

(23) 成果◎研究発表 (24) 成果◎講演

該当する記録は見当たらなかった。

(25) 成果◎論文・書籍

田辺尚雄 1923年9月「支那音楽雑考」『東洋学芸雑誌』40巻504号  
田辺尚雄 1970「中国」『中国・朝鮮音楽調査紀行』音楽之友社  
田辺尚雄 1976年4月「思い出ばなし=7 土匪襲撃と熊との出会い」『季刊邦楽』7号

田辺尚雄 1982「中国音楽調査旅行」『続 田辺尚雄自叙伝』邦楽社

(26) 成果◎レコード・CD 該当する記録は見当たらなかった。

(27) 成果◎ラジオ放送

日本中央放送局 1939年2月18日「第1回 東洋音楽概観」は田辺の解説により中国(北支、南支)、ジャワ、バリ島、インド、ペルシアの音楽を取り上げた。中国の音楽としてレコードで放送された楽曲は以下の通りである。

(第1回) 1939年2月18日 解説：田辺尚雄

○東洋音楽概観

- (1) 北支、京調「三娘教子」 (2) 北支、秦腔「海潮珠」  
(3) 南支、福建省御前清曲「蓮歩」 (4) 南支、小曲「九連環」

(1939『東洋音楽研究』2巻1号:87)

ただ、放送で使ったレコードが1923年の中国調査で入手したものかどうかは不明である。

## 5. 1923(大正12)年7月：樺太アイヌの音楽調査

田辺は1923年7月～8月に樺太アイヌの音楽調査を単独で実施した。中国の音楽調査終了から2ヶ月後に開始された。田辺は樺太庁(首都・豊原市)の長官を訪ね、本調査の援助を求めた際、「同市の師範学校と女学校での講演を依頼され、そのかわりに同島内のすべての調査に便宜を与えるのみならず、その費用は全て樺太庁で支弁する」(田辺1976年4月:96)ことになったという。

なお、北海道立北方民族博物館には1923年樺太アイヌの調査手帳、写真、名刺、絵葉書、領収書や荷物札等の関連資料が所蔵されている。所蔵資料の詳細は篠原・笹倉2007、篠原・笹倉2008で確認できる。本節では適宜、田辺の記録と照合した。

本節は主に田辺1927:113-168、田辺1976年4月、田辺1982、田辺秀雄1978aを基に、(1)～(27)の観点により整理した。

### 5.1 樺太アイヌの音楽調査の実際

(1) 調査期間 1923年7月23日～8月11日

(2) 調査国 樺太(1905年～1945年は日本領)

(3) 調査地域

敷香(現:ポロナイスク)、白浜、豊原(現:ユジノサハリンスク)

(4) 調査の動機

田辺は樺太アイヌの音楽を調査した経緯について、次のように述べている。

「東洋音楽研究の一部として、アイヌ及びギリヤーク、オロック等の北方人の音楽舞踊を調査する為に、樺太行って見たいということは、可なり以前から計画して居た…中略…大正12年6月に東京帝大の人類学教室に於て、アイヌ学者金田一君のアイヌ歌謡に関する講演と、一アイヌ少女の実演とを聞くに及び、急に万難を排して其の实地調査を試みたいと決心し、之を金田一君に相談してみたところ、同君は…中略…アイヌに、それぞれ紹介の労をとられた」(田辺1927:113-114)

田辺に樺太アイヌ調査を決意させた出来事は、1923年6月16日東京人類学会372回例会(於:東京帝国大学人類学教室)の言語学者・金田一京助によるアイヌ歌謡の講演とアイヌ婦人・鍋澤ユキ(北海道平取町出身)による神曲の演奏であった。1923年6月16日『読売新聞』4には同例会の予告が掲載された。

北方民族博物館・田辺資料には1923年6月18日(ママ)『読売新聞』の切り抜きが所蔵され、「アイヌの即興詩人鍋澤雪子嬢(23)昨日帝大人類学会で金田一京介(筆者注:京助)学士の通訳で民謡を歌

った」(篠原・笹倉 2007:84)と記録がある。この文言は鍋澤と金田一の写真が掲載された1923年6月17日『読売新聞』4の見出しである。田辺は「アイヌ学者金田一君のアイヌ歌謡に関する講演と、一アイヌ少女の実演」を聞いた時の記事を保存していたのである。

甲地利恵によると、「田辺氏の研究資料の中にこの講演を聞きながらとったと思われるノートが残されており…中略…ノートの翻刻(筆者注:篠原・笹倉 2008:65-66)を参照すると…中略…『4曲を演奏』したうちの1つが『雀の酒盛』の神謡であったことを裏付ける、重要な資料」(甲地 2012:3)である。さらに、田辺は例会で聴いた神曲をノートに数字譜で記録した(篠原・笹倉 2008:65-66)。甲地は「この日に口演された神謡の持つメロディを、断片的にはありますが、うかがい知ることができます」(甲地 2012:3)と指摘した。

田辺は樺太アイヌの神曲に関して、金田一による学術的な解説と鍋澤による実演を鑑賞したことにより、例会から38日後という極めて短い準備期間を経て樺太アイヌの調査を実現した。

#### (5) 調査の目的

本調査の主要な目的について、次のように述べている。

「まず初めに樺太に行き、一直線に最北部まで歩を進めて日露国境の近くに於てギリヤークやオロッコの音楽舞踊を調査し、それより順次南下して栄浜付近に於て樺太アイヌに就て調査し、帰途北海道に於て日高の砂流川から十勝へ出て北海道アイヌに就て調査することにした」(下線部筆者)(田辺 1927:114)

当初田辺は①ギリヤークやオロッコの音楽、②樺太アイヌの音楽、③北海道アイヌの音楽、という3ヶ所での研究調査を計画していた。しかし、③北海道アイヌについては「東京から持参した蓄音器吹込用原盤は、悉く樺太で使い果してしまったので、改めて新しい原盤を携えて、来年に再び北海道アイヌを訪うことに」(田辺 1927:166)した。つまり、蓄音器で録音するレコード原盤を①ギリヤークやオロッコの音楽、②樺太アイヌの音楽の調査で全て使い果たしてしまっただけである。結局、田辺はその後、北海道アイヌの音楽を調査するには至っていない。

#### (6) 調査協力・人物

田辺貞造(田辺の妹婿)。遠藤実(早稲田中学の教え子)。山内。北日本汽船会社出張所・幕内徹男。村瀬(名古屋市 海産商)。伊藤青勝・みさお夫妻。

#### (7) 調査協力・機関

樺太庁。敷香支庁。北日本汽船会社(田辺の妹婿・田辺貞造の経営)。

#### (8) 協力・放送局 (9) 協力・レコード会社

該当する記録は見当たらなかった。

#### (10) 採譜した音楽

篠原・笹倉 2007:95によると、田辺の手帳には1923年8月3日敷香の小学校の講堂で披露してもらった舞踊、音楽のプログラムが記載されている。その中に「11. 琴 灰場ノドッケ 女(ノブ)」に続いて数字譜も記された。『島国の歌と踊』151ページ8行目に『トンコリは灰場のぶ(アイヌ名ノドッケ)いう女が巧みにこれをやった。』という記述があること、演奏されている音が5つしかないことなどから、これはトンコリ演奏の採譜であると思われる」(篠原・笹倉 2007:97)。トンコリの調弦は田辺 1927:148-150に数字譜の記録があるが、「調弦については別の演奏者に取材した可能性がある」(篠原・笹倉 2007:97)と篠原は分析している。

#### (11) 録音した音楽

1923年7月31日敷香の小学校の講堂に「ギリヤーク及びオロッコの土人男女合せて156名を講堂に集め…中略…歌を唄ってもらうと同時に、之を私が持参した蓄音器吹込器械(写声器)に吹込んでもらった」(田辺 1927:130)。録音本番前に「写声器の実験をやる(初め自分、次にギリヤーク及オロッコ土人)」(篠原・笹倉 2007:87)と手帳に記録がある。録音の様子を記した田辺 1927:130-135には、録音者の名前と歌詞が掲載されたが、曲名の記載はない。

ギリヤークのサンダー(男)、ギリヤークのチョーガノ、ギリヤークのホニヤッカ、ギリヤークのアムタ、ギリヤークの娘アイトッカ(女)、オロッコのオーロ、オロッコのトンゴッコ、オロッコのユイボッコ、オロッコのオダブッチ(田辺 1927:130-135:録音者を抜粋)。

1923年8月3日白浜教育所にアイヌの老若男女を集め「次の数種の歌謡を、持参の蓄音器に吹き込んだ」(田辺 1927:153)。ここでも録音本番前に「写声器実験生徒に歌を唄わせる之を吹込実験する。一同大に驚く」(篠原・笹倉 2007:87)と手帳に記録がある。

《エフンケー》エヌマ(女)、《ヤイカテカラ》エヌマ(女)、《ユーカラ(2種類)》坂井幸太郎、《ハウキ》日勝勉之助、《オイナー》ヘレケー(女)。(筆者注:曲名は《》で囲った)(田辺 1927:153)

調査終了後、田辺は蓄音器と録音したレコード原盤を抱え、白浜から栄浜へ馬車で戻った。だが、その途中で馬車の車軸が破損し、走行不可能な状態に陥る。「白浜のアイヌ部落の帰途、暗の中に熊を避けつつ、身は泥中を引きずられながらも尚お且つ此の蠟盤を保護して、漸くにして死地を脱して全うした此の原盤」(田辺:1927:167)と振り返った。

## (12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

田辺 1927 年には調査で撮影した下記の写真が掲載された。

## 第3 図版(上) オロッコ土人の胡弓

## 第3 図版(下) ギリヤーク土人のコンコン

## 第4 図版(上) アイヌの踊

## 第4 図版(下) アイヌの楽器トンコリ(田辺 1927: 口絵)

LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』解説書には調査で撮影した下記の写真が掲載された。

## 32. ギリヤーク族のコンコン(ジョーズ・ハーブ)

## 33. トンクルを弾くオロッコ族

## 35. 樺太アイヌ族トンコリと踊

## 36. 樺太アイヌ族トンコリの演奏(田辺秀雄 1978a: 10-12)

田辺 1982 年には調査で訪れた名所、風景や舞踊、演奏に協力した人々の写真が掲載された。

小樽樽公園より眺める／市街地／オロッコ人奏楽／古代文学会館  
前にて田辺貞造一家／アイヌタツカラ踊り／オロッコの婦人たち  
／トンコリ踊り／トンコリ奏楽／札幌神社(田辺 1982: 206-207)

## (13) 音律測定した楽器 該当する記録は見当たらなかった。

## (14) 調査地での講演会

調査 20 日間に全 5 回講演会を実施した。

- ①1923 年 7 月 23 日、演題「音楽の文化的使命」場所: 小樽倶楽部
- ②1923 年 7 月 31 日、演題「音楽の文化的使命」場所: 敷香の小学校、♪レコードを使用(篠原・笹倉 2007: 87)
- ③1923 年 8 月 3 日、音楽の講演、場所: 白浜教育所
- ④1923 年 8 月 4 日、演題「音楽の文化的使命」「家庭踊の講習」場所: 豊原市の高等女学校
- ⑤1923 年 8 月 7 日、麗鐸会主催、演題「音楽の文化的使命」場所: 札幌市の豊平館

## (15) 録音機材

田辺は「吹込ラッパ(当時はマイクロフォンはなく、吹込ラッパの前に口をつけてうたわせる装置)」(田辺 1968: 85)を使用し、「蓄音器吹込器械」(田辺: 1927: 130)と称した。使用した機材は台湾、沖縄調査で録音した写声蓄音器(写真 1・写真 2 参照)と同じである。

## (16) 写真撮影機材

「カメラ」と記載されたが、機種など詳細は不明である。

## (17) 映像撮影機材 (18) 音律測定器

該当する記録は見当たらなかった。

## (19) 持参したレコード

栄浜から敷香へ筑後川丸に乗船中「寝て居ても退屈なので、船長や機関長などと共に、私の持って来た蓄音器レコードをやりながら、四方山の物語をして終日を暮して居た」(田辺: 1927: 123)。船中、持参した蓄音器でレコードを聴いた記録である。また、1923 年 7 月 31 日敷香の小学校における講演について、田辺は『『音楽の文化的使命』レコード数枚やる』(篠原・笹倉 2007: 87)と手帳に記録した。つまり、録音用のレコード原盤の他に、再生用のレコードを持参したと推察されるが、詳細は不明である。

## (20) 購入したレコード 該当する記録は見当たらなかった。

## (21) 現地で提供受けた映像・音楽・楽器

1923 年 7 月 31 日敷香でギリヤーク、オロッコの音楽調査の際、「鉄製の口琴(ムックナ)などを入手」(田辺 1976 年 4 月: 96)した。  
1923 年 8 月 3 日白浜教育所でアイヌの音楽調査の際、「トンコリ(五弦琴)や口琴、笛などをお土産に」(田辺 1976 年 4 月: 97)もらった。

## (22) 調査で入手した物

篠原・笹倉 2007: 79 によると、絵葉書 71 枚が「名勝画はがき 樺太(旧日本領)」と称したスクラップブックに掲載されている。その中に「北海の土人アイヌ風俗」(土人研究会発行) 8 葉、「樺太アイヌ風俗」2 葉、「泊岸字茶呉附近ノ景」1 葉(田辺が八重子夫人宛に樺太敷香から 1921 年 7 月 31 日に投函)がある。

## (23) 成果◎研究発表 (24) 成果◎講演

該当する記録は見当たらなかった。

## (25) 成果◎論文・書籍

田辺尚雄 1926 「[12] アイヌ人の音楽と 舞踊」『日本音楽の研究』京文社  
田辺尚雄 1927 「樺太土人の音楽」『島国の唄と踊』磯部甲陽堂  
田辺尚雄 1976 年 4 月「思い出ばなし= 土匪襲撃と熊との出会い」『季刊邦楽』7 号  
田辺尚雄 1982 「樺太アイヌ、ギリヤーク、オロッコ音楽調査」『続田辺尚雄自叙伝』邦楽社

## (26) 成果◎レコード・CD

録音した音源の中で、下記は LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』に収録された。

## 6. ギリヤーク及びオロッコ族

- a. ギリヤークの歌(サンダー・男)
- b. ギリヤークの歌(ホニヤッカン・男)

- c. ギリヤークの歌(アムタ・男)
- d. ギリヤークの歌(アイトッカ・女)
- e. オロッコの歌(オーロ・男)

## 7. アイヌ族

- a. エフンケー(エヌマ・女)
- b. ヤイカテカラ(エヌマ・女)
- c. ユーカラ(坂井幸太郎・男)
- d. ハウキ(日勝勉之助・男)

なお、7. アイヌ族 a と d は谷本 2000 にも収録されている。

(27) 成果◎ラジオ放送 該当する記録は見当たらなかった。

## 6. 1934(昭和9)年8月:南洋群島の音楽調査

田辺は 1934 年 8 月～9 月に南洋群島の音楽調査を単独で実施した。1934 年 5 月に官立東京音楽学校の講師(嘱託)となり、音響学と日本音楽史を担当していた(蒲生 1970:125 参照)。

南洋調査は「南洋庁からその委嘱を受け正式の調査員として出張命ぜられたもので、そのために相当の調査手当を支給され、加うるに南洋興発会社からもあらゆる便宜と充分なる費用を受けた」(田辺 1968:16)。さらに、後年、調査をまとめた田辺 1968:15-171 について、「1 つは私が現地において親しく調べ得たものと、他の 1 つは私のために南洋庁(各島の支庁)があらかじめ調べ上げてそれを私に提供してくれたもの」(田辺 1968:16)とある。

また、「私は蓄音機吹込機や活動写真機を持って行きました」(1934 年 9 月 29 日『報知新聞』)と記したように、新規に製作させた録音機材「日の本写真機」と活動写真機(7.5 ミリ映写機)を持参した。田辺自身が活動写真機で撮影した民族音楽調査は南洋群島が初めてであった。本節は主に田辺 1968:15-171、田辺 1978 年 6 月、田辺 1982:439-455 を基に、(1)～(27)の観点により整理した。

### 6.1 南洋群島の音楽調査の実際

#### (1) 調査期間

1934 年 8 月 18 日～9 月 29 日。田辺が 9 月 29 日、南洋パラオから日本郵船・春日丸にて横浜へ帰港したことが『読売新聞』で確認できる(1934 年 9 月 30 日夕刊:2)。

(2) 調査国 南洋(1915 年～1945 年は日本の委任統治領)

(3) 調査地域 マーシャル群島におけるパラオ島。トラック島。ポナペ島。クサイ島。ヤルート島。

#### (4) 調査の動機

田辺は南洋群島の音楽を調査しようと考えた経緯について、次のように述べている。

「古書展覧会においてたまたま鈴木經勲著『南洋探検実記』(明治 25 年 7 月。博文館刊)を入手し、それを読むうちに著しく私の探究心を鼓舞する次のような事件を知った…中略…ラボン王が後藤、鈴木両君を接待するために催した同島民による大規模の戦闘踊の模様の記事…中略…私は以上の文を読んで非常に興味を覚えたが、同時にこの文の終りの部分…中略…においてこの踊を野蛮のはなはだしいものだとする鈴木經勲の意見には大いに疑いを持った…中略…ぜひみずからこの蛮地に入ってその純になる楽舞に接してその魂に触れたい」(田辺 1968:19-24)

#### (5) 調査の目的

本調査の主要な目的について、次のように述べている。

「南洋諸島中パラオ、カロリン諸島、ポナペ、クサイ、マーシャル群島における原住民の音楽舞踊について調査…中略…南洋庁からその委嘱を受け正式の調査員として出張命ぜられた」(田辺 1968:16)

「昭和 9 年春に林南洋庁長官がわが委任統治領の各島を巡視されたときに、各島に駐在する我が官憲(支庁長等)は長官の歓迎のために島民の踊を観覧に供せんとしたところが、宣教師達は徹底的にこれに反抗し、もし島民にして舞踊をなす者があれば破門すると宣言した…中略…この調査研究は一刻も猶予ができない」(田辺 1968:25)

元々、南洋群島の音楽に興味はあったものの、調査の実施に関しては切迫感がみられる。

#### (6) 調査協力・人物

松江春次。能伸文夫。松山常次郎。松山基範。牧野三好。小崎弘道。岩村清四郎。ホッピン女史。マッコール。森小弁(トラック諸島・水曜島の大酋長)

#### (7) 調査協力・機関

南洋庁。南洋興発会社。

南洋興発会社の創立者・松江春次は田辺の親戚(父・貞吉の実弟・手島精一の次女の夫)であるため、調査に際し様々な特別待遇を受けた。「林南洋庁長官を説いて私を正式に南洋庁の嘱託とする…中略…同(筆者注:1934)年 8 月 3 日付を持って『南洋群島事情調査事務を嘱託す』という辞令と共に『1 時手当 1000 円給与』…中略…航路汽船乗船賃 2 割引(一等室)証券をも下付された」(田辺 1968:28)。さらに、南洋庁へ下記「五条の要求」を申請し、全て受諾された。

(1) 島民によるいかなる種類の音楽舞踊でも私の要求により無条件に許可してもらいたい



(2) 各島に私の到着前に官憲ならびに島民によって万事の準備を整えておき、私の到着と同時に即刻実演を施行するようにしてもらいたいこと。

(3) 従来南洋庁の係官によって調査されてある資料は、未発表のものを含み無条件で私に提出してもらいたいこと(その代りのちに私の調査書と共に南洋庁に提出する)

(4) 島民の音楽舞踊を調査する際に、多くの島民を各地から集めたり、ことにマーシャル等においては遠隔の離島から多くの島民を呼び寄せるには多額の費用を要するので、これら一切の調査についての費用は南洋庁の各島支庁で支弁してもらいたいこと。

(5) 島民の歌をレコードに録音する場合に、これらのレコードは一切営利の目的に使用しないという約束のもとに、報酬を一切要求しないこと。(田辺 1968:29)

#### (8) 協力・放送局 (9) 協力・レコード会社

該当する記録は見当たらなかった。

#### (10) 採譜した音楽

蓄音器で録音した中に、メロディーが賛美歌に由来すると思われる歌があった。「私がトラック島でレコードに録音したものの中に次に示すような美しい旋律がある」(田辺 1968:58)と、3/3 拍子、8 小節に五線譜化した。「10 歳位のマンヌーキという小児がうたった歌の旋律で、その意味は男女間の恋愛の歌に過ぎない。おそらくこれは賛美歌から得た旋律をモディファイしたものらしい」(田辺 1968:58)と解説した。

#### (11) 録音した音楽

1934 年 9 月 22 日パラオ島で「島民男女の歌を聞き、その数曲をレコードに録音」(田辺 1968:35)した。昌南クラブの庭で「2 人の老女から 4 つの歌をレコードに収め」(田辺 1968:41)た曲目は下記の通りである。

- (1) 恋人のところに忍んで行くときの歌(デブルポット・男)
- (2) 同じく恋人の家を訪ねるときの歌(同・男)
- (3) 恋する男と別れたときの歌(ヴェラットコイ・女)
- (4) コロール島民がアイミリキ村に旅行したとき、大いに歓迎されたことを感謝する歌(同・女)(田辺 1968:41)

録音の様子は写真「第 5 図 パラオ島: ヴェラットコイ女: 蓄音器吹込み光景」(田辺 1968:41)で確認できる。

1934 年 8 月 31 日～9 月 1 日トラック島の「島民男女を集めてうたわせて、それをレコードに録音」(田辺 1968:46)した。トラック諸島・水曜島の大酋長・森小弁が録音にあたり全面的に協力している。田辺はトラック支庁へ「恋愛の歌」を依頼しており、録音した曲目は以下の通りである。

- (1) 夜這いの歌(男 ニメタル) (2) 恋愛の歌(男 クーン) (3) 男が女に惚れた歌(男 カーリー) (4) 恋愛の歌(男 パパイヤ) (5) 恋愛の音歌(男 ファリゲル) (6) 恋愛の歌(男 ノバ) (7) 恋愛の歌 2 曲(女 イナットン) (8) 恋愛の歌(女 ネイラウ) (9) “あなたの夢を見て起きたらば、大そうつかれた” (女 イナットン) (10) “私はあなたの枕のしんになってあなたの言葉をききたい” (ナミ子。これは島民の女でトラック旅館の女ボーイ。12 歳) (11) 恋愛の歌(小児 マンヌーキ) (12) 恋愛の歌(小児 リードック)(田辺 1968:58-59)

さらに、「水曜島から彼(筆者注: 支庁の吏員)の部下の青年 3 名を連れて来て」(田辺 1968:60) 3 曲歌わせ録音したが、「実はこれには挑発的な踊がついていたので、踊も見せてもらったのであったが、それを写真に写すのは遠慮した」(田辺 1968:60)。「労働歌の 1 つとして山から木を伐り出し、これを運ぶときにうたう木遣り歌の 1 種を森小弁氏の歌で聞きこれをレコードに収めた」(田辺 1968:60)。

1934 年 9 月 6 日クサイ島の公学校で「大人男女 20 人ばかりの賛美歌合唱 2 曲を聴く、始終音声まことに美事であった。そこで私はこれをレコードに録音したが、ついでに生徒の日本語の話し方も録音した」(田辺 1968:130-131)。

1934 年 9 月 10 日ヤルート島のグラウンドにて、「私の待望のジャボールの戦闘踊始まる。男女合せて 100 名におよび、女は太鼓に合せてうたい、男はたがいに棒を持って打ち合う。壮観きわまりなし。私はその光景を写真に収め、またその歌をレコードに録音した」(田辺 1968:146)

1934 年 9 月 14 日～15 日ポナベ島にて、老女・アタラインが歌う《マタラニウム村に残っているスペイン戦争に関する歌》、若い娘・エスペランサが歌う賛美歌や新歌謡を録音した(田辺 1968:101-102)。アタラインの録音について、「私はこの歌を録音するのに非常に苦心した。それは私の持参した不完全な録音器をもってして、3 回も録音に失敗してやり直してもらった…中略…この録音はこの歌のただ 1 人の保持者で、アタラインの死と共に永久に消失し去る運命にある歌を後世に残し得たことを喜ぶものである」(田辺 1968:102)と記した。

田辺は「歌を、レコードに幾枚か採って来たが、相当よく入っている」(田辺 1934 年 11 月:65)と総括した。

#### (12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

1934 年 8 月 31 日～9 月 1 日トラック島で(a)夜這いに行くときの踊、(b)親の許しを得て女の許に行く踊、(c)昭和 7 年に海軍の飛行機が飛んで来た時、愛人の乳房をいじりながら愛人と共に眺めていたことを表す踊を映画フィルムに収めた(田辺 1968:86)。

田辺 1968 には調査で撮影した下記の写真が掲載された。

第 5 図: パラオ島ヴェラットコイ女 蓄音器吹込み光景

第 6 図: パラオ島の戦闘踊

第 7 図: パラオ島男子の素踊

第9図: 森小弁氏と夫人第 第11図: 鼻笛を吹く姿勢  
 第13図: トラック島女子の魚漁 第15図: トラック島男子踊  
 第16図: トラック島女子踊 第26図: クサイ公学校教員室にて  
 第28図: 太鼓を打つ王女 第30図: ヤレート島棒踊の団が椰子林から現われる光景現われる 第31図: マーシャル島の太鼓  
 第33図: 棒踊の衣装 第34図: ヤップ島の棒踊(田辺 1968:41-170)

LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』解説書には調査で撮影した下記の写真が掲載された。

6. パラオ島ヴェラットコイ吹込み光景 7. パラオ島の踊り手たち  
 8. トラック島民の踊 9. 森小弁氏夫妻 10. 鼻笛の演奏  
 12. ヤレート島戦闘踊 1. (入場) 13. ヤレート島戦闘踊 2. (太鼓を打つ王女) 14. ヤレート島戦闘踊 3. (太鼓)  
 15. ヤレート島戦闘踊 4. (踊棒) 16. ヤレート島戦闘踊 5.  
 17. ヤレート島戦闘踊 6. 18. ヤレート島戦闘踊 7.  
 19. ミレー島の戦闘踊の衣装 20. ミレー島の戦闘踊 1.  
 21. ミレー島の戦闘踊 2. 22. ミレー島の戦闘踊 3.

(13) 音律測定した楽器 (14) 調査地での講演会  
 該当する記録は見当たらなかった。

#### (15) 録音機材

田辺は南洋調査の折、新たな録音機材の製作を日の本商会(8. 2. 3 参照)に依頼し、特注の日の本写音機(写真3参照)を使用した。その経緯を次のように述べている。

「携帯用の軽便なアクスティック装置の録音機を作らせる必要があった。さいわいにして芝区西久保巴町にある日の本商会において「日の本写音機」という便利な家庭用の録音機を製造販売していたが、私は前からこの機械の制作について同商会と親しい関係があったので、新らしく私の考えによる携帯に便利な、旅行用の録音機を1台製作してもらった(当時の実費価格で80円。ただしモーターは手持ちの中古蓄音機のものを取り付けた)。そしてレコードとして径7インチのアセテート盤24枚を用意した」(下線部筆者)(田辺 1968:30)

また、秀雄は上記に加え、次のように解説した。  
 「録音盤(レコード)として、その頃から町に出ていたアセテート盤を使用するもので、溝の幅は当時のSP盤より細く、後のLPに近いものであり、再生には特別に先端を押し潰した針が附属していた。回転数はSPと同じである。使用されたレコードは7吋盤(17cm)で溝が細い為、録音時間は前のレコードとさしてちがわない」(田辺 秀雄 1978a:2-3)

#### (16) 写真撮影機材

「準備品としては録音機、写真機、映画撮影機を用意した」(田辺 1978年6月:67)。写真機の詳細は不明である。

#### (17) 映像撮影機材

7.5ミリ映写機を使用し、フィルム10巻も購入した。「これは実際ににおいて失敗であった。やはり普通の8ミリ映写機にすればよかったと後になって後悔した」(田辺 1968:30)。その理由として、「8ミリならば世上で広く行われていたので、どこでも映写できるが、7.5ミリはめったになく、映写の際にはいつも機械を全部を私の宅から持参しなくてはならず、また機械が故障しても普通のカメラ屋ではすぐ直してくれず…中略…せっかく私が苦心して写したフィルムもその後公開するのに困難した」(田辺 1968:30)ことを挙げた。

(18) 音律測定器 (19) 持参したレコード (20) 購入したレコード  
 該当する記録は見当たらなかった。

#### (21) 現地で提供受けた映像・音楽・楽器

トラック島で「鼻笛(竹製)を譲り受け、その吹奏方法の教示を受ける」(田辺 1968:47)。1934年9月30日『朝日新聞』15には南洋土産の鼻笛を吹く田辺の写真が掲載された。さらに、「私はニューギニア土人の槍や弓、投げ槍、ボナベの踊り権数個、マーシャルの踊り棒数本各島の腰囊、鼻笛数本、トラックの夜這い棒、大きなカヌー模型、其他到底持ち切れない程の珍しい土産物を大なる車1台に積み込んで東京の家に帰った」(田辺 1941:239)。

#### (22) 調査で入手した物

「支庁にてとくに調査した『トラック島民謡調査書』(未公開の草稿)をもらう」(田辺 1968:47)。これは「(3) 従来南洋庁の係官によって調査されてある資料は、未発表のものを含み無条件で私に提出してもらいたい」(田辺 1968:29)との要求に応えたものであろう。『トラック島民謡調査書』の一部は田辺 1968 に掲載された。

#### (23) 成果◎研究発表 (24) 成果◎講演

該当する記録は見当たらなかった。

#### (25) 成果◎論文・書籍

田辺尚雄 1934年11月「南洋の音楽と踊—踏査記」『月刊楽譜』23巻11月号

田辺尚雄 1935「マーシャル及カロリン群島に於ける音楽と舞踊」『民族学研究』1巻2号

田辺尚雄 1968「南洋(1934年)」『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』

田辺尚雄 1982「南洋旅行」『続 田辺尚雄自叙伝』

田辺尚雄 1978年6月「思い出ばなし」『ミクロネシア群島』『季刊邦楽』15号

## (26) 成果◎レコード・CD

1977 年田辺尚雄により東洋音楽学会「第 240 回定例研究会」で録音音源が公開された(田辺尚雄 1978b:160-161)。音源の中で、下記は LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』に収録された。

1. パラオ諸島 a. 恋人の家へ忍んで行く歌(ダブルボット・男)  
b. 恋人の家を訪ねる歌(ダブルボット・男) c. 恋人と別れた歌(ヴェラットコイ・女) d. 歓迎を感謝する歌(ヴェラットコイ・女)
2. トラック諸島 a. 夜恋人の家へ忍んで行く歌(ニメタル・男)  
b. 木遣り歌(森小弁 他) c. 恋愛の歌(クーン・男) d. 恋愛の歌(日本語)(クーン・男) e. 恋人の歌(カーリー・男) f. 恋愛の歌(マンヌーキ・少年) g. 恋愛の歌(リードック・少年)
3. ポナペ島 a. スペインとマタラニウムの戦争歌(アタライン・女) b. テレペイショを求める踊歌(アタライン・女) c. 新歌謡(エスペランサ・女)
4. ヤルート島(マーシャル群島) a. ウオツジェの戦闘踊(女声)  
b. ミレー島の戦闘踊(ネプタ他女声)

## (27) 成果◎ラジオ放送

1934 年 11 月 5 日東京放送局 JOAK では午後 6 時 25 分から、田辺による「趣味講演: 音楽と舞踊から見た南洋の文化」を放送した。ラジオ欄には「田辺氏は音楽史家で、最近拓務省から嘱託されて南洋の文化、主として音楽や舞踊等を視察して口だったが、本日は表記の演題で趣味講演をする」(1934 年 11 月 5 日『朝日新聞』7)とある。さらに、1934 年 11 月 5 日『読売新聞』10 には、田辺による番組解説と共に「生活と伝説と芸術とが緊密に結びついているこれらの島々の音楽舞踊をレコードで実演しながらお話する」とある。つまり、番組中、南洋諸島の音楽をレコードによって紹介した。

## 7. 1940(昭和 15)年 8 月: 満州国の音楽調査

田辺は 1940 年 8 月～9 月に満州国(1932 年建国-1945 年消滅)の音楽調査を単独で実施した。記録を見る限り、1924(大正 13)年から 1940(昭和 15)年の期間、5 回以上満州を訪れている。「大正 13 年春は南満洲鉄道会社(略称満鉄)から沿線各地で音楽講演のために招聘された」(田辺 1970:356)。「昭和 8 年と昭和 10 年の 2 回は、満州の奉天(瀋陽)にある蓄音器店の主人が久保恵氏を通して、満州人に日本語を教えるためのレコードを製作することを私に依頼し、その蓄音器店主が招待の費用を出して私と久保氏とを満州に招いた」(田辺 1978 年 9 月:109)。その際、田辺に「その作曲を委任してその契約料を私有した事件を起し、後に至って裁判問題起した。一高の同窓の久保法学士の斡旋で無事解決した」(田辺 1982:455)。

なお、田辺は 1936 年東洋音楽学会設立とともに会長に就任した(蒲生 1970:125)。本節は主に田辺 1941:94-131、田辺 1970:343-412、田辺 1978 年 9 月、田辺 1978 年 12 月、田辺 1982:455-470 を基に、(1)～(27)の観点により整理した。

## 7.1 満州国の音楽調査の実際

- (1) 調査期間 1940 年 8 月 30 日～9 月 21 日
- (2) 調査国 満州
- (3) 調査地域 奉天(現:瀋陽)。錦州。承德。新京(満州の首都、現:長春)。ハルビン。吉林。
- (4) 調査の動機

田辺は満州国の音楽調査の経緯について、次のように述べている。

「満州国皇帝即位についてその即位礼を行なう場合の大礼には、今日文廟だけしか残っていない中国の雅楽を用いるよりも、むしろ文廟と武舞とが揃っている朝鮮李王家の雅楽の方が参考になるということ満州国政府に献言するために満州に渡ることになり、昭和 13 年、14 年の 2 年間しばしば奉天及び新京(長春のこと)に足を運んだ」(田辺 1970:355-356)

田辺は満州国皇帝の即位式(1934 年 3 月 1 日)以前に満州国政府へ上記を献言するため、1934 年 2 月 17 日～3 月 7 日に満州を訪問していた(田辺 1934:1-27)。しかし、「この議は用いられなかった」(田辺 1978 年 9 月:110)。また、「1 つには新京にある大陸科学院に私の実兄本岡玉樹が研究員として滞在しているのに久し振りに逢うことも私の念願の 1 つであった」(田辺 1970:356)。

## (5) 調査の目的

田辺は 1940 年日本音響学会における講演「満洲音楽視察談」において、「こんど私が満洲に行きましたのは、満洲帝国教育会の主催による文化工作の 1 つの仕事であったのです」(田辺 1941:94)と語った。そして、下記のように解説した。

「満洲国政府の民政部厚生司の中に文化科というのが新設されてありまして、その方から、どうせ私が満洲に来るのならば、満洲国固有の音楽の状態について、ついでに調査してもらいたいという申込みがありました。満洲には新京に音楽院というのが出来て居りまして、専ら西洋音楽の普及発達に努力をして居り、又たその中の 1 部に満洲の若い楽人もいて、現代に流行する支那式の満洲楽をも実修し、それを新様式の楽曲に編曲することなどを致して居ります。…中略…将来東亜共栄圏の中の 1 つの国民音楽を建設するとしましては、広く東洋音楽に関係して、科学的の研究調査が必要になり、満洲国政府の文化科は此の問題について徹底的の調査を行い度いという希望を持って居られ、此度私が東洋音楽学会の会長をして居ります関係上、将来此の学会の中堅の学者諸君に来てもらいたいというので、先ず第一に、最初の瀬踏みを私にやってもらいたいということであったのだらうと存じます」(下線部筆者)(田辺 1941:94-95)

田辺は満州国政府からの援助について、次のように記した。

「満州国政府は表面上私の調査旅行を満州国政府の事業の1つとして、援助してくれることになった——後にその報告書を政府に提出することによって、その費用を国で出すということになったのであるが、事実上その政府機構の変化により、國務院総務庁文化課は弘報処宣伝班となり、私の調査は政府の手を離れることになったが、それはすでに調査が終って帰京した後のことである」（田辺 1970:356）

田辺は1940年9月1日奉天で國務院民生部の齊藤隆夫から「國務院より今回の調査費用として金1千円の政府支払書を受取」（田辺 1970:357）り、翌9月2日奉天「城内の中央銀行に行き、昨日民生部から渡された支払書を現金に換え」（田辺 1970:357）ている。「新京に戻り、今まで調査した結果を一通り簡単な報告を政府に致し」（田辺 1941:131）という記述があるため、満州国國務院民生部から調査費用の援助を受け、何らかの調査報告をしたようである。本調査の主要な目的について、次のように述べている。

「昭和15年秋の満州行は熱河離宮および吉林の雅楽調査が主目的であった」（田辺 1970:344）

「今回の私の調査の主要目標は熱河の承德を中心に離宮雅楽、ラマ寺の音楽その他、また吉林を中心に明の雅楽（宴楽）、シャーマンの音楽、また奉天における楽器類の調査なのであるが、そのほか許す限り多くの調査をすることはいうまでもない。ことに熱河と吉林では奉天放送局の援助によってこれをレコードに録音することが1つの仕事である」（田辺 1970:356）

#### (6) 調査協力・人物

満州帝国政府内・國務院総務庁文化科・齊藤隆夫。満州電信電話株式会社・丸山和男（教え子：満州で共同調査）。奉天中央放送局・金子。國務院民生部・永田。奉天博物館・石坂館長。黒田博士。山田教育会長。放送局録音班3名。錦県放送局長・永里正徳。公署民生庁事務官・山崎正祐。承德放送局長・大塚敬之。省民生庁社会科・名塚広栄。女子国民学校校長・夏玉清。新京音楽院長・大塚享。満州蓄音器株式会社文芸課長・伊奈文夫。満州蓄音器株式会社専務・星野秀敏。満映会社ニュース課・高井知治。國務院民生部文化課長・深井俊彦。満州電信電話株式会社事務課長・寛。満州電信電話株式会社放送課長・村田。教育部事務官・和泉徳一。満人の通訳者。文化協会・三枝。吉林新聞記者・新井清五郎

(7) 調査協力・機関 満州国政府。離宮博物館。承德清音会。ラマ寺の普寧寺。熱河文廟。ハルビン交響楽団事務所。

#### (8) 協力・放送局

満州電信電話株式会社。新京放送局。奉天中央放送局。錦県放送局。承德放送局。

満州電信電話株式会社（満州電電）は「1933年9月に満州国において設立された電信・電話・ラジオ放送の電気通信を総合的に管掌する日満合併の国策会社である…中略…満州国の首都・新京（現長春）に、設置当時東アジアで最大規模の出力を誇った100kWラジオ放送機を設置して、日本語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、ロシア語の多言語放送行った」（白戸 2016:10-11）。

新京放送局と奉天放送局は満州電電設立時に所属放送局となった。承德放送局は1937年7月に、錦県放送局は1939年4月に放送を開始した（貴志・川島編 2015:559-561）。

また、日本との番組交換に関して、「1939年6月…中略…中央放送局4局（新京、奉天、ハルビン、大連）と地方各局並びに東京など日本各局との相互乗り入れのネットワークが曲がりなりにも完成し、放送での日満一体化が前進した」（山本 2004年5月:14）。

#### (9) 協力・レコード会社 満州蓄音器株式会社。

1939（昭和14）年4月、満州蓄音器株式会社は満州の新京に設立されたレコード会社である。元々は1927年アメリカ合衆国のビクター・トーキング・マシン（1929年 RCA ビクターに改組）の全額出資で日本ビクター蓄音器株式会社として設立した（2014『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』）。1938年2月、RCAは全資を撤収し、日本ビクターは日本資本だけの会社となった（岡田 1993年2月:91）。だが、「そのころ、満洲、北支で商圏を築いていたのはRCAであった…中略…交渉は再三再四重ねられ、結局、最終的な妥協策として、日本ビクターとRCAの合併会社を満洲国新京と上海にそれぞれ設立することになった」（日本ビクター株式会社50年史編集委員会編 1977:60）。そして、1939年4月、資本金国幣60万円により満州蓄音器株式会社（本社・新京）が設立された。

1940年4月27日には新京の「国都郊外東盛大街1万坪の敷地に月15万枚製造可能の大レコード工場」（1940『宣撫月報』5巻4号）の竣工披露会が開催された。満州蓄音器は「録音スタジオとレコード工場を建設、現地での自給自足体制をはかるとともに、つぎつぎと海外拠点を設置して市場の開拓に積極的に乗り出した」（日本ビクター株式会社50年史編集委員会編 1977:70）。

田辺が新京を訪問した1940年8月は満州蓄音器が「政府の宣撫工作に協力満系民族の文化工作に尽力して専ら民衆の教撫、娯楽方面のレコード製作を中心に」（1940『宣撫月報』5巻4号）活動し始めた時期であった。

満州における録音の際、様々な便宜を図った伊奈文夫は1940年当時、満州蓄音器株式会社文芸課長を務めていた。その後、伊奈はビクターが昭南市（シンガポールの日本名）にレコード工場を設立する計画に関わったが実現せず、戦後はアテネレコード代表取締役を務めた（安藤 1963年10月:7 参照）。



## (10) 採譜した音楽

1940年9月7日承德でラマ寺の音楽を調査し、普寧寺の蒙古僧が正月祭など活仏を迎える時に奏する《トフ》の旋律、蒙古ラマの読経の太鼓のリズム 葬式の音楽《クイチン》の旋律を採譜した(田辺 1970:377-378)。同日、承徳の熱河文廟の音楽を調査し、承德清音会による《昭平之樂》の旋律を採譜した(田辺 1970:379)。

1940年9月18日満州旗人7名でシャーマンの踊り「跳神祭」を調査し、読経のリズム、鼓のリズム、禱詞の旋律を数字譜にて記した(田辺 1970:406)。

## (11) 録音した音楽

1940年9月7日承徳のラマ寺(普寧寺)で中国僧による《水竜吟》《雨浪追舟》、蒙古僧による《トフ》、蒙古ラマの読経《ジーシャンテンモ》と葬式の音楽《クイチン》を録音した(田辺 1970:377-378)。同日、承徳の熱河文廟では承德清音会による《昭平之樂》を録音した(田辺 1970:379)。熱河文廟で「特鐘の音、また編鐘の中の十二律を順に懸垂してこれを録音した(田辺 1970:379)。「これらの鐘の音を録音した理由は、振動数測定装置を所持していなかったもので、録音だけしておいて、帰京してから東京で測定するつもりであったのである(しかるにこれをレコードに作って私の宅に送ってくる前に、満州で戦争のためにことごとく破壊されてしまった)」(田辺 1970:380)。さらに、熱河文廟の離宮の殿前で承德清音会による《山莊春曉》《梅花三弄》《東江》《惜黃花》《冬来》の5曲全てを録音した(田辺 1970:380-381)。

1940年9月18日吉林の雅楽を調査した際、文廟の音楽は録音せず、吉林雅楽《八仙歌》《金錢》《滿庭芳》《小華嚴》《蟠桃会》《柳青》《宝粧台》《朝鳳》《尋香》《長城》10曲を録音した(田辺 1970:403-404)。

## (12) 撮影した音楽・舞踊・楽器

田辺 1970:369-406 には調査で撮影した下記の写真が掲載された。

図 96: 磬の全形(上)と磬を吹く図(下)

図 104: 吉林雅楽—提琴

図 105: 吉林雅楽—大笙

図 106: 吉林雅楽研究社

図 110: シャーマンの踊り

田辺 1982:469 には「昭和 15 年満州吉林にて(満州旗人雅楽家とシャーマン一行)」の写真が掲載され、田辺の姿も確認できる。

## (13) 音律測定した楽器

持参した音叉と調子笛を基に、音律を測定した記録は以下の通りである。

1940年9月2日奉天の小倉陶器店にて「原物である遼の壺(筆者注: つちぶえ)を見せてもらった…中略…吹口を静かに吹いたら、柔らかない音がした。その音の調子を持参の調子笛で測ったところその音はD(日本の壺越)であった」(田辺 1970:358)。

1940年9月3日奉天博物館地下室に貯蔵する楽器類調査の際、周の特鐘を見つけ「試みにそれを叩いてみたら双調(g)より少し高い音がした」(田辺 1970:362)。

1940年9月6日熱河文廟で特鐘の音、編鐘の中の十二律について「音律はかなり狂っていたが、大体においてつぎのような律になっていた。黄鐘(ホ)、大呂(嬰へ)、太簇(嬰へ)、夾鐘(ト)、姑洗(嬰ト)、仲呂(イ)、蕤賓(イ)、林鐘(ロ)、夷則(ハ)、南呂(嬰ハ)、無射(ニ)、応鐘(ニ高)。(ニ高たるはニの音と嬰ニの音との中間であることを示す)」(田辺 1970:380)。

1940年9月14日ハルビンの博物館で「梵鐘…中略…の音を調べてみたら正確に平調(e)であった」(田辺 1970:391)。

1940年9月17日吉林にて「娘々廟の隣に細長い楼閣があり、その廊下の入口に1個の鉄製の磬が軒から吊下げてある…中略…その音を調べたら勝絶(f)であった」(田辺 1970:400)。

## (14) 調査地での講演会

①1940年9月3日、演題「満州を中心とする東亜音楽について」

場所: 奉天博物館。♪所持のレコード使用

②1940年9月11日、演題「満州を中心とした東亜音楽に就て」場

所: 国防会館。♪持参した高麗楽のレコード使用。「ビクター社の伊奈氏が最高級の電気蓄音器を用意してくれた」(田辺 1970:387)。

本講演を告知した記事は、1940年9月5日「講演と音楽の夕」『満洲新聞』、1940年9月7日「田辺氏の音楽講演」『満洲日日新聞』、1940年9月10日「世界に冠たる満州の古典楽」『満洲新聞』、1940年9月11日「“古典楽を研究” 田辺氏新京へ」『満洲日日新聞』。

③1940年9月14日、演題「不明」場所: 厚生会館(哈鉄クラブ)。

♪レコード使用

## (15) 録音機材

録音は奉天中央放送局録音班3名に委託された。「私ども一行と共に奉天放送局の録音隊や電気工夫一隊十数名が乗り込んでいた。承徳におけるいろいろの演奏レコードに録音するためである。何しろ新しく電気の設備までしなければならぬのであるから大変である」(田辺 1978年9月:111)。「之れ等の諸準備が完了するまでに2日ばかりを要した」(田辺 1941:108)と、関係者を総動員して録音された。また「私が満州で録音したのは熱河と吉林と合わせて50枚ほどになる」(田辺 1978年12月:50)と、録音のためにレコード盤約50枚を使用したことがわかる。

他に「自動車で放送局に行きポータブル蓄音器を借り、それよりコロムビア社出張所に行きその修理を頼み」(田辺 1970:359)という記述がある。旅行記の中には、ポータブル蓄音器で音楽を録音した記録がないため、講演会で使用するために修理を依頼したと推察される。

(16) 写真撮影機材 写真を撮影したが、機材の詳細は不明である。

(17) 映像撮影機材 該当する記録は見当たらなかった。

#### (18) 音律測定器

音律は持参した音叉と調子笛を基に測定した(田辺 1941:100)。

#### (19) 持参したレコード

1940 年 9 月 3 日奉天博物館における講演では「所持のレコードを用い」(田辺 1970:360)、1940 年 9 月 11 日国防会館における講演では「持参した高麗楽のレコードを用いて、2 時間ほど話した」(田辺 1978 年 12 月:47)。だが、レコードの詳細は不明である。

(20) 購入したレコード 該当する記録は見当たらなかった。

#### (21) 現地で提供受けた映像・音楽・楽器

田辺は 1940 年 9 月 10 日満州映画協会(1937 年新京に設立)に同会で撮影した『冬の満州』の映写を依頼した。実写を見た田辺によると、「この映画の中にはオロチョンの歌とラマ廟の跳鬼(打鬼)の踊りが映されている」(田辺 1970:383)。

1940 年 9 月 12 日国務院総務庁文化科・斉藤隆夫と新京の放送局に行き「鈴木正氏の案内で地下室の日本間に至り、多くの録音盤を聞かせてもらった」(田辺 1970:389)。田辺の注意をひいたのは「(1) バイカル地方から山岳地方に移住してきたコサックの民謡(合唱) (2) 承德のラマ読経と音楽 (3) 承徳の清音会会員の奏楽 (4) 承徳文廟の雅楽 (5) 蒙古の歌と馬頭琴の演奏 (6) カンジル廟の馬市の歌 (7) 蒙古の相撲の声援歌」(田辺 1970:389)であった。

1940 年 9 月 12 日満州蓄音器株式会社へ行き、「星野秀敏専務を訪ね、録音室で最近録音の満州音楽レコードを聞かせてもらう」(田辺 1970:389)。その中で特に田辺の注意をひいたのは「(1) 影絵芝居の音楽 (2) 京韻太鼓と鉄片太鼓…中略…(3) 洛子(最近の流行歌。これは中国の民謡) (4) 茉莉花と鎮歌(新京音楽院で録音したもの)」(田辺 1970:389)であった。「影絵芝居の音楽は複製してもらって東京の私の宅に送ってもらうことを依頼したが、その後戦争が激しくなりついに送ってもらえなかった」(田辺 1970:389)。

#### (22) 調査で入手した物

1940 年 9 月 6 日承德清音会会員が演奏する 16 曲の楽譜(上尺工譜)を入手した。「(11) 録音した音楽」に記した承徳の熱河文廟における録音はこの楽譜から選曲した(田辺 1970:375)。

1940 年 9 月 14 日南崗新買売街の骨董品、トムスクに行き「この店で小型のバラライカ 1 個 20 円で買い求め…中略…キタイスカヤのロシア人百貨店チューリン(秋林)に行き、ロシアのジプシー・ソングのレコードを」(田辺 1970:392)購入した。

1940 年 9 月 18 日吉林の河南街に出掛け、「楽器店で管子(ヒチリキ)を 3 円で買う」(田辺 1970:407)。

(23) 成果◎研究発表 該当する記録は見当たらなかった。

#### (24) 成果◎講演

1940 年日本音響学会で講演「満州音楽視察談」を開催し、その内容は田辺 1940 年 11 月:56-65、田辺 1941:94-131 に掲載された。ラマ寺で聴いた喇叭の独奏曲《トフ》について解説した後、持参したレコード《チベット、ローマの喇叭の曲》を聴かせた。

#### (25) 成果◎論文・書籍

田辺尚雄 1940 年 11 月「満州音楽視察談」『音楽倶楽部』1940 年 11 月号

田辺尚雄 1941「満洲音楽視察談—日本音響学会における講演」『東洋音楽の印象』

田辺尚雄 1970「満州」『中国・朝鮮音楽調査紀行』

田辺尚雄 1978 年 9 月「思い出ばなし=16: 熱河離宮の雅楽とラマの音楽」『季刊邦楽』16 号

田辺尚雄 1978 年 12 月「思い出ばなし=17: 孔子廟祭典と吉林の雅楽」『季刊邦楽』17 号

田辺尚雄 1982「第一次満州旅行」「満州旅行」『続 田辺尚雄自叙伝』

#### (26) 成果◎レコード・CD

1940 年 9 月 13 日「電電本社によって録音盤数枚もらい」(田辺 1970:390)という記述があり、録音盤について次のように説明した。

「私は熱河における録音のうち『山莊春曉』『梅花三弄』(両面 1 枚)。吉林雅楽録音のうち『蟠桃会』『金錢』(両面 1 枚)『宝粧台』(片面 1 枚)。以上 3 枚のテスト盤を東京に持ち帰った。そのほかの録音は全部レコード本盤にして東京の私の宅まで送ってもらうことを約束して帰京したが、それっきり満州から何の音沙汰もなくてついに終戦を迎えることになった。私はそのレコードの行方について心配していたので、昭和 31 年秋に文化人訪中団として中国に行ったときに、中国政府の当局にこの録音盤の行方について調べてもらったが、行方不明とのことで、おそらく満州は激戦地であったので放送局とも荒廃に帰してしまっただろうと推測される」(田辺 1970:411-412)。

なお、田辺が監修、選曲した SP レコード『東亜の音楽』全 10 枚(8.3.2 参照)(コロムビア、S-6001~6010、1941)には熱河文廟から《山莊春曉》、吉林の雅楽から《蟠桃会》を収録した。

#### (27) 成果◎ラジオ放送

「新京に戻り、今まで調査した結果を一通り簡単な報告を政府に致しまして、又たそれを新京放送局から放送をしたり」(田辺 1941:131)とあるが、放送内容は不明である。

## 8. 田辺の民族音楽調査にみる録音テクノロジーの進化・活用

表 1 は田辺の 1921 年～1940 年アジア・沖縄の民族音楽調査における音律測定・録音・写真・映像撮影の変遷を整理したものである。

音律測定は朝鮮のみで振動数測定装置を使用し、中国では音叉、満州では音叉と調子笛を活用した。録音機材として台湾・沖縄・樺太では写声蓄音器(写真 1、写真 2、写真 3 参照)、南洋では日の本写音機(写真 3 参照)を使用した。一方、満州では奉天中央放送局に

録音を委託した。写真撮影は全ての調査地で実施した。

映像について朝鮮では朝鮮総督府映像撮影班が撮影し、南洋では田辺自身が持参した 7.5 ミリ映写機で撮影した。また、6 つの調査地(南洋以外)では講演の際、蓄音器とレコードを使用した。

本節では上記の結果を踏まえ、8.1 では田辺の教育・研究活動にみる蓄音器・レコードの活用、8.2 では録音テクノロジーの進化、8.3 ではレコードに収録された現地録音曲について考察する。

表 1 音律測定・録音・写真・映像撮影の変遷

作成:高橋美樹 2020.11.10

調査年月	調査国・地域	音律測定	録音方法	録音機材	写真撮影	映像撮影
1921年3月～4月	朝鮮(日本領)	振動数測定装置	×	×	○	朝鮮総督府映像撮影班
1922年3月～4月	台湾(日本領)	×	自身で録音	写声蓄音器	○	×
1922年7月～8月	日本・沖縄県	×	自身で録音	写声蓄音器	○	×
1923年4月～5月	中国	音叉	×	×	○	×
1923年7月～8月	樺太(日本領)	×	自身で録音	写声蓄音器	○	×
1934年8月～9月	南洋 (日本の委任統治領)	×	自身で録音	日の本写音機+ ポータブル蓄音器	○	7.5ミリ映写機
1940年8月～9月	満州	音叉／調子笛	放送局に委託	×	○	×

## 8.1 田辺による蓄音器・レコードの啓蒙活動

田辺は 6 つの調査地(南洋除く)で講演した際、蓄音器でレコードを再生しながら音楽を解説した。「明治の末年から大正にかけては、日本全国にわたって音楽の講演を依頼されて、北は樺太から南は沖縄の果て(八重山群島)まで、殆んど行かないところはない位に講演旅行をした。…中略…それ等は悉く豊富なレコードを充分に使用して説明した」(田辺 1965:300)。このことは同時に日常的な教育・研究活動において、蓄音器・レコードを積極的に活用していたことを示す。田辺の蓄音器・レコード活用や音楽鑑賞教育については、鈴木 2019、寺田 1997 の先行研究がある。8.1 では先行研究を参照しつつ、蓄音器・レコードの啓蒙活動について整理する。

## 8.1.1 著書・雑誌にみる大衆への蓄音器・レコードの啓蒙

田辺は 1904(明治 37)年頃から銀座の十字屋楽器店に出入りし、アメリカのビクター・レコードによる赤盤(西洋クラシック)を購入し、主にパイオリンとオーケストラのレコードを収集していた(田辺 1982:240 参照)。

また、1923(大正 12)年 1 月文部省レコード推薦事業が開始し、田辺はレコード推薦委員<sup>9)</sup>に任命された。「音楽鑑賞用レコードの優劣を判定する立場」(寺田 1997:1)になり、個人的なレコード収集活動を越え、あらゆるレコードを聴取できる社会的環境が整った。

さらに、蓄音器の選び方・利用法、推薦レコードに関する文章を著書や雑誌へ次々に発表した。想定する読者の対象は音楽家ではなく、一般大衆であった。例えば、田辺初の著書『音響と音楽』(1908)は東京帝国大学在学時代からの音響学研究の成果が反映されている。本著「第 1 編:音響 5 章 音の分析及び蓄音器」にはエジソン

によるフォノグラフ Phonograph、ベルリナーによるグラモフォン Gramophone(筆者注:本著では Graphophone と表記)の構造について図を提示し解説した。

レコード雑誌『蓄音器世界』(1917 年 5-6 月:4 巻 5-6 号)では、蝋管や平円盤による蓄音器の発達史、製造・修繕の知識を解説し、多種多様なレコード針の実験により、同一針を 2 回以上使用する不適切さを伝えた。「将来此方面に有用なる発明をなさんとする人達の輩出を促そう」(田辺 1917a 年 5 月:118)と、波及効果を期待した。『蓄音器世界』の後継雑誌『音楽と蓄音器』(1920 年発刊。1922 年 8 月『音楽と蓄音機』に改題)では編集顧問を務め(鈴木 2019:130 参照)、アジア・沖縄の民族音楽調査紀行を初め、多数の論考を寄せている。そして、雑誌等に掲載した蓄音器関連の文章をまとめ、1922 年著書『家庭に必要な蓄音機の知識』を出版した。

1931 年著書『蓄音機とレコードの撰び方・聴き方』(一部は須永克己に拠る)に関する書評を音楽評論家・堀内敬三が『朝日新聞』に発表している。堀内は「レコードを買う人がいつも困る問題は何かを買うべきか…中略…その人々の需要を充たすものとして最初のものでありかつ恐らくは唯一の特色を持ったもの」(堀内 1931 年 12 月 4 日:6)と評価した。蓄音器の選用法・構造・保存手入れ法・故障させない方法・音の調節法について、初心者にもわかる丁寧な解説と図で示した。目的別レコード選択方法を提案し、300 余種のレコードも紹介した。蓄音器・レコードに対する人々の興味を掻き立て、予想される使用上の困難点の克服法まで記した実用書の出版は極めて画期的な出来事だった。

また、田辺は蓄音器の普及を目指し、1924 年 8 月監輯者として雑誌『蓄音器と音楽』を創刊する。創刊号(1 巻 1 号)では「蓄音器

と音楽との使命」を熱く語り、音楽の効用について(1)人格の修養、(2)子供の想像力養成、(3)仕事の能率向上、に分けて解説した。同雑誌の廃刊年は不明だが、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター資料室には1巻1～5号(1924年)、2巻1～2号(1925年)が所蔵されている。

### 8.1.2 授業(講義)にみる蓄音器・レコードの活用

1916年6月17日『朝日新聞』では、田辺の経歴を次のように紹介した。

「彼が奇抜なる音楽上の新施設は、蓄音器を利用して東西古今の音楽史上の知識汎布に関する独創の企てなり。即ち彼は無数の盤を蓄えて東西各国諸種の曲譜を供う、中には1千年前の古曲すらありて、面の当たり之を实地に聴くの便あり。此の『活きたる世界音楽史』は実に彼が創案なり…中略…彼は私立東洋音楽学校の有力なる講師の1人なり。彼は此処にても蓄音器を応用して東西音楽史科を学生に講義す」(下線部筆者)(1916年6月17日『朝日新聞』3)

上記は1916年当時、蓄音器・レコードを活用しつつ世界各国の音楽史を講演する田辺の実績が既に認知されていたことを示す。そして、レコードを活用する実践を「彼が創案なり」と紹介した。だが、田辺によると、学校における講義に初めてレコードを使用したのは東京音楽学校で美学の教師をしていた田村寛貞だという(田辺1965:299)。

また、1907(明治40)年「東洋音楽学校の講師として赴任してからは、音楽理論<sup>7)</sup>の講義などにも積極的に蓄音機を利用し」(寺田1997:1)、上記でも「蓄音器を応用して東西音楽史科を学生に講義す」と紹介された。

1915年著書『西洋音楽講話』は田辺が1915(大正4)年8月1日～10日東洋音楽学校夏期講習会で講義した内容をまとめたものである(田辺1915:1)。「同講習会にはその実例を示すために数百枚の蓄音機音譜を使用して講演したのであるが、今之を筆記として書物にするとすれば、之等の実例は悉く之を省略しなければならない」(田辺1915:1)。実際、本著では曲名と作曲者名は紹介しているが、どの曲をレコードで聴かせたかは確認できない。「頗る遺憾のことであるが致方はない。読者は出来る限り蓄音器に就て実地研究せられんことを望む」(田辺1915:1)と実際に曲を聴取することを期待した。

なお、1931年著書『蓄音機とレコードの撰び方・聴き方』『レコードの聴き方』では学校教育における蓄音器・レコードの使用法について指針を示している。

### 8.1.3 講演にみる蓄音器・レコードの活用

田辺は講演でも蓄音器・レコードを活用して音楽を紹介した。「一般の公開講演のときにレコードを使用したのは私が初めてで、明治

41年からである。そのころ私は屢々日本音楽や西洋音楽について各所の講演を依頼された。その度毎に必ずレコードを使用した」(田辺1965:300)。

初めて他県で講演したのは1912(明治45)年<sup>8)</sup>長野県南佐久郡野沢沢町である。西洋クラシックなど「優秀な芸術的レコードを地方公演に用いたのは、この長野県が最初であった」(田辺1982:227)。「面白く珍しいレコードを沢山交えて講演時間約2時間半、それに引続いて民謡や踊りの話など沢山交え、ついに家庭踊までやって予定の3時間を一ぱいに費してしまった」(田辺1982:228)。

1918(大正9)年8月長野県木曽福島町・小学校講堂での講演では、「レコードを携えて同町に」(田辺1982:230)行ったものの、「学校には蓄音器がないので町の軒の蓄音器店から借りて来た」(田辺1982:230)。

同じく明治末年頃の地方講演の出来事として、『「レコードはすべてこちらから持参するから、器械(筆者注:蓄音器)だけでよろしい』と言って借り、ビクターのレコードでベートーヴェンの交響曲やモザルト(筆者注:モーツァルト)のピアノソナタ、バッハのオルガン曲などを持って行く」(田辺1965:300)。

また、1917年蓄音器・レコードと実演(歌唱・箏演奏)<sup>9)</sup>を交えて、日本音楽の発達史に関する講演をした記録が田辺1917a、田辺1917bである。「西洋のものなどは蓄音器で、日本のものも先ず説明に必要なものだけは蓄音器を使います」(田辺1917a:41)と述べ、ジャンルによってレコードを効果的に使用した。注目したいのは、蓄音器・レコードの再生箇所には「此時蓄音器入」義太夫 壺阪(大隅太夫)、「此時蓄音器入」(グレゴリー聖詠)と別記した点である。また、実演は「此時講師「庭燎」の歌を謡う」[此時講師箏を弾きながら君が代を唱和す]、解説の際は「此時箏を使用して音律の説明を為す」とある。

また、興味深いのは蓄音器使用によって起きる不便さを経験的に語ったことである。1点目として「蓄音器は売物ですからナカナカ研究的に入って居りませぬ、丁度説明に都合の好いように…中略…丁度それに宜く当嵌った蓄音器がありませぬ」(田辺1917a:41)。つまり、講演内容の意図に合致したレコードが発売されておらず、不便である。2点目として「蓄音器を使いますと時間が大変に掛ります、少し大きな盤ですと1枚5分位掛りますと説明などをして居ると1時間の間に盤だけやって居った所で10枚が精々、説明なしにして居っても15枚」(田辺1917a:41)と記した。レコードの再生・説明に費やす時間が大幅にかかるため、時間に制約のある講演では時間配分に配慮が必要である。3点目は「平安朝時代のものは殆ど入って居りませんが、唯此処に僅か数枚あるだけ」(田辺1917a:41)と記した。田辺が重要視している平安朝時代の音楽のレコードはレコード会社としても売り上げが見込めないため積極的に販売せず、僅か3、4枚しかなかった。

これら3点は音楽に関する講義や講演をする人々にとって、解決し難い永遠の課題である。筆者も授業準備のため、日々CD音源の



購入・選曲と内容に即した音源の編集に追われている。そして、田辺はレコードで紹介できない音楽は自身による生演奏で補完した。この実演による音楽解説も現代に通じる手法である。田辺は「1種の『デモンストラチオン(筆者注:demonstration)』と云うようなもので自分でやりつつ御話をしたい」(田辺 1917a:42)と語り、実演とレコードを活用した講演を1917年に開催した<sup>10)</sup>。

また、1.1(24)で述べた1921年7月15日「第1回教育學術活動写真及蓄音器大会」(主催:蓄音器世界社)(於:東京市神田区美土代町青年会館)にて、蓄音器に関する講演・解説を行った。大会ポスター(図1参照)では「活動写真及蓄音器ノ利用宣伝」とその目的を掲げた。大会プログラム(国立劇場所蔵)によると、第1部:活動写真、第2部:蓄音器で構成され、使用機材を提供した岡本洋行株式会社(東京市芝区今入町15)の広告が商品名(活動写真機、蓄音器、楽器、楽譜他)とともに掲載された。プログラムによると、第2部の演目は以下の通りである。

#### 「第1回教育學術活動写真及蓄音器大会」

##### 2、蓄音器

##### レコード種目

○コーライナレコード      ○馬來音楽レコード

○日本古代音楽レコード      ○其他東西名曲レコード

使用蓄音機      チニー電動蓄音器。理学士田辺尚雄氏解説(ママ)

田辺は上記のレコードをチニー電動蓄音器によって観客に聴かせ、蓄音器の解説をしながら普及・宣伝に務めたのである。

## 8.2 写音機・写声蓄音器・日の本写音機

田辺は録音機材として、1922年～1923年台湾・沖縄・樺太調査では写声蓄音器(写真1、写真2、写真3参照)を、1934年南洋調査では日の本写音機(写真3参照)を使用した。関連する録音機材について朝日新聞を調査した結果、写声蓄音器の発売以前、日本写音機商会から「写音機」という商品が販売されていた。さらに、写声蓄音器の開発に田辺は顧問として関わっていた。本節では写音機、写声蓄音器、日の本写音機の録音機材について整理する。

### 8.2.1 写音機<sup>11)</sup>(1919年発売)

声を録音・再生する新機材として「写音機」の広告が掲載されたのは1919年7月16日である。見出しは「新案写音機」と打ち、「浅草区福富町の日本写音機商会から今度発売する新案特許写音機と云うのは従来の蓄音機に或る装置を施したるものにて肉声其儘を発声し娯楽用は素より語学音楽の参考とするによしと」(1919年7月16日『朝日新聞』7)とある。レコードを再生するだけでなく、肉声をレコードに録音し、実生活に活用できると打ち出した。本格的な宣伝広告は下記であり、1919年8月21日に掲載された。

新案特許 第46084番、第94522番、第92446番、第94523番

最新の発明で如何なる蓄音機にも簡易に取付自身の吹込んだ肉声を即座に聞くことを得故に娯楽用は勿論重要な実務に必要欠くべからざる要具なり

正価格 写音機1台金33円 写音板1枚金2円50銭

発売元 日本写音機商会

東京浅草区福富町21番(電車蔵前森田町)

特約店販売店を求む 目録書御申込次第御送付申上候

電話下谷4442番 振替東京44977

(1919年8月21日『朝日新聞』4)

1919年8月21日日本写音機商会から写音機が金33円、録音する写音板(レコード)1枚金2円50銭で販売された。4種の新たな特許を取得し、「特約店販売店を求む」という文言から、販売網を拡大しようとする戦略が伺える。

さらに、「大阪朝日新聞社のご用命に依りて上納したる写音機が3時間18分にして大阪より東京へ生声其儘を完全に伝達したるは世界に於ける最初の試みに成功したる者にして弊商会絶大の光栄なる事を江湖に謹告す」(1919年10月26日『朝日新聞』1)と掲載した。写音機により肉声を録音した写音板を大阪から東京まで、たった3時間18分で伝達することに成功した、という報告である。写音機の多様な活用法を読者に告知したいという商会側の情熱が透けてみえる。

1919年11月27日『朝日新聞』7の広告では「写音板は幾度でも削ってつかえます」と、録音する写音板が繰り返し使用可能である利便性を強調した。合わせて、本商会以外の販売店として東京写音機販売所(東京市日本橋区檜物町1)が加わった。

1920年3月18日『朝日新聞』4(図2参照)では女性が写音機を聴いているイラストが目を惹き、「持ち合わせの蓄音機に取付けて御自身の声が直ぐ聞けますから語学音楽の稽古遺言には極めて重宝な斬新の発明品」と具体的な活用法を明示した。さらに、関西の栄商会(大阪市西区新町通)、九州の大日本家庭音楽会(福岡市中島町)、満州の栄商会(大連市波花町:広告表記は波速町)と、特約販売店を国内外へ拡大した。

柳田国男は1919年12月貴族院書記官長を退職する際に同院議員御一同から写音機を送られた。柳田の長男・為正は1922年春頃、渡欧中の柳田が一時帰国した際、家族で写音機に歌を録音し、別の蓄音器で再生したエピソードを綴っている(大藤・柳田編1981:168参照)。他社でも写音機を販売していたと思われるが、柳田が使用したのは1台で録音・再生できない機器であり、日本写音機商会の写音機であった可能性も否定できない。

写音機がどのくらい大衆に普及していたのかは不明である。しかし、語学や楽器の独習、遺言伝達など、日常生活における写音機の活用法が1919年に新聞紙上で提示されていた。

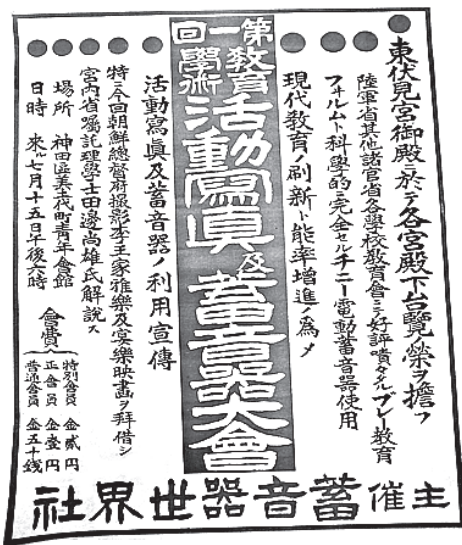


図1 1921年7月15日「第1回教育學術活動写真及蓄音器大会」ポスター(国立劇場所蔵)



図2 1920年3月18日「広告:寫音機」『朝日新聞』p.4

### 8.2.2 写声蓄音器(写声蓄音機) (1922年～1923年田辺が使用)

朝日新聞に日本写声蓄音機合資会社(東京市京橋弓町4)による写声蓄音機の広告が掲載されたのは1921年1月13日である。写声蓄音機のラッパに耳を近づけ音楽を聴く女性のイラストが広告の大部分を占め、見出しの写声蓄音機には「ニッポンデクタホン」とルビが振ってある(1921年1月13日『朝日新聞』5)。写音機と同様、「演説、講演、講話の映る声、語学発音または音楽の独習」に活用を見出し、「無喇叭式蓄音機と喇叭式との両用」を図る。「顧問 田辺尚雄」とあるため、田辺が写声蓄音機の開発に協力、助言をしていたと推察される。「写声蓄音機ポスター」(図3参照)にも口述録音機を意味する「Nippon Dictaphone」と写声蓄音機が併記され、「顧問 田辺尚雄」の名前が確認できる。

1921年5月14日の広告は、写声蓄音器のイラスト入りで次のように紹介された。

「今までの蓄音機では只他人の吹込んだ声を聞く許りででしたが今度発明された写声蓄音器は普通蓄音器と写声器とを兼ねたもので御自身の声が即座にレコードとなって直ぐ聞けるという調法なものですから語学音楽の稽古は勿論不在中の伝言や遠方の人に御自身の肉声を送るとか又は遺言などを吹込んで後世に伝えるという極めて斬新なる実益と趣味を兼ねたもので一度吹込んだ原盤は数百回の聴音が出来又どなたにも削直しが出来ますから1枚の原盤で数十回の吹込みが出来ますし又普通蓄音器に用いる時は無喇叭図形にも喇叭付にも両用出来ます。本品は音楽界の泰斗田辺尚雄先生を顧問とする…中略…値段は1台80円 原盤1枚2円50銭」(下線部筆者)(1921年5月14日『朝日新聞』夕刊:3)

写声蓄音器は「普通蓄音器」と「写声器」を兼ねており、原盤に録音・再生が可能である。前述の写音機では「写音板」と呼んでいたが、写声蓄音器では「原盤」と呼称した。写声蓄音器の機能や活用法は写音機と共通しているが、再生が数百回可能であり、原盤の削り直しにより録音も数十回できる。そして、顧問の田辺を「音楽界の泰斗」と引き立て、商品の信用性を高めている。「値段は1台80円:原盤1枚2円50銭」とあり、写音機(33円)の2倍以上の価格であった。

1921年8月18日広告(図4参照)では販売所として大阪出張所(北区北野東之町622)が追加された。

翌1922年の広告では「平和博第一会場教育館前写声館にて毎日実演」と銘打った(1922年4月14日『朝日新聞』夕刊:3)。平和博とは1922年3月10日から7月31日まで、東京上野公園で開催された「平和記念東京博覧会」(主催:東京都)を指す。「この博覧会は、入場者が1千万人を超えるという、国内博覧会ではかつてない大記録をうちたてた」(寺下編 1987:252)。さらに、レコード産業の新しい技術をお披露目する貴重な場でもあった。例えば、大阪の「ニッソーレコードはこの博覧会の活動写真館において、録音風景やレコード製作の模様を活動写真機によって撮影している」(高橋 2010:112)。この公開パフォーマンスは「ニッソーレコードの極めて高い技術を、他の大手レコード会社に周知させる目的もあった」(高橋 2010:112)。日本写声蓄音機合資会社も教育館前の写声館で、新機材の写声蓄音器を披露し、録音・再生する公開パフォーマンスを毎日実演していたのである。

### 8.2.3 日の本写音機<sup>12)</sup> (1934年田辺が使用)

田辺は1934年南洋調査で日の本商会(東京市日本橋区通3丁目8番地)製作の日の本写音機(特注品)を使用した。この装置は田辺が日の本商会へ直接依頼し、調査用の携帯録音機として新たに製作させたものだった(田辺 1968:30 参照)。「一般の蓄音器にとりつける



図3 写声蓄音機ポスター(日本写声蓄音機合資会社)(国立劇場所蔵)



図4 1921年8月18日「広告:写声蓄音機」『朝日新聞』夕刊、p.1

ことのできる録音器であり、横振動式の溝を切りこむ。そのカッターの送り装置はユニバーサルジョイントの先端をターンテーブル中央の突起にはめこむようになっている…中略…価格は当時 80 円であった」（田辺秀雄 1978a:2）。南洋調査では日の本写真機を「当

時流行していたゼンマイ式の携帯用(ポータブル)蓄音器に取付け使用した」(田辺秀雄 1978a:3)。

田辺が特注製品を依頼した理由は、日の本商会在1931年家庭用の録音機「日の本写音機」を既に販売していたからである。発明した人物と製品について「昨年までインドのカルカッタ領事だった元外交官の日本橋区通3丁目8 朝岡健氏が全く畑薙いの蓄音器吹込器を発明し特許出願中であるが、今までに外国にも類のない精巧で簡易実用的な国産品」（1931年3月25日『朝日新聞』夕刊:2）とある。朝岡健は外務省に長く勤務し、英国大使館、在奉天総領事館、カルカッタ総領事（1927-1929）を務めた人物である。日の本商会在1931年5月11日下記宣伝広告（図5参照）を掲載した。

発売

世界に冠たる蓄音器用吹込み機

特許既願 日の本写音機

…中略…本機の特長

○左右動吹込即ち本式の吹込です

○総ての蓄音器に直ぐ取付き操作も頗る簡単で其上其蓄音器のサウンドボックスを其儘吹込に利用することも出来ます

○吹込用レコードは特殊加工の金属板で明瞭な高音の肉声が雑音なく出其上寒暑に対し心配もなく又破壊の□もありません

○本機で吹込んだレコードは普通の蓄音器に普通に掛け特別の装置特別の聞針の必要もありません又回数は普通レコード以上に掛ります

○機械もレコードも非常に安い価格です

家庭用機(サウンドボックス付) 1 台	35 円
電気吹込用機	1 台 600 円
吹込用レコード(大形)	1 枚 30 銭
同 (小形)	1 枚 20 銭

○本機の電気吹込み用機に附随するマイクロホンは当局が世界無比と折紙を附せられて居る最高級品です

電気吹込み応需[弊商会本店(中将湯本舗隣)で致します料金は1分  
間50銭の割です]

日本橋区通3丁目8番地(電話日本橋535番)

製造発売元: 日の本商会

(下線部筆者)(1931年5月11日『朝日新聞』7)

市販の蓄音器のサウンド・ボックスに取り付け、簡易な操作で録音・再生できる日の本写音機の秘策は「音波吹込の標準重量を分銅で調節し蓄音器の弱いゼンマイの力で左右動により人造宝石の吹込針」(1931年3月25日『朝日新聞』夕刊:2)を使用することであった。前述の写声蓄音器は1台80円に対し、日の本写音機(家庭用機)は1台35円、同じく原盤1枚2円50銭に対し、吹込用レコード(大形)1枚30銭・(小形)1枚20銭である。確かに安価であるが、実際1931年にどのくらい需要があったのだろうか。



また、田辺は日頃から録音機材に関する最新の情報を入手していた形跡がある。田辺直筆による『音楽見聞録』全53冊の第11集<sup>13)</sup>に、家庭吹込機に関する新聞記事2件を書き写している。記事の文章は毛筆で記録し、写真2点「普通の蓄音機に吹込機を取りつけて吹き込んでいるところ」「吹込機の全部」は切抜き貼付した。1件目の記事から抜粋する。

「自分の声をレコードに自由に吹き込んで自分で聞くこと…中略…今度これが実に手軽に出来る機械が国産と銘打って出て来た…中略…僅に30円、東京府下尾久町にあって主として検微鏡の研究をしていた神藤新吉氏が約10ヶ年にわたって研究した結果…中略…これに「フォノ・カッピー」と命名しこの程銀座6丁目のフォノ・カッピー商会でいよいよ売出した…中略…特長はこの吹込器といふのが普通一般の蓄音機に手軽にとりつけられ、蓄音機を1台持っている人ならば誰でも吹き込んですぐその場で聞くことが出来る点だ。…中略…今のところ主として長唄、清元、謡曲等の稽古用に使用されたり、語学の勉強に用ひられたり」(下線部筆者)(1931年2月22日『東京日日新聞』5)

神藤新吉は1914年国産初の本格的顕微鏡「エム・カテラ」の誕生に機械工として貢献した人物である。「フォノ・カッピー」は神

藤が開発した録音機であり、一般の蓄音機に取付けることで録音・再生が可能な装置である。他の録音機と同様、三味線伴奏の歌いものの稽古に活用でき、その点に興味を抱いたのだろう。

2件目は朝岡健製作による日の本写音機の紹介である。

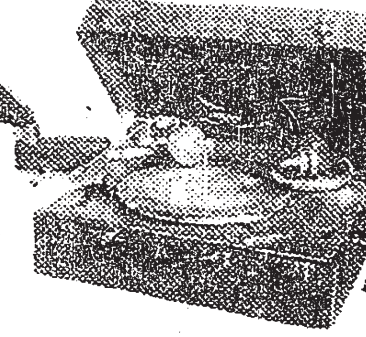
『日の本写音機』といひ…中略…レコードが軽金属で出来て居て、直径7インチ半と4インチ半といふ小さな薄いものなので、ボール紙2枚にはさんだゞけで郵送が出来る。また吹込器が左右動吹込になっているので、普通の蓄音器と針とで別に何の工夫もいらす聞くことが出来ます。家庭用の小型は35円といふ安さ、250円から940円までの大型の方はマイクロフォンで電気吹込が出来るといふ便利なもの…中略…器械を考え出したのが多年総領事として海外にあった朝岡健氏といふ全くの素人であることで、同氏は出来上った器械について蓄音器ラヂオ等の権威に試験を求めたところ、意外に評判がよいので一般に売り出したのです」(下線部筆者)(1931年7月10日『東京日日新聞』7)

田辺は朝岡健製作による日の本写音機の新新聞記事を読み、重要な装置だと考えたからこそ『音楽見聞録』に記録した。より手軽で正確な録音機の可能性を見出し、次の民族音楽調査に携帯する調査用の録音機を日の本商会へ発注したと考えられる。

**世界に冠たる蓄音器用吹込機**

**既特 日の本写音機**

御自分の御聲や音楽が完全に且容易に吹込め其儘聞くことが出来来向永久に保存することも遠隔の地に送ることも確實容易且低廉出来ます(本年三月廿五日 東京朝日新聞社会面記事参照)本機は本邦に於ける蓄音器及ラヂオ関係の最高權威である當局が極力御推薦に成り又御後援になつて居る世界的發明品です



**本機の特長**

○左右動吹込即ち本式の吹込です  
 ○總ての蓄音器に直ぐ取付き操作も煩  
 ○簡単で其上其蓄音器のサウンドボ  
 ○ツクスを其儘吹込に利用することも  
 ○出来来ます  
 ○吹込用レコードは特等加工の金板  
 ○で明瞭な高音の肉聲も雑音なく其  
 ○上寒暑に對し心配もなく又破損の虞  
 ○もありません  
 ○本機で吹込んだレコードは普通の蓄  
 ○音器に普通に通じ特別な装置特別の  
 ○通針の必要もありません又回数無  
 ○限に繰り返す  
 ○機械もレコードも非常に安値です  
 ○家庭用機(サウンドボックス付)  
 ○吹込用レコード(大形)  
 ○同吹込用レコード(小形)  
 ○本機の電気吹込用機に附屬するマイク  
 ○折紙を附せられて居る最高級品です  
 ○電気吹込應需(要料金は一分間五十銭の割です)  
 ○日本橋區通三丁目八番地(電話日本橋五三五番)

**製造發賣元**

**日の本商会**

四谷區旭町山手ビル内(電話四谷四一四番)

**日の本商会出張所**

三三五圓 六〇〇圓 二〇〇圓 一〇〇圓 五〇圓

台 台 台 台 台

図5 1931年5月11日「広告:日の本写音機」『朝日新聞』p.7



### 8.3 レコードに収録された現地録音・曲目

田辺が現地録音した音源の一部は市販レコードに収録され、現在も聴くことができる。「表2 レコードに収録された現地録音・曲目リスト」は台湾、沖縄、樺太、南洋、満州の記録から、(11)録音した音楽、(26)成果◎レコード・CDの情報を抜粋したものである。

8.3ではLP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』、SP『東亜の音楽』への収録状況を整理し、発売を巡る背景を探る。なお、LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』のジャケット(表)は写真4、レーベルA面・B面は写真5・写真6を参照されたい。

#### 8.3.1 現地録音とLP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』制作

LPを企画・監修した田辺秀雄が収録曲の選定基準について、次のように述べている。

「録音は南洋32曲、台湾山地民族21曲、樺太15曲、その他沖縄4曲あるが、その中の比較的重要でないもの、演唱者及び曲名等の不確かなもの、破損、音質の甚だしく不良なものなどは省いた。例えば南洋のクサイ島等は讚美歌しか聴くことが出来なかったというので、このレコードから外してある」(田辺秀雄1978a:3)

上記を念頭に、表2の現地録音曲とレコード収録曲を比較・照合してみる。

1922年3～4月台湾調査では女学生3名に卒業式の唱歌を歌わせ、持参した写声蓄音器の録音実験を行なった。翌日、タイヤル族ハック蕃の青年男女7人に4種類の歌を写声蓄音器に録音した。「第1回の私の実験は成功した」(田辺1922年6月:31)と記したように、この録音も実験的な要素が含まれていた。さらに、タイヤル族霧社族・パーラン社・蕃人30～40名男女、サオ族水社石印、サオ族ト吉・マカイタン、バイワン族ライ社・女3人による多種多様な歌を録音した。表2をみると、女学生3名の卒業式唱歌以外は全てLPに収録された。

1922年7～8月沖縄調査では沖縄本島で琉球古典音楽2曲(城間恒有《揚作田節》、伊差川世瑞《干瀬節》)、沖縄民謡2曲(富原盛勇《宮古ン子》《テマド節》)を写声蓄音器で録音した。石垣島では八重山民謡《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》を録音した。しかし、LPに収録されたのは《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》のみである。この理由として、気温が高過ぎて録音するレコード盤の蟬が軟化することが挙げられる。「蓄音器の吹込をこれだけにとどめたのは、蟬の具合が悪かったから」(田辺1968:285)と記しており、沖縄本島で僅か4曲しか録音しなかった要因にもなった。

1923年7～8月樺太調査では敷香でギリヤーク及びオロッコの男女15、6名に歌わせ、写声蓄音器の録音実験を行なった。この録音はLPに収録された。白浜ではアイヌの生徒に歌わせ録音実験をしたが、目的が写声蓄音器の録音・再生機能を理解してもらうことだったためか、LPには未収録である。白浜ではアイヌの老若男女の歌を5曲録音し、《オイナ》へレーケ以外の4曲がLPに収録された。

1942年8月南洋調査ではパラオ島の島民男女による歌数曲と老女2人の歌4曲を録音した。田辺1968には4曲の曲名が記録され、

その全てがLPに収録された。トラック島では田辺がトラック支庁へ恋愛に関する歌を要望していたためか、子どもから大人までが歌う恋愛の歌12曲を録音した。LPには12曲中7曲が収録された。クサイ島の公学校で大人男女20人の賛美歌合唱2曲と生徒の日本語の話し方を録音したが、LPには未収録である。ヤルート島ではジャボールの戦闘踊りの歌、ボナベ島ではアタライン《マタラニウム村に残っているスペイン戦争に関する歌》、エスペランサの賛美歌、新歌謡を録音した。田辺の記録に曲名の詳細は見当たらないが、LPにはその一部が収録された。

以上の整理から、田辺は現地録音を実施する前に試し録音を行っていた。そして、音を再生し、録音の成功を確認した上で、正式な録音に挑んでいたことが指摘できる。

#### 8.3.2 1941年SP『東亜の音楽』発売の背景

1938年日本コロムビアがSP『蒙古の音楽』を、日本ビクターがSP『印度の音楽』全5枚(1937年「ウダイ・シャンカール音楽舞踊団」アメリカ訪問時に録音)を発売した<sup>14)</sup>。このように民族音楽レコードは既に発売されていたが、1941年SP『東亜の音楽』は「日本で最初にまとまって刊行されたアジア音楽のレコード」(梅田1998:170)である。同SPのポスターは図6を参照されたい。1997年CD『東亜の音楽』(コロムビア、COCG-14342)として復刻された。

72ページに及ぶ解説書によると、収録曲は中国:9曲(満州3曲、中華民国4曲)、内モンゴ2曲)、インドネシア:5曲(ジャワ3曲、バリ2曲)、タイ:2曲、インド:3曲、イラン:1曲の全20曲である。

20曲を選曲した理由について、田辺は次のように記した。

「歴史的に観察する時に、広く現代のアジア音楽を通覧すれば、満洲及支那系、仏印及び蘭印系、印度系、中亜及び西亜系の4つの大系に区分されることを知る。ただし此の最後の中亜及び西亜系は又た之を細分すればトルコ系、アラビア系、イラン(ペルシア)系、蒙古系と分つことが出来…中略…今茲に私は西亜を除外して『東亜の音楽』を通観して、之れを満支系、蒙古系、タイ及びマレー系、印度系の4種に大別しその全貌を大観せしめるために、本名盤集『東亜の音楽』を編輯した」(下線部筆者)(田辺1997:31)

田辺による民族音楽調査で満支系、蒙古系、タイ及びマレー系、印度系に関わるのは1923年中国調査と1940年満州調査である。しかし、中国へは録音機材を持参せず、満州のみ録音に成功した。ただし、満州における録音は田辺自身が行わず、奉天中央放送局録音班3名へ委託していた。承德のラマ寺(普寧寺)や熱河文廟、吉林の雅楽では21曲(曲名記録あり)を録音したが、SP『東亜の音楽』には熱河文廟《山莊春晚》、吉林雅楽《蟠桃会》の2曲を収録した。その理由を田辺は「初め本名盤集の中に入れるべく選択したものは漢系に属する孔子祭楽、熱河離宮雅楽、吉林雅楽、影芝居音楽、及び満系に属するシャーマンの楽等であったが、枚数の制限の為に今回は次に示すごとく吉林雅楽と熱河離宮雅楽とを各1曲ずつ採って、他は凡て後の機会に譲ることにしてしまった」(田辺1997:36)。日本の雅楽のルーツでもある吉林と熱河離宮の雅楽を優先的に選

表2 レコードに収録された現地録音・曲目リスト

【注】録音曲のゴシック体はレコード収録曲である。

作成: 高橋美樹 2020. 11. 16

調査年	調査国	調査地	録音曲	レコード収録曲	録音方法
1922年 3～4月	台湾 (日本領)	外車埕	女学生3人「卒業式の唱歌」 (☆録音実験)		写声蓄音器
		霧社	タイヤル族ハック蕃・青年男女 7人「4種類の歌」 (☆録音実験)	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 (東芝EMI、TW-80011、1978) 【タイヤル族ハック】 a. 親しい友(アキンタイモ・女) b. 恋の歌(アキンタイモ・女) c. 首狩の踊歌(ブヨンウイラン・男) d. 恋の歌(ヨンガイタイモ・女)	写声蓄音器
		霧社	タイヤル族霧社族パーラン社・ 男女30～40人「4種の歌」	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【タイヤル族(セデック)霧社族パーラン社】 a. 耕作の歌(セッタノーミン・女・23才) b. 首切笛の独奏(アウイセーダン・男・32才) c. 首祭の歌(ウマノービン・女・23才) d. 首祭の歌(アウイセーダン・男)	写声蓄音器
		水社・石印・ ト吉	サオ族水社石印 《招反来遊の唄》《親睦の唄》	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【サオ族水社石印】 a. 招反来遊の歌(女声) b. 親睦の歌(女声)	写声蓄音器
		水社・石印・ ト吉	サオ族ト吉・マカイトン 《出草(即ち首狩出陣)の唄》 《凱旋の唄》 《歓迎の唄》 《耕作の唄》	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【サオ族ト吉】 a. 出草の歌(マカイトン・男) b. 凱旋の歌(マカイトン・男) c. 歓迎の歌(マカイトン・男) d. 耕作の歌(マカイトン・男)	写声蓄音器
		ライ社	バイワン族ライ社・女3名 《ボアリパンの唄》 《ジナロアの唄》 《オリジユマへの唄》	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【バイワン族ライ社】 a. ボアリパンの歌(女声) b. ジナロアの歌(女声) c. オリジユマへの歌(女声)	写声蓄音器
1922年 7～8月	日本	沖縄県 (沖縄本島)	城間恒有: 琉球古典音楽《揚作田節》		写声蓄音器
		沖縄県 (沖縄本島)	伊差川世瑞: 琉球古典音楽《干瀬節》		写声蓄音器
		沖縄県 (沖縄本島)	富原盛勇: 沖縄民謡 《宮古ン子》《テマド節》		写声蓄音器
		沖縄県 (石垣島)	八重山民謡 《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 8. 八重山民俗音楽 《ジラバガヌ、ソウソウ、ジラバ》	写声蓄音器
1923年 7～8月	樺太 (日本領)	敷香	ギリヤーク及びオロッコの男女15、 6人: ギリヤークのサンダー(男)、 ギリヤークのチョーガノ、ギリヤーク のホニヤッカン、ギリヤークのア ムタ、ギリヤークの娘アイトッカ (女)、オロッコのオーロ、オロッコ のトンゴッコ、オロッコのユイボッ コ、オロッコのオダブッチ「歌」 (☆録音実験)	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【6. ギリヤーク及びオロッコ族】 a. ギリヤークの歌(サンダー・男) b. ギリヤークの歌(ホニヤッカン・男) c. ギリヤークの歌(アムタ・男) d. ギリヤークの歌(アイトッカ・女) e. オロッコの歌(オーロ・男)	写声蓄音器
		白浜	アイヌの生徒「歌」 (☆録音実験)		写声蓄音器
		白浜	《エフンケー》エヌマ(女)、 《ヤイカテカラ》エヌマ(女)、 《ユーカラ(2種類)》坂井幸太郎、 《ハウキ》日勝勉之助、 《オイナー》ヘレケー(女)	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【7. アイヌ族】 a. エフンケー(エヌマ・女) b. ヤイカテカラ(エヌマ・女) c. ユーカラ(坂井幸太郎・男) d. ハウキ(日勝勉之助・男)	写声蓄音器

調査年	調査国	調査地	録音曲	レコード収録曲	録音方法
1934年 8～9月	南洋 (日本委任統治領)	パラオ島	(1) 恋人のところに忍んで行くときの歌(デブルポット・男) (2) 同じく恋人の家を訪ねるときの歌(同・男) (3) 恋する男と別れたときの歌(ヴェラットコイ・女) (4) コロール島民がアイミリキ村に旅行したとき、大いに歓迎されたことを感謝する歌(同・女)	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【パラオ諸島】 a. 恋人の家へ忍んで行く歌(デブルポット・男) b. 恋人の家を訪ねる歌(デブルポット・男) c. 恋人と別れた歌(ヴェラットコイ・女) d. 歓迎を感謝する歌(ヴェラットコイ・女)	日の本写真機 ＋ ポータブル 蓄音器
		トラック島	(1) 夜這いの歌(男 ニメタル) (2) 恋愛の歌(男 クーン) (3) 男が女に惚れた歌(男 カーリー) (4) 恋愛の歌(男 パパイヤ) (5) 恋愛の音歌(男 ファリゲル) (6) 恋愛の歌(男 ノバ) (7) 恋愛の歌2曲(女 イナットン) (8) 恋愛の歌(女 ネイラウ) (9) “あなたの夢を見て起きたらば、大そうつかれた”(女 イナットン) (10) “私はあなたの枕のしんになってあなたの言葉をききたい”(ナミ子。これは島民の女でトラック旅館の女ボーイ。12歳) (11) 恋愛の歌(小児 マンヌーキ) (12) 恋愛の歌(小児 リードック)	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【トラック諸島】 a. 夜恋人の家へ忍んで行く歌(ニメタル・男) b. 木遣り歌(森小弁 他) c. 恋愛の歌(クーン・男) d. 恋愛の歌(日本語)(クーン・男) e. 恋人の歌(カーリー・男) f. 恋愛の歌(マンヌーキ・少年) g. 恋愛の歌(リードック・少年)	日の本写真機 ＋ ポータブル 蓄音器
		クサイ島	大人男女20人「賛美歌合唱」 2曲、生徒の日本語の話し方		日の本写真機 ＋ ポータブル 蓄音器
		ヤルート島	ジャボールの戦闘踊の歌	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【ヤルート島(マーシャル群島)】 a. ウォッジェの戦闘踊(女声) b. ミレー島の戦闘踊(ネブタ他女声)	日の本写真機 ＋ ポータブル 蓄音器
		ボナベ島	老女・アタライン《マタラニウム村に残っているスペイン戦争に関する歌》、若い娘・エスペランサ「賛美歌」「新歌謡」	LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』 【ボナベ島】 a. スペインとマタラニウムの戦争歌(アタライン・女) b. テレペイショを求める踊歌(アタライン・女) c. 新歌謡(エスペランサ・女)	日の本写真機 ＋ ポータブル 蓄音器
1940年 8～9月	満州	承德	承德ラマ寺(普寧寺) 中国僧《水竜吟》《雨浪追舟》 承德ラマ寺(普寧寺) 蒙古僧《トフ》 蒙古ラマ読経《ジーシャンテンモ》、葬式の音楽《クイチン》		奉天中央放送局 録音班に委託
		承德	承德清音会《昭平之楽》		奉天中央放送局 録音班に委託
		承德	熱河文廟 「特鐘の音、編鐘の中の十二律」		奉天中央放送局 録音班に委託
		承德	熱河文廟・承德清音会 《山莊春曉》《梅花三弄》 《東江》《惜黃花》《冬来》	SP『東亜の音楽』 (コロムビア、S-6001B、1941) 熱河文廟《山莊春曉》	奉天中央放送局 録音班に委託／ 東京へ持ち帰ったテスト盤《山莊春曉》収録
		吉林	吉林雅楽 《八仙歌》《金錢》《滿庭芳》 《小華巖》《蟠桃会》《柳青》 《宝粧台》《朝鳳》《尋香》 《長城》	SP『東亜の音楽』 (コロムビア、S-6001A、1941) 吉林の雅楽《蟠桃会》	奉天中央放送局 録音班に委託／ 東京へ持ち帰ったテスト盤 《蟠桃会》収録



写真1 田辺が使用した写声蓄音器(部品別)



写真2 田辺が使用した写声蓄音器(装着)



写真3 写声蓄音器と日の本写音機

(LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』解説p. 2)



写真4 LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』ジャケット(表)

(東芝EMI、TW-80011、1978年)



写真5 LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』レーベルA面



写真6 LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』レーベルB面

写真1～写真6(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所蔵)



曲したといえる。解説書には調査で撮影した写真「吉林雅楽研究社(満洲)」(田辺 1997:8)も掲載されている。

田辺 1997:25-32 に綴られた SP 発売の経緯は、下記 3 点に整理できる。

- (1) 1936 年東洋音楽学会を設立し、各学会員が独自に研究を進め、資料収集に務めていた。「各種の資料が集まった中に、夥しい数の東洋音楽レコードがあった」(田辺 1997:25)ため、これらのレコードを編集し広く世の中に提供することの必要性を痛感した。
- (2) オーストリアの民族音楽学者・ホルンボステルが編集し、1928 年頃<sup>15)</sup> ドイツで発売された SP『東洋の音楽 Musik des Orients』(全 12 枚)について「外国人の異国趣味又は怪奇(エキゾチック)趣味に過ぎないことを見て実に遺憾に堪えない感を持った」(田辺 1997:26)。
- (3) 「我々日本人の手に依って正しく観察した所の東亜音楽名盤集を作り上げなければならないことを痛感した」(田辺 1997:26)。

(1)について、1938 年「東洋音楽学会・第 7 回例会」で榊原次郎が講演「印度音楽に就いて」を開催した際、インド音楽に関するレコードを使用し解説した。田辺は 1938 年 7 月「東洋劇・音楽芸術展覧会・講演会」(於:早稲田大学演劇博物館)にて講演「インド、ジャバ、バリの音楽」を行い、ジャワ、バリ、インドの音楽をレコードで聴かせた。また、先述したように、1939 年～1940 年ラジオ番組「東洋音楽鳥瞰」では東洋音楽学会会員により、中国、モンゴル、インド、朝鮮、台湾、タイ、インドネシアなど各国・民族の音楽がレコードで紹介された<sup>16)</sup>。

(2)について、1937 年「東洋音楽学会・第 3 回例会」で「田辺氏提供のホルンボステル編輯の世界音楽レコードの一部を演奏(筆者注:再生の意)」(1937『東洋音楽研究』1 巻 1 号:95)した。

秀雄がコロムビアのレコード部に勤務していた関係で、田辺はコロムビアと SP 制作の交渉をしたものの、難色を示した。「国策としてもこれを出す必要があるだと考えて、直接、軍に相談した…中略…コロムビア会社でも軍の命令とあっては拒絶することもできず、どうせ売れないものだからと言って、アルバム 300 だけを作製して発表した。ところが…中略…発売当日に 3000 部の注文があった」(田辺 1979 年 12 月:121)。

また、収録音源について「満州、中国、タイ、インドネシア、インド、アラビアの諸国に亘る 10 時 10 枚(20 面、20 曲)で、私が集めたものと中国や満州のレコード会社に録音させたものと及びホルンボステル制作の“Musik des Orients”から数枚を加えたもの」(田辺 1982:487)と説明した。「中国や満州のレコード会社に録音させたもの」は田辺による現地録音《山莊春曉》《蟠桃会》を指す。ホルンボステル編集による SP『Musik des Orient』からジャワ 3 曲、バリ 2 曲、タイ:1 曲、インド:1 曲、イラン:1 曲の計 8 曲を借用した(梅田 1998、鈴木 2019 参照)。それ以外の 10 曲が「私が集めたもの」だと推察される。

1937 年 11 月『東洋音楽研究』「内外ニュース」には「このアルバム(筆者注:Musik des Orients)は、多少の補正を加え本学会の後援

の下に、近く日本コロムビアから一般に発売される筈」(『東洋音楽研究』1 巻 1 号:96)と記載がある。つまり、元々、ホルンボステル編集 SP 音源を中心としたレコードを、コロムビアから発売する計画だったのである。

また、1940 年に「国策となった大東亜共栄圏建設という政治的イデオロギーと、このレコードの刊行は無関係ではない」(梅田 1998:172)。大東亜共栄圏とは「中国や東南アジア諸国を欧米帝国主義国の支配から解放し、日本を盟主に共存共栄の広域経済圏をつくりあげるという主張。太平洋戦争期に日本の対アジア侵略戦争を合理化するために唱えられたスローガン」(小林 2020)である。田辺は「今日我が日本は大東亜共栄圏の新文化建設という一大使命を持って居る。それには先ず第一に東亜各民族の固有文化の真相を明らかに知ることが必要である。——否、これを明知しなければ、如何なる文化建設も出来る筈はない」(田辺 1997:26)とその意義を唱えた。

大東亜共栄圏建設の実現に向け、SP 発売後もアジアの音楽を収録したレコードが相次いで刊行された。コロムビアは「SP『東亜の音楽』の絶讃にこたえて贈る第 2 弾」(1942 年 5 月 20 日『音楽文化新聞』)として、1942 年 SP『南方の音楽』(全 6 枚)を発売した。SP『南方の音楽』ポスター(図 7 参照)を見ると、「南方は斯くも美しい音楽の宝庫だ!」と銘打ち、東洋音楽学会:田辺尚雄・黒沢隆朝・榊原次郎の共同監修による「秦、瓜哇(筆者注:ジャワ)・バリ島、仏印・ビルマ・馬來・スマトラ等南方諸民族の代表的民族音楽集成」と大々的に宣伝した。

ビクターもコロムビアに対抗するべく、1942 年 SP『大東亜音楽集成』(全 12 巻)(図 8 参照)を発売した。同 SP は「東洋音楽学会編集ということにし、会員榊原次郎氏が現地で数年に亘り収集したレコードを中心に…中略…中国や安南(ベトナム)、タイ、ジャバ、スマトラ、マレイ、インドなど東南アジア諸国に属するものが」(田辺 1982:488)収録された。

また、民族音楽学者・黒沢隆朝は 1943 年台湾調査で現地録音を実施し、「その成果を録音盤『台湾民族音楽』(SP10 インチ盤 26 枚)として同年 12 月完成し、これを発表した」(黒沢 1973:4)。調査は日本ビクターの録音班と現地の調査班で分担したため、アセテート盤録音を実施したのはビクターの録音技師・山形高靖<sup>17)</sup>であった(黒沢 1973:471)。1940 年田辺の満州調査と同様、録音をレコード会社など他の機関へ委託できる時代に突入したのである。

## 9. まとめ

以上の考察により、以下 3 点が結論として述べられる。

### 9.1 音律調査研究と民族音楽調査

田辺は 1921 年朝鮮調査で楽器の音律測定を実施する目的で振動数測定装置を使用した。全 7 回に及ぶアジア・沖縄の民族音楽調査の中で、振動数測定装置を持参したのは朝鮮調査のみである。これは田辺が東京帝国大学及び同大学院で物理学、音響学を専攻し、1908 年理学博士・中村清二の指導により日本や中国の楽律研究に従事していたことに起因する(蒲生編 1970:123 参照)。そして、1920 年正倉院や宮中所蔵楽器の音律調査に携わり、その成果を同年 7 月

『帝室博物館学報』で発表した。その1ヶ月後の1921年8月に朝鮮調査は行われた。よって、朝鮮調査における音律測定は正倉院等の音律研究と連動している。

さらに、1923年中国調査には音叉を、1940年満州調査には音叉と調子笛を持参した。一方、携帯録音機を持参し、自身で録音をすることを調査の中心に据えた4地域(台湾、沖縄、樺太、南洋)には音律測定機材を持参していない。20年に亘る民族音楽調査において、音律に関わる研究志向が控えめながら貫かれていた。

## 9.2 携帯型録音機材の開発と活用

田辺は録音用の携帯型機材を台湾、沖縄、樺太、南洋調査に持参した。1922年～1923年台湾・沖縄・樺太調査では写声蓄音器を、1934年南洋調査では日の本写音機を使用した。特に、日本写声蓄音機合資会社製の写声蓄音器の開発には1921年以降、田辺が顧問として携わっていた。写声蓄音器の開発・普及を強力に進めたい日本写声蓄音機合資会社側と、蓄音器の啓蒙活動を推進していた田辺の意図が互いに一致していたと考えられる。

1934年南洋調査では家庭用の録音機「日の本写音機」を既に販売していた日の本商会へ、調査用の携帯型録音機を発注した。田辺は日頃から録音機材に関する最新の情報を『音楽見聞録』に書き写しており、朝岡健製作による日の本写音機を基に、より手軽で正確な録音機材の開発を依頼した。

録音機材の開発と、民族音楽調査における活用実績は連動しており、ある意味、録音実験の現場だったともいえる。

## 9.3 蓄音器・レコードの啓蒙活動と講演・講義での活用

田辺は6地域(南洋以外)の調査で講演した際、レコードを蓄音器で再生しながら音楽について解説した。このことは日頃の教育・研究活動において蓄音器・レコードを積極的に活用したことを反映している。1917年以降、蓄音器・レコードに関する論考を雑誌『蓄音器世界』『音楽と蓄音器(機)』に投稿し、1922年にはそれらを集成した著書『家庭に必要な蓄音機の知識』を発表した。特に、1923年文部省のレコード推薦委員に任命されて以降、あらゆるレコードを聴取できる社会的環境が整った。

また、教育活動に目を向けると、1907年東洋音楽学校に務めて以降、講義にも積極的に蓄音器・レコードを活用した。1908年には一般の公開講演でもレコードを使用し、1917年日本音楽発達史に関する講演では蓄音器・レコードと実演(歌唱・箏演奏)を交えて解説した。

大衆への蓄音器・レコードの啓蒙活動、そして、講演・講義での活用実績を踏襲し、民族音楽調査で訪れた地域でも講演会を通じて、同様の啓蒙活動を展開したのである。

## 謝辞

本論をまとめるにあたり、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、国立劇場調査養成部には貴重な文献・音源資料を御提供頂いた。大西秀紀氏には数々のご教示を頂き、川鍋かつら氏には調査にご協力頂いた。ここに記して感謝申し上げたい。

本研究は日本学術振興会科学研究費(平成29～32年度、基盤研究(C)17K02365:研究代表者・高橋美樹)「沖縄音楽における現地録音の歴史的研究 一田辺尚雄からLP『沖縄音楽総攬』まで」の助成を受けたものである。

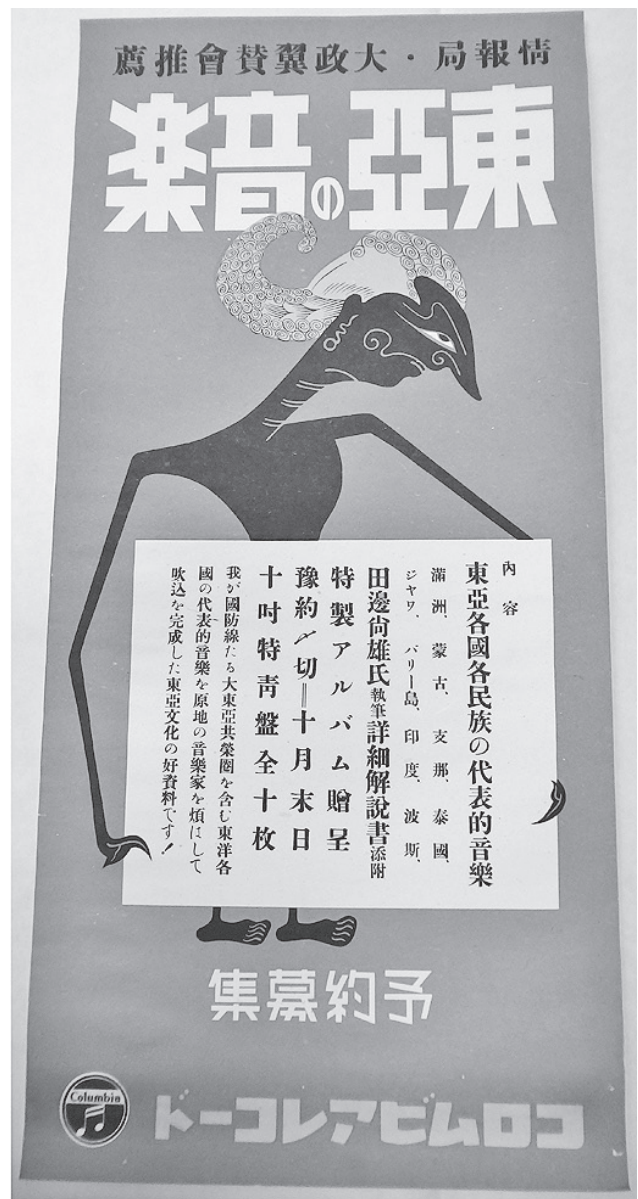


図6 SP『東亜の音楽』ポスター  
(コロムビア、S-6001～S-6010、1941年)(国立劇場所蔵)



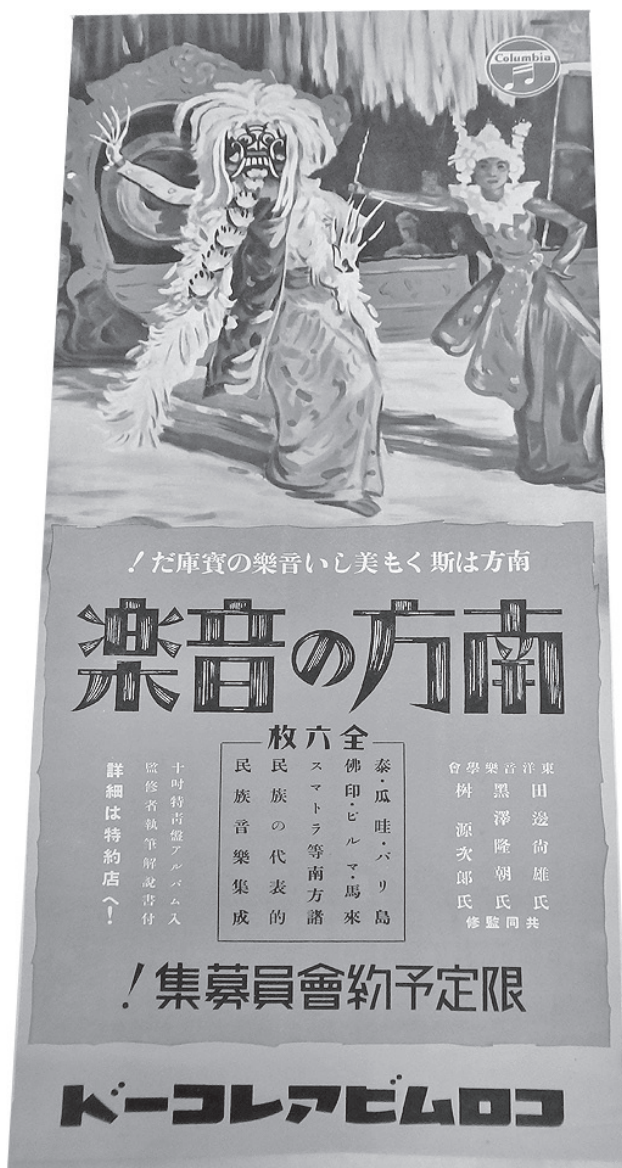


図7 SP『南方の音楽』ポスター  
(コロムビア、S-6016～S-6021、1942年) (国立劇場所蔵)



図8 SP『大東亜音楽集成』ポスター  
(ビクター、VK-3501~3536、1942~1943年)(国立劇場所蔵)

注

1) 蒲生 1970:124 に「財団法人啓明会より東洋音楽研究につき研究費金壹万円の補助を受ける(4年間支出)」とある。田辺は1919年～1943年まで継続して補助金を授受しており、『財団法人啓明会事業報告 第25回(昭和18年度)』には「東洋音楽理論の科学的研究:田辺尚雄/3ヵ年に金1万円の補助(2回に決定)」(啓明会編1944:11)とある。

2) 田辺 1933 年 11 月には宮内省・雅楽レコード、ビクターSP『蘭陵王』、古曲保存会『平安朝レコード』に関する記述がある。

3) 金志善編 2019 によると、『京城日報』に初めて日本のレコード広告が掲載されたのは、1911 年 5 月 11 日『京城日報』4 である。同広告には「朝鮮特約大販売店/京城本町 2 丁目「辻屋」電

話 248 番: 振替口座 87 番」とある。日本蓄音器商会は『毎日申報』(朝鮮総督府の機関紙。朝鮮語)1912 年 1 月 14 日、17 日、19 日、21 日に「広告: 蓄音器/朝鮮音譜多数着荷—日本蓄音器商会」を掲載した(金 2017:42 参照)。また、浪曲師・吉田奈良丸(2 代目)が来朝した際、同商会は 1915 年 10 月 1 日『京城日報』夕刊:2 に広告を掲載した。1912 年 4 月 17 日『大阪朝日新聞』7 の広告に、同商会は「朝鮮出張所: 京城本町 5 丁目」とある。

4)「第 3 回 満蒙の音楽」は 1939 年 4 月 15 日滝遼一の解説により放送され、オロチョン民謡、蒙古音楽、満州音楽が紹介された(1939『東洋音楽研究』2 巻 1 号:87)。

5) 完成年は鈴木 2019:174 に拠る。

- 6) 文部省レコード推薦事業について、倉田 1979:136-242、田辺 1926 年 10 月:7-11、田辺 1977 年 9 月:101-105、田辺 1982:354-357 を参照されたい。
- 7) 蒲生 1970:123 には「私立東洋音楽学校講師として音響学および音楽史講義」とある。
- 8) 開催年は寺田 1997:2 に拠る。
- 9) 同講演について鈴木 2019:134 は「ときに田辺が雅楽の笙を演奏したり」と記した。だが、講演に笙の話題は出るものの、演奏はしていない。
- 10) 田辺 1917b 年 5 月も日本音楽の発達史に関する講演記録である。蓄音器・レコードは別記されたが、実演の記録はない。
- 11) 「写音機」とは別に「写声機」という用語もある。1903 年 12 月、東京銀座の天賞堂が「最新発明一大進歩/写声機(グラホフォン)と平円盤発売広告」を掲載した(1903 年 12 月 8 日『朝日新聞』8)。蠟管を用いる蓄音機(フォノグラフ)と区別するため、写声機という新語を用いたという(江澤 1939:101)。
- 12) 民謡研究家・町田嘉章は 1937 年「町田式写音機」と呼ぶ録音機を携帯し、民謡の録音・採集を開始した(島添 2012 参照)。町田も日の本商会製「日の本写音機」を 1937 年東北の民謡調査で使用したが、青森県調査の際、故障した(町田 1973 年 1 月:107)。
- 13) 田辺尚雄編輯「(403) [簡単な家庭吹込機]」「(410) [家庭吹込機]」『音楽見聞録』11 集、pp. 1-21、35-36 参照。『音楽見聞録』全 53 冊(1920-1977)は田辺直筆による研究記録で国立劇場に所蔵されている。音楽全般を対象に研究者、演奏家の談話聞き書き、手紙の写し、新聞雑誌記事の写しや切抜きの貼付を含む毛筆和装の覚書である。
- 14) 1938 年 SP『蒙古の音楽』収録曲は 1938『東洋音楽研究』1 巻 3 号:69 参照。1938 年 SP『印度の音楽』書評は岸辺 1938 参照。なお、SP『印度の音楽』は 1968 年 LP『ウダイ・シャンカール音楽舞踊団:インド音楽の神髄』(日本ビクター、SRA2520)として復刻された。
- 15) 発売年は鈴木 2019:269 に拠る。梅田 1998 では「1931 年発売」とある。
- 16) 1939『東洋音楽研究』2 巻 1 号:87-88、1940『東洋音楽研究』2 巻 2 号:136-137 参照。
- 17) 山形高靖の「台湾民族音楽調査録音日記」は劉 2016:25-36 を参照されたい。

#### 【1921 年:朝鮮調査】参考文献

- 植村幸生 1997「植民地期朝鮮における宮廷音楽の調査をめぐって:田辺尚雄「朝鮮雅楽調査」の政治的文脈」『朝鮮史研究会論文集』35 号、朝鮮史研究会、pp. 117-144
- 植村幸生 2000「田辺尚雄の朝鮮宮廷音楽調査(1921)が問いかけるもの」Music Scape 編『季刊エクスムジカ』ブレ創刊号、pp. 33-41

- 植村幸生 2014『『東洋音楽』という夢—解題にかえて』田辺尚雄『東洋音楽史』平凡社、pp. 381-409
- 金志善 2017「植民地朝鮮における日本人音楽家による音楽会—韓国西洋音楽受容史の一側面として—」『東京藝術大学音楽学部紀要』42 巻、pp. 27-47
- 金志善編 2019『京城日報音楽関連記事・広告目録集』民俗苑
- 具仁謨 2011「韓国近代詩におけるメディア越境の体験」波田野節子[訳]『朝鮮学報』218 巻、朝鮮学会、pp. 39-79
- 田辺尚雄 1921a「朝鮮李王家の古楽舞—我が宮中の舞楽との関係」笠森伝繁編『啓明会 第 5 回講演集』啓明会事務所
- 田辺尚雄 1921 年 4 月「朝鮮李王家に伝はる古楽(1)」『音楽と蓄音器』8 巻 4 号、pp. 1-6
- 田辺尚雄 1921 年 5 月「論説 日鮮融和と音楽」「平壤の妓生学校参観記」「朝鮮音楽研究日記」「李王家雅楽隊の状況」「朝鮮に於ける日本音楽」「大同江の 1 日」『音楽と蓄音器』8 巻 5 号、pp. 1-47、58-61、61-86、86-88、88-92、92-98
- 田辺尚雄 1921 年 6 月「朝鮮李王家に伝はる古楽(3)」『彙報:朝鮮古楽の活動写真』「平壤の妓生学校の組織に就て」『音楽と蓄音器』8 巻 6 号、pp. 1-12、19、31-32
- 田辺尚雄 1921 年 8 月「朝鮮李王家に伝はる古楽(5)」『音楽と蓄音器』8 巻 8 号、pp. 4-16
- 田辺尚雄 1921 年 9 月「朝鮮李王家に伝はる古楽(6 完結)」『音楽と蓄音器』8 巻 9 号、pp. 4-14
- 田辺尚雄 1923a「台湾及琉球の音楽に就きて」笠森伝繁編『啓明会 第 8 回講演集』啓明会事務所
- 田辺尚雄 1923a 年 2 月「朝鮮音楽考(上)口繪付」『東洋学芸雑誌』38 巻 7 号、pp. 1-8
- 田辺尚雄 1923b 年 3 月「朝鮮音楽考(中)(承前)」『東洋学芸雑誌』38 巻 8 号、pp. 327-336
- 田辺尚雄 1923c 年 4 月「朝鮮音楽考(下)(承前、完)」『東洋学芸雑誌』38 巻 9 号、pp. 10-19
- 田辺尚雄 1933 年 11 月「邦楽古レコードの話」『レコード音楽』7 巻 11 号、名曲堂、pp. 6-11
- 田辺尚雄 1939 年 6 月「日支音律関係と李王家雅楽」『東洋音楽研究』2 巻 1 号、東洋音楽学会、pp. 67-68
- 田辺尚雄 1970「朝鮮(大正 10 年:1921)」東洋音楽学会編『中国・朝鮮音楽調査紀行』音楽之友社、pp. 27-218
- 田辺尚雄、植村幸生(校注)2014『東洋音楽史』平凡社(初版 1930『東洋史講座 第 13 巻』雄山閣)
- 東洋音楽学会 2016『東洋音楽学会創立 80 周年記念記録集 1 大会篇(1950 年-2015 年)』
- 廣井榮子 2010「花街に創出された異空間—大正期の都をどりにおける琉球と朝鮮の事例をめぐって—」『近代日本における音楽・芸能の再検討:日本伝統音楽研究センター研究報告 5』pp. 91-107



山本華子 2009 「田辺尚雄の朝鮮雅楽調査がもたらしたもの」『翰林日本学』14 輯、翰林大學校日本學研究所、pp. 25-48

山本華子 2011 『李王職雅楽部の研究』書肆フローラ

1911 年 5 月 11 日「広告: 日本音譜/朝鮮音譜/蓄音器」『京城日報』p. 4

1912 年 4 月 17 日「広告: 日本蓄音器商会/朝鮮、台湾出張所」『大阪朝日新聞』p. 7

1915 年 10 月 1 日「広告: 日本蓄音器商会/浪界の泰斗・吉田奈良丸来る」『京城日報』夕刊、p. 2

1921 年 2 月 1 日「広告: 日本蓄音器商会/ニッポノホン/蓄音器」『京城日報』朝刊、p. 1

1921 年 4 月 3 日「李王家に伝わる古楽器の芸術的薫香を訪ねて/田辺尚雄氏入城」『京城日報』p. 5

1921 年 4 月 6 日「広告: 音楽大講演会」蓄音器も聴ける音楽講演会 6 日午後 4 時より南山高等女学校で訊け! 田辺氏の講話」『京城日報』朝刊、p. 5

1921 年 4 月 9 日「音楽上に於ける内鮮の関係(2) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 1 (連載第 1 回記事不明)

1921 年 4 月 10 日「音楽上に於ける内鮮の関係(3) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 1

1921 年 4 月 12 日「音楽上に於ける内鮮の関係(4) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 1

1921 年 4 月 13 日「音楽上に於ける内鮮の関係(5) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 1

1921 年 4 月 13 日「朝鮮古楽撮影」「愛婦講演会」「朝鮮古楽の復興協議」『京城日報』朝刊、p. 5

1921 年 4 月 15 日「日本の家庭と音楽(1) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 4 (全 11 回連載: 1921 年 4 月 15 日～27 日)

1921 年 4 月 15 日「盛況なりし田辺氏講演会/1 時間の熱弁」『京城日報』朝刊、p. 5

1921 年 4 月 23 日「日本の家庭と音楽(9) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 4

1921 年 4 月 27 日「日本の家庭と音楽(11) 宮内省楽寮音楽講師田辺尚雄氏講演」『京城日報』朝刊、p. 4

1921 年 6 月「美しい宴舞楽と雅楽を/田辺尚雄氏の講演日程」『音楽と蓄音器』8 巻 10 号、pp. 54-56

1921 年 10 月 5 日「美しい宴舞楽と雅楽をフィルムとレコードで髣髴させた本社楼上の李王家音楽講演会」『朝日新聞(大阪)』p. 11

1922 年 4 月 1 日「雅楽師長を置いて朝鮮音楽を奨励」『読売新聞』p. 5

#### 【1922 年: 台湾調査】参考文献

植村幸生 2003 「日本人による台湾少数民族音楽の研究—田辺・黒沢・小泉の業績を中心に」『上越教育大学研究紀要』22 巻 2 号、pp. 301～313

田辺尚雄 1922 年 4 月「台湾蕃人音楽研究の二大必要」『音楽と蓄音器』9 巻 4 号、pp. 11-14

田辺尚雄 1922 年 5 月 15 日「台湾土産」『時事新報』

田辺尚雄 1922 年 6 月「尊敬すべき生蕃の人格と其音楽」「台湾音楽研究旅行記」「台湾生蕃の種族」「生蕃ローマンス」『音楽と蓄音器』9 巻 6 号、pp. 2-7、8-80、81-84、85-88

田辺尚雄 1922 年 8 月 5 日「生蕃の音楽と舞踊(1)/写真: 台車」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 6 日「生蕃の音楽と舞踊(2)/写真: 蕃舎」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 7 日「生蕃の音楽と舞踊(3)/写真: 蕃童学校の児童」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 8 日「生蕃の音楽と舞踊(4)/写真: 霧社蕃婦の首狩踊」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 9 日「生蕃の音楽と舞踊(5)/写真: 頭目の蕃屋」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 10 日「生蕃の音楽と舞踊(6)/写真: 蕃人の首狩踊」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 11 日「生蕃の音楽と舞踊(7)/写真: 水社化蕃の杵楽」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 12 日「生蕃の音楽と舞踊(8)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 8 月 13 日「生蕃の音楽と舞踊(完)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922 年 12 月「臺灣音楽考(1)」『學藝』40 巻 495 号、東京社、pp. 48-53

田辺尚雄 1923a 「台湾及琉球の音楽に就きて」笠森伝繁編『啓明会 第 8 回講演集』啓明会事務所

田辺尚雄 1923b 「台湾と厦門」『第一音楽紀行』文化生活研究会、pp. 1-136

田辺尚雄 1923d 年 1 月「朝鮮・琉球・台湾の音楽」『女性改造』2 巻 1 号、pp. 83-94

田辺尚雄 1923e 年 1 月「臺灣音楽考(2)」『學藝』40 巻 496 号、東京社、pp. 91-95

田辺尚雄 1923f 年 2 月「臺灣音楽考(3)」『學藝』40 巻 497 号、東京社、pp. 55-61

田辺尚雄 1923g 年 4 月「臺灣音楽(4)」『學藝』40 巻 499 号、東京社、pp. 69-75

田辺尚雄 1923h 年 5 月「臺灣音楽考(5)」『學藝』40 巻 500 号、東京社、pp. 49-52

田辺尚雄 1923i 年 6 月「臺灣音楽考(6)」『學藝』40 巻 501 号、東京社、pp. 90-94

田辺尚雄 1927「台湾蕃人の音楽と踊り」『島國の唄と踊』磯部甲陽堂、pp. 225-274

田辺尚雄 1968「台湾と厦門」東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社、pp. 173-252

田辺尚雄 1982「台湾高砂族音楽調査／中国福建省厦門行」『続田辺尚雄自叙伝』邦楽社、pp. 122-144

1922年3月24日「音楽研究の世界的学者田辺理学士の来台」『台湾日日新報』

1922年3月26日「台湾蕃人の撫育と統治に貢献」『台湾経世新報』

1922年4月「蠻人音楽研究の爲 田辺理学士の渡台」『音楽と蓄音器』9巻4号、pp. 56-61

1922年4月5日「音楽の文化的使命/田辺氏の音楽談(中)」『台湾日日新報』

1922年4月6日「音楽の文化的使命/田辺氏の音楽談(下)」『台湾日日新報』

1922年4月13日「田辺理学士のレコードコンサート/15日附属小学の講堂で」『台湾日日新報』

1922年4月22日「蕃謡レコード田辺氏の贈呈」『台湾日日新報』

1922年4月27日「首斬りの唄を蓄音機に/台湾生蕃の唄や踊りを研究し田辺氏帰る」『時事新報』

1922年5月「口絵写真□亜細亜音楽調査材料蒐集の目的にて渡台び途に上られし理学士田辺尚雄氏」『音楽と蓄音器』9巻5号

1922年5月2日「3つに分類される台湾の蕃界歌謡」『台南新報』

1922年6月「口絵写真□蕃人の音楽 他」「生蕃の歌謡」『音楽と蓄音器』9巻6号

#### 【1922年：沖縄調査】参考文献

高橋美樹 2017「田辺尚雄の沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年)―『田辺文庫』を基礎資料として」『高知大学教育学部研究報告』77号、pp. 149-177

高橋美樹 2019「田辺尚雄における沖縄・八重山諸島音楽現地調査(1922年)の成果と社会的還元 ―JOAK「日本音楽史講座」、歌舞伎舞踊劇『与那国物語』をめぐって」『高知大学教育学部研究報告』79号、pp. 203-232

高橋美樹 2020「沖縄県立芸術大学附属図書館田辺文庫所蔵・SPレコード目録―田辺尚雄旧蔵・最古の沖縄音楽レコードを探る」『高知大学教育学部研究報告』80号、pp. 255-292

田辺尚雄 1922a年9月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(1)」『音楽と蓄音機』9巻9号、pp. 34-42

田辺尚雄 1922b年10月「レコードに及ぼす湿気の害に就て」『琉球及八重山群島音楽研究旅行記(2)』『音楽と蓄音機』9巻10号、pp. 2-5、34-43

田辺尚雄 1922c年11月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(3)」『音楽と蓄音機』9巻11号、pp. 39-48

田辺尚雄 1922年9月24日～10月5日「世界第一の民謡を持つ八重山(1)-(10)」『東京日日新聞』

田辺尚雄 1922d年11月「八重山群島の民謡」『詩と音楽』1巻3号、pp. 71-77

田辺尚雄 1923a「台湾及琉球の音楽に就きて」笠森伝繁編『啓明会 第8回講演集』啓明会事務所

田辺尚雄 1923b「琉球と八重山」『第一音楽紀行』文化生活研究会、pp. 139-256

田辺尚雄 1923d年1月「朝鮮・琉球・台湾の音楽」『女性改造』2巻1号、pp. 83-94

田辺尚雄 1923j年1月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(4)」『音楽と蓄音機』10巻1号、pp. 58-61

田辺尚雄 1923k年2月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(5)」『音楽と蓄音機』10巻2号、pp. 12-26

田辺尚雄 1923l年3月「琉球及八重山群島音楽研究旅行記(6)」『音楽と蓄音機』10巻3号、pp. 20-42

田辺尚雄 1927「歌と踊の国―琉球」『島國の唄と踊』磯部甲陽堂、pp. 169-224

田辺尚雄 1932年2月「郷土音楽」『郷土史研究講座』5号、雄山閣、pp. 1-37

田辺尚雄 1968「沖縄(1922年)」東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社、pp. 253-319

山内盛彬 1922年10月「田邊先生来県印象記」『音楽と蓄音機』9巻10号、pp. 72-77

1922年7月27日「田辺氏昨朝来県」『沖縄タイムス』

#### 【1923年：中国調査】参考文献

田辺尚雄 1923m年9月「支那音楽雑考」『東洋学芸雑誌』40巻504号、pp. 36-41

田辺尚雄 1970「中国」東洋音楽学会編『中国・朝鮮音楽調査紀行』音楽之友社、pp. 219-470

田辺尚雄 1982「中国音楽調査旅行」『続 田辺尚雄自叙伝』邦楽社、pp. 167-191

1921年11月8日「東京帝国大学邦楽会：第2回演奏会(於：帝劇)宮城道雄」『朝日新聞』p. 7

1923年4月21日「支那音楽の研究家/田辺理学士は今晚日俱で講演」『上海日日新聞』

1923年4月25日「支那の音楽(1)於上海/田辺尚雄氏講演」『京津日日新聞』

1923年5月12日「田辺楽師之講演/14日北京大学」『順天時報』

1923年5月13日「支那の音楽(2)於上海/田辺尚雄氏講演」『京津日日新聞』

1923 年 5 月 15 日「支那の音楽(3) 於上海/田辺尚雄氏講演」『京津日日新聞』

1923 年 5 月 15 日「田辺理学士音楽講演/明日クラブで」『新支那』

1923 年 5 月 16 日「支那の音楽(4) 於上海/田辺尚雄氏講演」『京津日日新聞』

1923 年 5 月 17 日「支那の音楽(完) 於上海/田辺尚雄氏講演」『京津日日新聞』

#### 【1923 年：樺太調査】参考文献

甲地利恵 2012「田辺尚雄氏ノートに記された 1923 年 6 月の『東京人類学会例会』『アイヌ民族文化研究センターだより』36 号、p. 3

篠原智花・笹倉いる美 2007「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について(1)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16 号、pp. 77-98

篠原智花・笹倉いる美 2008「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』17 号、pp. 59-72

持田誠 2014「北海道立北方民族博物館所蔵田辺尚雄氏資料に含まれる鉄道資料」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23 号、pp. 87-102

田辺尚雄 1926「[12] アイヌ人の音楽と 舞踊」『日本音楽の研究』京文社、pp. 106-118

田辺尚雄 1927「樺太土人の音楽」『島国の唄と踊』磯部甲陽堂、pp. 113-168

田辺尚雄 1982「樺太アイヌ、ギリヤーク、オロッコ音楽調査」『続 田辺尚雄自叙伝』邦楽社、pp. 197-207

谷本一之 2000『アイヌ絵を聴く：変容の民族音楽誌』北海道大学図書刊行会

1923 年 6 月 16 日「アイヌ婦人が帝大で神曲演奏/金田一学士が解説する」『読売新聞』朝刊、p. 4

1923 年 6 月 17 日「写真：アイヌの即興詩人鍋澤雪子嬢(23)」『読売新聞』朝刊、p. 4

#### 【1934 年：南洋調査】参考文献

石村智 2017「[資料紹介] 田辺尚雄の南洋調査ノート」『無形文化遺産研究報告』11 号、国立文化財機構東京文化財研究所、pp. 115-124

田辺尚雄 1934 年 11 月「南洋の音楽と踊一踏査記」『月刊楽譜』23 卷 11 月号、pp. 58-65

田辺尚雄 1935「マーシャル及カロリン群島に於ける音楽と舞踊」『民族学研究』1 卷 2 号、pp. 258-276

田辺尚雄 1941「南洋群島の音楽舞踊研究旅行談」『東洋音楽の印象』人文書院、pp. 159-239

田辺尚雄 1968「南洋(1934 年)」東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社、pp. 15-171

田辺尚雄 1978 年 6 月「連載思い出ばなし=15 ミクロネシア群島」『季刊邦楽』15 号、邦楽社、pp. 67-71

田辺尚雄 1982「南洋旅行」『続 田辺尚雄自叙伝』邦楽社、pp. 439-455

1934 年 11 月「口絵：写真：田辺尚雄氏の南洋みやげ」『月刊楽譜』23 卷 11 月号

1934 年 9 月 29 日「学者と音楽家の南洋みやげ」『報知新聞』夕刊

1934 年 9 月 30 日「南洋歌士産/田辺尚雄氏の珍談」『朝日新聞』p. 15

1934 年 9 月 30 日「南洋から帰る/田辺尚雄や松山博士」『読売新聞』夕刊、p. 2

1934 年 11 月 5 日「ラジオ趣味講演/音楽と舞踊から見た南洋の文化/田辺尚雄」『朝日新聞』p. 7

1934 年 11 月 5 日「ラジオ趣味講演：午後 6・25/南洋の音楽と舞踊/田辺尚雄」『読売新聞』p. 10

#### 【1940 年：満州調査】参考文献

田辺尚雄 1934「満州帝国と礼楽」『東亜民族文化協会パンフレット第 4 篇』東亜民族文化協会、pp. 1-27

田辺尚雄 1940 年 11 月「満州音楽視察談」『音楽倶楽部』1940 年 11 月号、音楽世界社、pp. 56-65

田辺尚雄 1941「満洲音楽視察談—日本音響学会における講演」『東洋音楽の印象』人文書院、pp. 94-131

田辺尚雄 1970「満州」東洋音楽学会編『中国・朝鮮音楽調査紀行』音楽之友社、pp. 343-412

田辺尚雄 1978 年 9 月「思い出ばなし=16：熱河離宮の雅楽とラマの音楽」『季刊邦楽』16 号、邦楽社、pp. 109-113

田辺尚雄 1978 年 12 月「思い出ばなし=17：孔子廟祭典と吉林の雅楽」『季刊邦楽』17 号、邦楽社、pp. 46-50

田辺尚雄 1982「第一次満州旅行」『満州旅行』『続 田辺尚雄自叙伝』邦楽社、pp. 295-304、455-470

1940 年 9 月 5 日「講演と音楽の夕」『満洲新聞』朝刊、p. 3

1940 年 9 月 7 日「田辺氏の音楽講演」『満洲日日新聞』夕刊、p. 2

1940 年 9 月 10 日「世界に冠たる満州の古典楽」『満洲新聞』朝刊、p. 7

1940 年 9 月 11 日「“古典楽を研究” 田辺氏新京へ」『満洲日日新聞』朝刊、p. 7

.....

#### 【共通／その他】参考文献

安藤穰 1963 年 10 月「戦時レコード企業の海外進出：支那・仏印編」『Record』8 卷 9 号、日本蓄音機レコード協会、pp. 6-7

上眞行・多忠基・田辺尚雄 1921 年 7 月「正倉院樂器の調査報告」『帝室博物館学報』2 巻、帝室博物館

梅田英春 1998「視聴覚資料評:CD『東亜の音楽』」『東洋音楽研究』63 号、東洋音楽学会、pp. 170-173

江澤謙二郎 1939『商道之先駆:天賞堂五十年回顧』四海書房

大藤時彦・柳田為正編 1981『柳田国男写真集』岩崎美術社

岡田則夫 1993 年 2 月「第 26 回続・蒐集奇談/ビクターの SP」『レコード・コレクターズ』12 巻 2 号、p. 80、pp. 90-94

葛西周 2015「日中戦争期の満洲における文化工作および音楽ジャンル観に関する考察」馬場毅編『多角的視点から見た日中戦争』集広舎、pp. 175-196

亀村正章 2006「田辺尚雄・秀雄氏旧蔵歴史的音源資料:平安朝音楽レコード」『日本伝統音楽資料集成 6 巻:日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、pp. 11-24

蒲生郷昭編 1970「田辺尚雄先生の年譜・業績目録」『東洋音楽研究』28・29 号、東洋音楽学会、pp. 123-128

貴志俊彦 2011「東アジアにおける『流行歌』の創出—クロスオーバーするレコードと音楽人」和田春樹・後藤乾一他編『アジア研究の来歴と展望(岩波講座 東アジア近現代通史別巻)』岩波書店、pp. 313-336

貴志俊彦・川島真編 2015「東アジア・ラジオ放送関連年表」『増補改訂 戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版、pp. 552-569

岸辺成雄 1938「批評」『東洋音楽研究』1 巻 4 号、東洋音楽学会、pp. 71-73

倉田喜弘 1979『日本レコード文化史』東京書籍

黒沢隆朝 1973『台湾高砂族の音楽』雄山閣

啓明会編 1944「2. 東洋音楽理論の科学的研究(田辺尚雄)」『財団法人啓明会事業報告 第 25 回(昭和 18 年度)』p. 11

小林英夫 2020「大東亜共栄圏」『日本大百科全書』小学館

島添貴美子 2012『『日本民謡大観』前夜:町田嘉章の初期の民謡調査』細川周平編著『民謡からみた世界音楽』ミネルヴァ書房、pp. 121-137

白戸健一郎 2016『満洲電信電話株式会社』創元社

鈴木聖子 2014『「科学」としての日本音楽研究:田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築』東京大学博士論文

鈴木聖子 2019『〈雅楽〉の誕生:田辺尚雄が見た大東亜の響き』春秋社

高橋美樹 2010「近代沖縄における録音メディアの導入 —ニッソーレコード制作の八重山民謡 SP 盤を対象として—」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要:沖縄芸術の科学』22 号、pp. 91-122

高橋美樹 2011「レコードに初めて録音された沖縄音楽 —1915 年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して—」『高知大学教育学部研究報告』71 号、pp. 229-242

田辺尚雄 1908『音響と音楽』弘道館

田辺尚雄 1915『西洋音楽講話』岩波書店

田辺尚雄 1917a「音楽の話(1)」『国学院雑誌』23 巻 6 号、pp. 39-61

田辺尚雄 1917b「音楽の話(2)」『国学院雑誌』23 巻 7 号、pp. 27-50

田辺尚雄 1917a 年 5 月「蓄音器の話(上・中・下)」『蓄音器世界』4 巻 5 号、pp. 118-132

田辺尚雄 1917b 年 5 月「日本音楽の発達」『明治聖徳記念学会紀要』7 巻、明治聖徳記念学会、pp. 143-155

田辺尚雄 1917 年 6 月「再び蓄音器に就て」『蓄音器世界』4 巻 6 号、pp. 143-149

田辺尚雄 1921b「第 7 章:本会雅楽レコードの曲の解説」『雅楽通解』古曲保存会、pp. 138-168

田辺尚雄 1922『家庭に必要な蓄音機の知識』文化生活研究会

田辺尚雄 1924 年 8 月「蓄音器と音楽の使命」『蓄音器と音楽』1 巻 1 号、pp. 4-8

田辺尚雄 1926 年 10 月「文部省レコード推薦事業の生い立ちに就て」『音楽と蓄音機』13 巻 10 号、pp. 7-11

田辺尚雄 1931『蓄音機とレコードの撰び方・聴き方』先進社

田辺尚雄 1941『東洋音楽の印象』人文書院

田辺尚雄 1943『大東亜の音楽』協和書房

田辺尚雄 1965『明治音楽物語』青蛙房

田辺尚雄 1975 年 10 月「思い出ばなし=5 邦楽大家との出会い」『季刊邦楽』5 号、邦楽社、pp. 120-125

田辺尚雄 1976 年 4 月「思い出ばなし=7 土匪襲撃と熊との出会い」『季刊邦楽』7 号、邦楽社、pp. 93-97

田辺尚雄 1976 年 11 月「思い出ばなし=9 関東大震災物語」『季刊邦楽』9 号、邦楽社、pp. 130-134

田辺尚雄 1977 年 9 月「思い出ばなし=12 文部省のお役人」『季刊邦楽』12 号、邦楽社、pp. 101-105

田辺尚雄 1978「台湾・樺太・南洋の旅」LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(東芝 EMI、TW-80011)pp. 1-2

田辺尚雄 1979 年 12 月「思い出ばなし=21 還暦記念論文集」『季刊邦楽』21 号、邦楽社、pp. 119-123

田辺尚雄 1982『続 田辺尚雄自叙伝』邦楽社

田辺尚雄 1997「緒言」SP 復刻 CD『東亜の音楽』(コロムビア、COCG-14342) pp. 25-96

田辺秀雄 1978a「解説」LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(東芝 EMI、TW-80011)pp. 2-12

田辺秀雄 1978b「1977 年定例研究会発表要旨/田辺尚雄大正 11 年樺太、台湾高砂族、琉球、昭和 7 年南洋現地音楽調査録音盤及び録音器について」『東洋音楽研究』43 号、東洋音楽学会、pp. 160-162

寺下就編 1987『博覧会強記』エキスプラン



寺田貴雄 1997 「田邊尚雄の音楽鑑賞論:「音楽の聴き方」(1936)を中心として」『音楽教育学』27 巻 2 号、日本音楽教育学会、pp. 1-10

日本ビクター株式会社 50 年史編集委員会編 1977 『日本ビクター 50 年史』日本ビクター

細川周平 1992 年 10 月号「西洋音楽の日本化・大衆化 43:南洋」『ミュージック・マガジン』pp. 144-149

細川周平 1992 年 11 月号「西洋音楽の日本化・大衆化 44:民族音楽」『ミュージック・マガジン』pp. 164-169

堀内敬三 1931 年 12 月 4 日「田辺尚雄氏著:蓄音機とレコードの撰び方聴き方」『朝日新聞』p. 6

町田佳声 1973 年 1 月「私と柳田国男先生」『国文学解釈と鑑賞』38 巻 1 号、学灯社、pp. 105-109

山本武利 2004 年 5 月「満州における日本のラジオ戦略」『インテリジェンス』4 号、早稲田大学 20 世紀メディア研究所、pp. 12-22

劉麟玉 2006 「歴史的脈絡下における黒澤隆朝と榊原次郎の交差—台湾民族音楽調査(1943)前後の時期をめぐって」『お茶の水音楽論集特別号:徳丸吉彦先生古稀記念論文集』お茶の水音楽研究会、pp. 289-300

劉麟玉 2014 「百年後への声のメッセージ」『民博通信』144 号、国立民族学博物館、pp. 22-23

劉麟玉 2016 『榊原次郎の民族音楽研究活動の再評価:インド及び台湾民族音楽研究の視点を手掛かりに(平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金研究成果報告書:基盤研究(C)課題番号 23520171)』

1903 年 12 月 8 日「広告:天賞堂本店/写声機平円盤発売広告」『朝日新聞』p. 8

1916 年 6 月 17 日「新人物 40:音楽研究家 田辺尚雄君」『朝日新聞』p. 3

1919 年 7 月 16 日「広告:新案写音機」『朝日新聞』p. 7

1919 年 8 月 21 日「広告:写音機/日本写音機商会」『朝日新聞』p. 4

1919 年 10 月 26 日「広告:日本写音機商会」『朝日新聞』p. 1

1919 年 11 月 27 日「広告:最新の発明声の写音機/日本写音機商会」『朝日新聞』p. 7

1920 年 3 月 18 日「広告:写音機/日本写音機商会」『朝日新聞』p. 4

1921 年 1 月 13 日「広告:日本写声蓄音機合資会社」『朝日新聞』p. 5

1921 年 5 月 14 日「広告:日本写声蓄音機合資会社」『朝日新聞』夕刊、p. 3

1921 年 8 月 18 日「広告:日本写声蓄音機合資会社」『朝日新聞』夕刊、p. 1

1922 年 4 月 14 日「広告:日本写声蓄音機合資会社」『朝日新聞』夕刊、p. 3

1931 年 2 月 22 日「簡単に興味深い家庭吹込機」『東京日日新聞』p. 5

1931 年 3 月 25 日「手軽な蓄音器吹込み器/畑違いの人が新しい発明」『朝日新聞』夕刊、p. 2

1931 年 5 月 11 日「広告:日の本写音機/日の本商会」『朝日新聞』p. 7

1931 年 7 月 10 日「自分の声がすぐ聞かれる家庭吹込機」『東京日日新聞』p. 7

1937 「彙報」『東洋音楽研究』1 巻 1 号、東洋音楽学会、pp. 94-100

1938 「彙報」『東洋音楽研究』1 巻 3 号、東洋音楽学会、pp. 65-69

1939 「彙報:東洋音楽放送 第 1～3 回中央放送局」『東洋音楽研究』2 巻 1 号、東洋音楽学会、pp. 85-90

1939 年 5 月 5 日「日本ビクター満州進出」『朝日新聞』p. 4

1940 「円盤に満語の歌謡曲や漫才満蓄が国策宣揚に一役買ふ」『宣撫月報』5 巻 4 号、p. 92

1940 「彙報:東洋音楽放送 第 4～12 回中央放送局」『東洋音楽研究』2 巻 2 号、東洋音楽学会、pp. 134-139

1942 年 5 月 20 日「広告:SP『南方の音楽』コロムビア・レコード」『音楽文化新聞』日本音楽文化協会

2014 「日本ビクター」『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』ブリタニカ・ジャパン

HOSOKAWA, Shuhei, 1998, “In Search of the Sound of Empire: Tanabe Hisao and the Foundation of Japanese Ethnomusicology”, *Japanese Studies*, vol. 18, pp. 5-19.

#### 参考音源

SP『東亜の音楽』全 10 枚 (コロムビア、S-6001～6010、1941)

SP『南方の音楽』全 6 枚 (コロムビア、S-6016～6021、1942)

SP『大東亜音楽集成』全 12 巻 (ビクター、VK-3501～3536、1942～1943)

LP『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』(東芝 EMI、TW-80011、1978)

CD『SP 復刻:東亜の音楽』(コロムビア、COCG-14342、1997)

